

斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX

三田谷 I 遺跡 Vol.3

(本文・写真図版編)

2000年3月

中国地方建設局
教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX

三田谷 I 遺跡 Vol. 3

(本文・写真図版編)

2000年3月

建設省中国地方建設局
島根県教育委員会

序 文

建設省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実際に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成3年度から島根県教育委員会のご協力のもとに調査を行っています。今回調査箇所からは縄文時代から中世に至るまで、発見されたものが幅広い年代に及んでいます。

建設省出雲工事事務所といたしましては、今後も同教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の記録保存のため調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が埋蔵文化財に対するより一層の关心とご理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所

所長 久保田 荘一

序 文

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局からの委託を受け、平成3（1991）年度以来、斐伊川放水路建設予定地内遺跡の発掘調査を行っています。本書は、平成6・7（1994・1995）年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、三田谷I遺跡（第1次）について、その調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲東部の出雲市周辺地域は、島根県下でも有数の遺跡集中地区であり、歴史的文化遺産に恵まれたところとして知られています。今回の調査は、神戸川との合流部に近い出雲市上塩冶町半分地区に所在する集落遺跡について行いました。調査の結果、縄文時代から中世に至るまで実に多種多様な遺物が出土するなど多くの成果をあげ、この地域の歴史や文化を知るうえで貴重な資料が得られました。

本書が、多少なりともこの地域の埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いに思います。

なお、この発掘調査に当たり、建設省出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援・ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成12（2000）年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎悠雄

例　　言

1. 本書は、平成6（1994）・平成7（1995）の両年度にわたって、島根県教育委員会が建設省中国建設局の委託を受けて実施した、斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、下記の遺跡の調査報告書である。

三田谷I 遺跡（第1次調査）　　島根県出雲市上塩冶町半分所在
2. 本報告書は編集の都合上、「本文・写真図版編」と「遺物図版編」との2分冊からなり、本書はそのうちの前編第1分冊にある。
3. 図中の方位は、基本的に国土調査法による第ⅢX軸の方向を指している。また、本書ではSK（上坑）、SE（井戸）の遺構記号を用いている。
4. 遺物の実測は下記5のものを除き、主に露梨靖子、大谷朋子、錦織稔之、佐藤幸子、加藤麻子、田村尚子、阿部春枝、須山啓子、江角ひろみ、佐藤綾子、坂根健悦、錦織稔之が行った。また、遺構・遺物実測図の浄書・掲載図面の作成は、主に釣宮和子、野中洋子、高橋啓子、来海順子、板垣見知子、羽島ひとみがあたった。写真は埋蔵文化財調査センター職員が撮影したものである。
5. 本遺跡の出土遺物中、縄文土器および一部弥生土器の分類整理、実測、掲載図面の作成および原稿執筆は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの小林青樹氏に依頼して出来上がったものである。同氏および同大学院生下江健太氏ならびに奈良大学院生岡田憲一氏からは論考を寄せいただきなど、全面的に協力いただいた。記して感謝申し上げたい。
6. 本遺跡出土の木簡・墨書き土器の解説に当たっては、特に奈良国立文化財研究所館野和己氏にご指導いただいた。また、陶磁器は広島県立美術館の村上勇氏に、石器の鑑定は島根大学高須晃氏に、土層の地質学所見は中村唯史氏に、打製石器の分類整理は株式会社アルカの角張淳一氏にご教示いただいた。ともに記して感謝したい。
7. 発掘作業（発掘作業員、測量発注ほか）については、平成7年度より島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部
　　布村幹夫（現場事務所長）、原　博明、中村弘巳、松崎　潤（以上技術員）、板倉律子（事務員）
8. 調査に当たっては、別記調査指導の方のほかに次の方々にも有益な指導助言と協力をいただいた。

松本岩雄、柳浦俊一、内田律雄、中川　寧、松山智弘、岩橋孝典、伊藤徳広、是田敦、田原淳史
9. 本書の編集と、本文目次で執筆者名を明記したもの以外の執筆は、調査担当者である島根がおこなった。

本文目次

I	調査に至る経緯と経過	1
1.	調査に至る経緯と調査経過	1
2.	調査の経過と調査関係者	1
II	三田谷I遺跡と調査の概要	4
1.	遺跡周辺の歴史的環境（原始・古代）	4
2.	三田谷I遺跡と94・95年度調査	6
3.	各調査区の概要	6
4.	権現山側の旧地形と基本的層序	9
III	検出遺構について	15
1.	検出遺構の概要	15
2.	各検出遺構について	17
IV	出土遺物について	32
1.	出土遺物の概要	32
2.	縄文土器（後期後半～晩期後半）～小林・岡田・下江～	33
3.	弥生土器（前期初頭～前期中葉）～小林～	39
4.	弥生土器	56
5.	土師器	57
6.	手捏ね土器・製塙土器・土製支脚・土馬・埴輪・土鍤	58
7.	須恵器	59
8.	陶磁器	61
9.	石器・石製品	62
10.	木器・木製品	66
11.	金属製品・鍛冶関係遺物	68
12.	文字資料	69
V	考察および自然科学的分析	81
1.	三田谷I遺跡出土縄文・弥生移行期土器群の諸問題～小林・岡田・下江～	81
2.	三田谷I遺跡より出土した石器石材の岩石学的研究と原産地の推定～高須～	97
3.	三田谷I遺跡94・95年度発掘調査に係る花粉分析～渡辺～	117
VI	まとめ	123

挿 図 目 次

第1図	斐伊川・神戸川および調査地点位置図	1
第2図	斐伊川放水路事業開削部周辺遺跡分布図	5
第3図	94・95年度三田谷遺跡調査区位置図(1:3000)	6
第4図	94・95年度A・D～F区調査区設定図(1:1000)	7
第5図	94・95年度A・D～F区旧地形概要図(1:1000)	8
第6図	94・95年度三田谷遺跡土層柱状図	8
第7図	A・D～F区調査後地形測量図(1:600)	10
第8図	A・D～F区土層断面図(1)(1:80)	11
第9図	A・D～F区土層断面図(2)(1:80)	12
第10図	A・D～F区土層断面図(3)(1:80)	13
第11図	A・D～F区造構配置図(1:600)	14
第12図	S E 0 1 造構実測図(1:30)	15
第13図	S E 0 1 造構展開図(1:20)	16
第14図	S E 0 2 造構実測図(1:30)	17
第15図	S E 0 3 造構実測図(1:15)	18
第16図	S E 0 4 造構実測図(1:15)	18
第17図	S E 0 5 造構実測図(1:15)	19
第18図	S E 0 6 造構実測図(1:15)	19
第19図	S E 0 7 造構実測図(1:15)	20
第20図	S E 0 9 造構実測図(1:15)	20
第21図	S K 0 1 造構実測図(1:20)	21
第22図	S K 0 2 造構実測図(1:30)	21
第23図	S K 0 3 造構実測図(1:30)	22
第24図	S K 0 4 造構実測図(1:30)	23
第25図	S K 0 5 造構実測図(1:30)	23
第26図	木製品出土状況横断見通設定図(1:600)	24
第27図	木製品出土状況横断見通図(1:150)	25
第28図	木製品出土状況部分見通設定図(1:600)	26
第29図	木製品出土状況部分見通図(1)(1:80)	27
第30図	木製品出土状況部分見通図(2)(1:80)	28
第31図	木製品出土状況部分見通図(3)(1:80)	29
第32図	木製品出土状況部分見通図(4)(1:80)	30
第33図	遺物別出土分布概況図1	72
第34図	遺物別出土分布概況図2	73
第35図	屏装置部材想定復元図	67
第36図	打製石斧形態図その1(1:12)	80
第37図	打製石斧形態図その2(1:12)	80

I 調査にいたる経緯と経過

1. 調査に至る経緯と調査経過

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水流量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市上塩治町半分付近において神戸川の合流させ、それにより神戸川下流も、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量を合わせ、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。規模は開削部4.1km、拡幅部9.0kmにも及び、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、建設省が同51年に確定したものであり、ルートは54年に最終決定している。

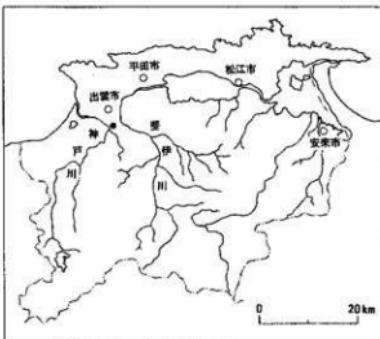
島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて分流地域の分布調査を実施したのを皮切りに、同53・54年度には建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塩治町を中心とする出雲市全域と斐伊川大社町に所在する遺跡を対象としながら一部発掘調査を含んで分布調査を行った。その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、県斐伊川・神戸川治水対策課及び県教育庁文化課の三者で協議が進められ、同3年1月には文化課が再度分布調査を実施し、そして同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、予定地内にある埋蔵文化財を事前に発掘調査することが決定し、平成3年4月より発掘調査事業がスタートした。

2. 調査の経過と調査関係者

三田谷1遺跡の調査は、平成5年度冬季に一部試掘調査を実施したのを皮切りに、同6年度から本格的に調査を実施することとなり、島根県教育委員会の発掘調査は以降10年度まで継続して行われている。

平成6年度の発掘調査は、4月21日からスタートし、12月20日まで実施した。まずA区の一画から調査に入ったが、これは建設省から谷部に調整池を設けたいとの要望があり、これを受け実施したものである。調査の結果、予想以上に遺物が認められ、谷部はひろく遺跡である可能性がでてきたため、続けてD区、E区の調査を実施した（なお、この間に、湧水地での調査方法をめぐり建設省側と協議を行ったが、なかなか調整がつかなかったため、谷部を離れてB・C区の調査も行った）。ここでもやはり遺物が多数出土したため、3地区の全面調査となった。途中、土量の多さ、遺物の多さ、さらには湧水や降水時の冠水に悩まされながらの調査であり、椎現山側の部分を残して調査を終えた。12月6日には、渡邊貞幸・池田満雄両氏を招いて調査指導会を実施した。

平成7年度は、前年度調査未了となった



第1図 斐伊川・神戸川および調査地点位置図

A・D・E区に囲まれた権現山側の調査を引き続き行うことになり、これをF区と呼んで調査した。調査は4月17日から開始し、8月4日まで行った。この年も、多量の遺物に加え、湧水と降水時の冠水に悩まされながらの調査であった。三田谷の調査終了後は、続けて白石谷遺跡の調査に移り、その年を終えた。

次に両年度の調査と報告書作成に関わった調査関係者についてであるが、以下のとおりである。

・平成6（1994）年度

事務局 広沢卓嗣（文化課長）、野村純一（文化課長補佐）、勝部昭（埋蔵文化財センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、宮沢明久（同調査第1係長）、工藤直樹（同庶務主事）
調査員 烏谷芳雄（調査第1係文化財保護主事）、山岡清志（同教諭兼主事）、平石充（同主事）、三浦一美（柿木村教育委員会、埋蔵文化財専門研修生）
遺物整理員 多久和登紀子、鍵谷由美子、小村聰子、太田和子、永田節子、石川とみ子、来海順子、永島いすみ、釘宮和子、金坂恵美子、松井公子、須山啓子、内藤洋子、高瀬則子、阿部春枝、伊藤ゆき江、中島直美、金森千恵子、守屋かおる、月森和子
発掘調査作業員 和田虎雄、秋田忠三、田中重吉、横原幸成、高橋辰夫、内田賢治、内田一信、坂根健悦、須山林吉、福代寛逸、梶谷重夫、中村省三、石川恒夫、山根貞雄、柳葉孝子、東原敬子、佐藤宣美、小林和子、小林邦子、福田幸子、岡田律子、福代真寿子、石原さやか、飯国協二、吉田茂、今岡実、足立省吉、岡文三、佐藤益子、村上智子、神西博江、小村熊雄、神西都、安食武雄、飯島鑑、板倉博、伊藤猪造、北脇光雄、原博信、樋野国男、棘石摩七、吉田甫、浜村将季、藤江伸幸、飯国美代子、石田好子、漆谷澄子、奥井久了、高橋加代子、中島和恵、矢田絹子、吉田京子、黒見奈美、神田千歳、杉原節子、川上慶臣、舟木昇、梶谷幹子、成相幸子、園山正一、雲島信行、山根信枝、足立今栄、竹田美代子、石飛すみえ、園山悦子、佐々木明美、小原喜美子、珍部美江子、幸田チヨコ、石川徳、加藤源次郎、板倉四郎、吉田末子、富室和、安部孝代、萬代とみ子、永田節子、今岡陽子、藤原るみ、原留美子、吉田京子、武田淑子、松本太相、福島力、吉田健造
調査協力者 松崎潤（中国建設設弘済会鳥根支部派遣）
調査指導者 渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、松木哲（神戸商船大学）、池田満雄（島根県文化財保護会議会委員）、宮本長二郎（東京国立文化財研究所修復技術部長）、持田豊（財団法人文化財建造物保存技術協会）

・平成7（1995）年度

事務局 勝部昭（文化財課長）、森山洋光（文化財課長補佐）、穴道正年（埋蔵文化財センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、西尾克巳（同調査第2係長）、渋谷昌宏（同庶務主事）、山本悦子（島根県教育文化財付嘱託）
調査員 烏谷芳雄（調査第2係文化財保護主事）、富田衡（同教諭兼主事）、江角ひろみ

(同臨時職員)、水津浩信（六口市町教育委員会、埋蔵文化財専門研修生）

遺物整理員 多久和登紀子、鍵谷由美子、小村瞳子、太田和子、永田節子、石川とみ子、来海順子、永島 いずみ、釘宮和子、金坂恵美子、松井公子、須山啓子、内藤洋子、高瀬則子、阿部春枝、中島直美、金森千恵子、守屋かおる、月森和子

発掘調査作業員 和田虎雄、秋田忠三、田中重吉、横原幸成、高橋辰夫、内田賢治、内田一信、坂根健悦、須山林吉、福代寛逸、梶谷重夫、中村省三、石川恒夫、山根貞雄、伊藤ゆき江、柳楽孝子、東原敬子、佐藤宣美、小林和子、小林邦子、福田幸子、岡田律子、福代真寿子、石原さやか、飯国協二、吉田 茂、今岡 実、足立省吉、岡 文三、佐藤益子、村上智子、神西博江、小村熊雄、神西 都、安食武雄、飯島 鑑、板倉 博、伊藤猪造、北脇光雄、原 博信、樋野国男、棟石庫七、吉田 甫、浜村将幸、藤江伸幸、飯国美代子、石田好子、漆谷澄子、奥井久子、高橋加代子、中島和恵、矢田絹子、吉田京子、黒見奈美、神田千歳、杉原節子、川上慶臣、舟木 昇、梶谷幹子、成相幸子、園山正一、雲島信行、山根信枝、足立今栄、武田美代子、石飛すみえ、園山悦子、佐々木明美、小原喜美子、珍部美江子、幸田チヨコ、石川 徳、加藤源次郎、板倉四郎、吉田末子、富室 和、安部孝代、萬代とみ子、永田節子、今岡陽子、藤原るみ、原留美子、吉田京子、武田淑子、松本太相、福島 力、吉田健造

調査指導者 渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）
穴沢義功（たたら研究員）

・平成11（1999）年度

事務局 穴道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、秋山 実（同課長）、松本岩雄（同課長）
川崎 崇（同総務係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）
調査員 鳥谷芳雄（調査第4係主幹）、錦織稔之（同兼主事）、佐藤幸子（臨時職員）、大
谷朋子（臨時職員）、鷲梨靖子（臨時職員）

遺物整理員 野中洋子、高橋啓子、板垣見知子、羽島ひとみ、鎌田美保、伊藤悟郎

調査指導者 小林青樹（岡山大学文学部埋蔵文化財調査センター）、角張淳一（株式会社アル
カ）、高須 晃（島根大学総合理工学部教授）、村上 勇（広島県立美術館学芸員）、
浅川滋男（奈良国立文化財研究所）、箱崎和久（同）、金子裕之（同）、光谷拓美
(同)、館野和己（同）、古尾谷知浩（同）、山下信一郎（同）

II 三田谷Ⅰ遺跡と調査の概要

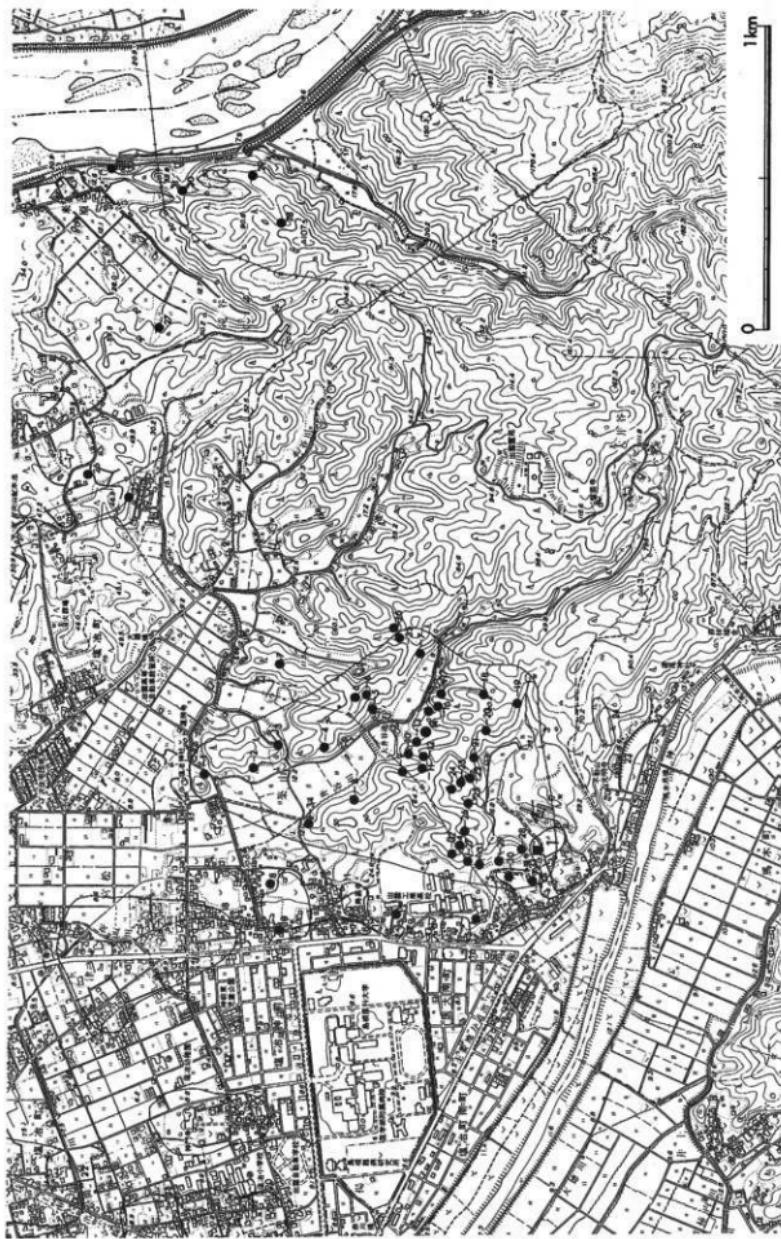
1. 遺跡周辺の歴史的環境（原始・古代）

三田谷Ⅰ遺跡は、出雲市上塩冶町半分に所在し、神戸川右岸側の標高14mほどの低台地の一角の谷地形に広がる遺跡である。神戸川は中国山地に源を発し、山間地を貫流しながら出雲平野南西部に達するが、本遺跡は山間から平地に抜け出た辺りにあり、北側からみれば平野の南縁にあたる。神戸川はこれより12kmほど下ると日本海に注いでいる。

この周辺地域は古くから人々が生活した跡があり、数は少ないが、今日知られる古い遺跡には平野西北部にある縄文時代前期の菱根遺跡や西側海岸線にある早期末～前期の上長浜貝塚がある。後期・晩期になると少しづつ遺跡が増え、三田谷Ⅰ遺跡はその一つに数えられる。弥生時代になると、平野部・縁辺部ともに遺跡数は増え、矢野遺跡、原山遺跡、天神遺跡、古志本郷遺跡、渡橋遺跡など、よく知られた遺跡が少なくない。続く古墳時代では、前期・中期のころははっきりしないが、後期に至ると、この神戸川流域に今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳をはじめとする大形古墳が次々に築造され、また特にこの三田谷の丘陵部を含めて周囲には多数の横穴墓が掘削されて、県下最大規模の横穴墓群を形成している。その後、奈良・平安時代になると、この地域は神戸郡に属し、郡家が古志郷内に置かれたことなどが、全国で唯一完本で残る「出雲國風土記」の記載によって知ることができる。近年古志本郷遺跡で郡家の一部とみられる造構がみつかり話題にされているが、今回報告するように当遺跡でも木簡などの出土があり、「出雲國風土記」に記載はないものの、その官衙的色彩が注目される。

No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別
1	三田谷遺跡群	石切場跡	-20	第20支群	横穴墓	11	寿昌寺跡遺跡	散布地
2	大井谷石切場跡	散布地	-21	第21支群	横穴墓	12	寿昌寺西跡遺跡	散古地
3	上塩冶横穴墓群	横穴墓	-22	第22支群	横穴墓	13	地藏山古墳	古地
-1	第1支群	横穴墓	-23	第23支群	横穴墓	14	半分遺跡	散布地
-2	第2支群	横穴墓	-24	第24支群	横穴墓	15	半分古墳	古地
-3	第3支群	横穴墓	-25	第25支群	横穴墓	16	出雲工業西遺跡	散布地
-4	第4支群	横穴墓	-26	第26支群	横穴墓	17	池田遺跡	散布地
-5	第5支群	横穴墓	-27	第27支群	横穴墓	18	宮松遺跡	集落遺跡
-6	第6支群	横穴墓	-28	第28支群	横穴墓	19	神門寺付近遺跡	散布地
-7	第7支群	横穴墓	-29	第29支群	横穴墓	20	上塩冶小学校付近遺跡	地
-8	第8支群	横穴墓	-30	第30支群	横穴墓	21	弓原遺跡	地
-9	第9支群	横穴墓	-31	第31支群	横穴墓	22	高西遺跡	地
-10	第10支群	横穴墓	-32	第32支群	横穴墓	23	光明寺南遺跡	地
-11	第11支群	横穴墓	-33	第33支群	横穴墓	24	光明寺古墳群	古地
-12	第12支群	横穴墓	-34	第34支群	横穴墓	25	菅沢古墓	古墓
-13	第13支群	横穴墓	-35	第35支群	横穴墓	26	長者原魔寺	寺
-14	第14支群	横穴墓	-36	第36支群	横穴墓	27	開府岩遺跡	水路
-15	第15支群	横穴墓	4	半分城跡	横穴墓	28	櫛現山横穴墓群	穴
-16	第16支群	横穴墓	5	半分瓦窯跡	横穴墓	29	櫛現山古墳	古地
-17	第17支群	横穴墓	6	大井谷城跡	横穴墓	30	長廻遺跡	散布地
-18	第18支群	横穴墓	7	菅沢古墳	横穴墓	31	長廻横穴墓	水路
-19	第19支群	横穴墓	8	上塩冶築山古墳	横穴墓	32	来原岩遺跡	地

第2図 萩原川放水路事業開削部周辺遺跡分布図



2. 三田谷 I 遺跡と94・95年度調査

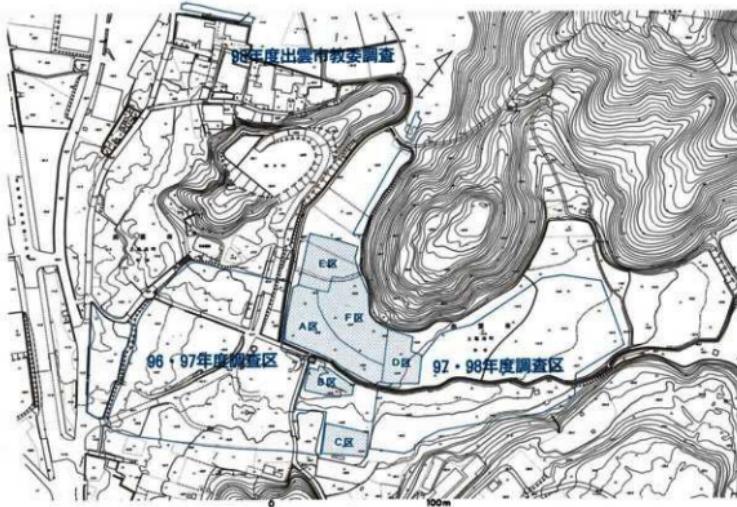
三田谷遺跡は、この斐伊川放水路事業計画に伴う事前の分布調査で確認された遺跡である。当初は「三反田遺跡」と呼ぶとともに、谷の一部をさしていたが、事業に先立つ発掘調査の段階で、谷部と丘陵部に遺跡が広がることが分かり、谷部を I 遺跡、丘陵部を II 遺跡、谷部の奥を III 遺跡と呼ぶこととなった。また、同時に当地はその後の地名調査で「三田谷（サンタダン）」と呼ぶことが明らかになったことから、名称を「三反田」から「三田谷」へ変更した経緯がある。

三田谷の発掘調査は、平成91・92年度に低丘陵部の II 遺跡を調査したのに始まり、その後谷部へ移り、94年度から本格的に調査を行い、I 遺跡は94～98年度にかけて、II 遺跡は98年度に実施した。また、この斐伊川放水路事業では、出雲市教育委員会も発掘調査に参画しており、県教委が実施した94・95年度調査箇所の下流域を98年度におこなっている。

94・95年度の調査地は、主に三田谷の入り口に近く、かつその北側よりで、権現山を取り囲むように存在する平坦地である。ここは放水路の開削部の一角であるが、特に調査が緊急とされたのは谷奥からの開削土搬出にかかる工事用道路と調整池の設置が急がれたためである。調査は、建設省との協議経過の中でいくつかの調査区に分けてを行い、便宜上 A～F 区と呼んで行った。

3. 各調査区の概要

調査はおむね A 区から F 区の順に行った。A・D～F 区は任意に座標軸を設定し、調査区を設けている。いずれも南北軸をアルファベット、東西軸をアラビア数字で呼び、2 m 方眼が基本になっている。A 区の場合、国土座標軸に対しては W-24° 19' 28" -N の方向にある。E 区についても、座標軸は A 区のそれの延長上に設定したものである。D 区の場合は国土座標に対しては W-35°



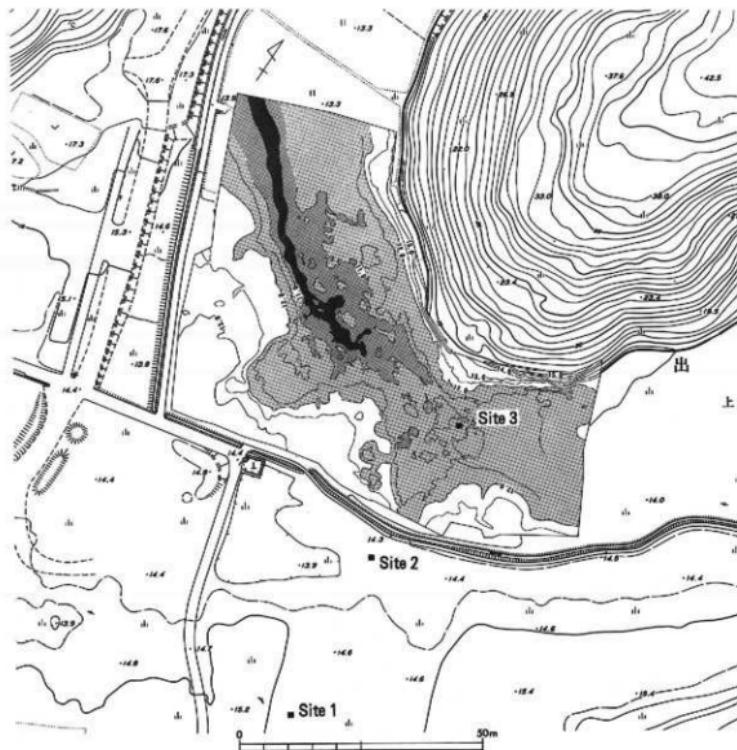
第3図 94・95年度三田谷遺跡調査区位置図（1：3000）

08° 06' - N の方向にある。また、95年度に行ったF区は、A区およびE区の方眼軸を延長して設定したものである。

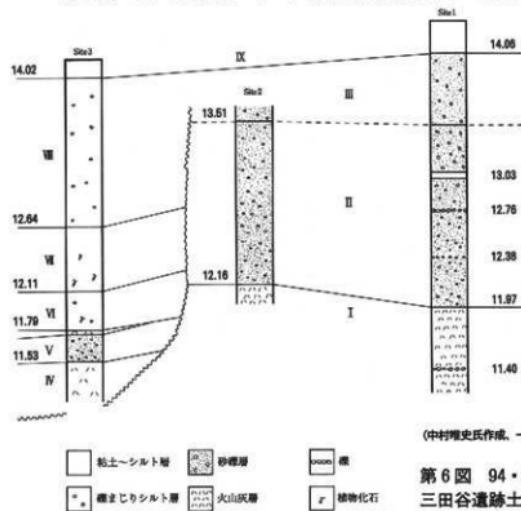
この4つの調査区の谷部からは多量に遺物が出土したが、これらの取上などは基本的にこの2mメッシュによっている。A・D～F区で検出した各遺構および遺物については、後述のとおりである。B区は、三田谷のほぼ中央よりを流れる水路を挟み、A・D～F区と隣り合わせの地点である。地表面の標高は14.3mである。厚さ40～50cmの耕作土および床締土を除去するとすぐに砂質土層に達した。検出遺構は、径30～100cmほどの浅い落ち込みが幾つか認められた程度である。出土遺物には、古墳時代から奈良平安時代にかけての土師器・須恵器の破片や近世以降の陶磁器類の破片がある。またC区は、B区から20mほどの距離を置いた南東側の地点である。地表面の標高は14.6mである。厚さ40cmほどの耕作土および床締土を除去するとすぐに砂質土層に達した。遺構は特に認められなかったが、出土遺物には古墳時代から平安時代までの土師器・須恵器の破片がある。



第4図 94・95年度A・D～F区調査区設定図 (1:1000)



第5図 94・95年度A・D～F区旧地形概要図 (1 : 1000)



第6図 94・95年度
三田谷遺跡土層柱状図

4. 権現山側の旧地形と基本的層序

A・D～F区の調査では、もともとこの三田谷は一様に平坦な地形ではなく、北側が大きく谷状に低くなり自然流路を形成していたことが明らかになった。この旧地形を大まかに表したのが第5図である。上流部のD区での標高は、地表面が14.0m、同谷の最深部の標高は11.40mであり、下流部のE区での地表面の標高は13.3m、同谷の最深部での標高は10.20mである。また、この調査地点での地質学的所見によると次のようにある（第6図）。

I層：細粒火山灰層、極粗粒砂～シルト細粒砂サイズの粒子からなる。数cm大の軽石礫をよく含む。しまりのよい地層である。粒子の違いからなる平行葉層が発達する。葉層中に緩化構造が観察される。この火山灰層は三瓶山の噴火活動とともに噴出した火山灰が神戸川によって運搬されて堆積したものと考えられる。堆積時期は不明である。神戸川下流部のボーリングでアカホヤ火山灰層（6,300年B.P.）の上位に認められる火山灰層と類似することから、対応される可能性が高い。

II層：砂礫層。極粗粒砂～細礫からなる。数cm大の軽石礫をよく含む。粘土分はあまり含まれない。砂粒は主に安山岩片と同質の軽石からなる。I層の堆積直後に短期間で堆積したと考えられる。噴火活動による山地の荒廃、火砕碎屑物の供給による洪水の頻発が予想される。この地層中には長時間の堆積停止面は見られないことから、遺構が存在する可能性は極めて低い。

III層：粘土まじりの砂礫層。II層が表土化したものである。この地層の上面または地層中は遺構の存在する可能性がある。

IV層：火山灰質シルト層。I層の再堆積層。I層と似るが有機質に富み、砂岩岩片をしばしば含む。

V層：砂礫層。II層の再堆積層。

VI層：疊まじり粘土層。軟弱な地層である。三田谷からの水流で形成された河川の中に堆積したと考えられる。

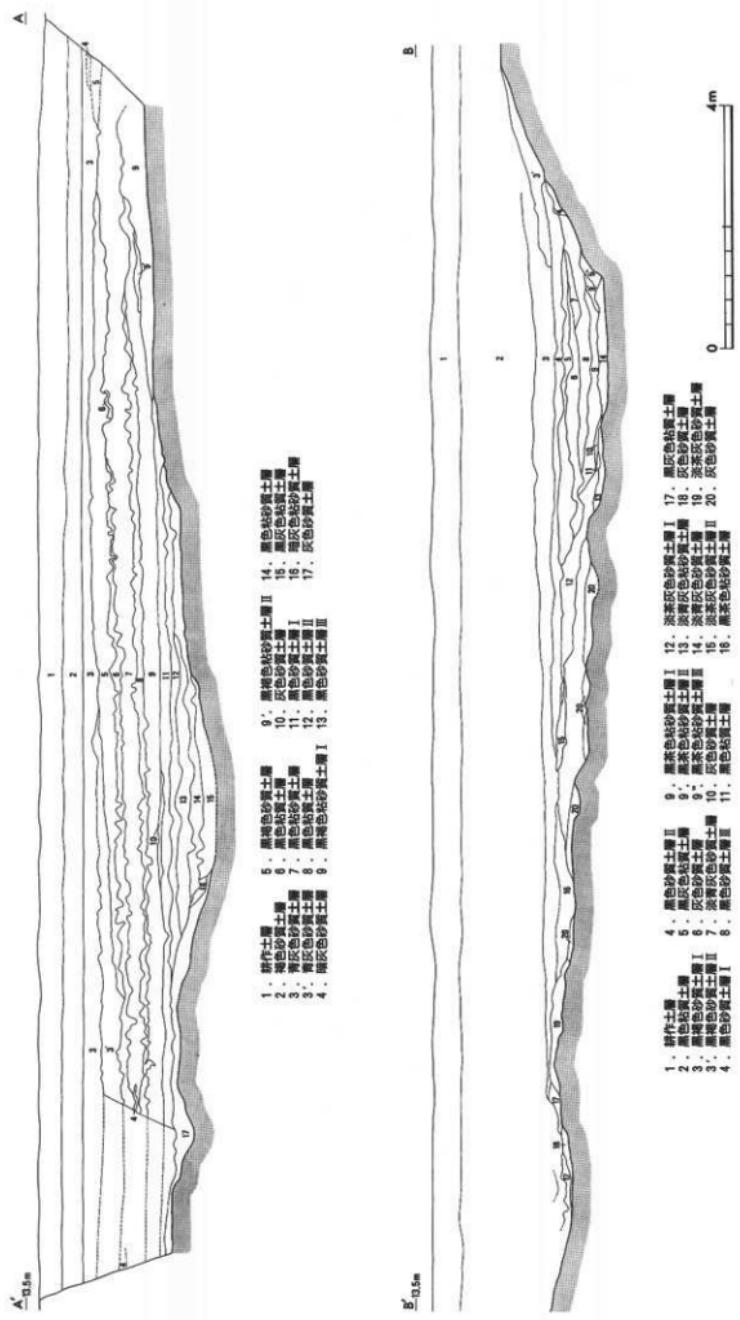
VII層：有機質粘土層。植物化石を多量に含む。淀んだ河川中に堆積したと考えられる。IV層～VII層は河川中の堆積物であり、この地層中に遺構の存在する可能性は極めて低いが、遺物が含まれる可能性は高い。

VIII層：疊まじり粘土層。含水が少なく粘性が高い。埋土ではないかと考えられる。IX層：耕作土。

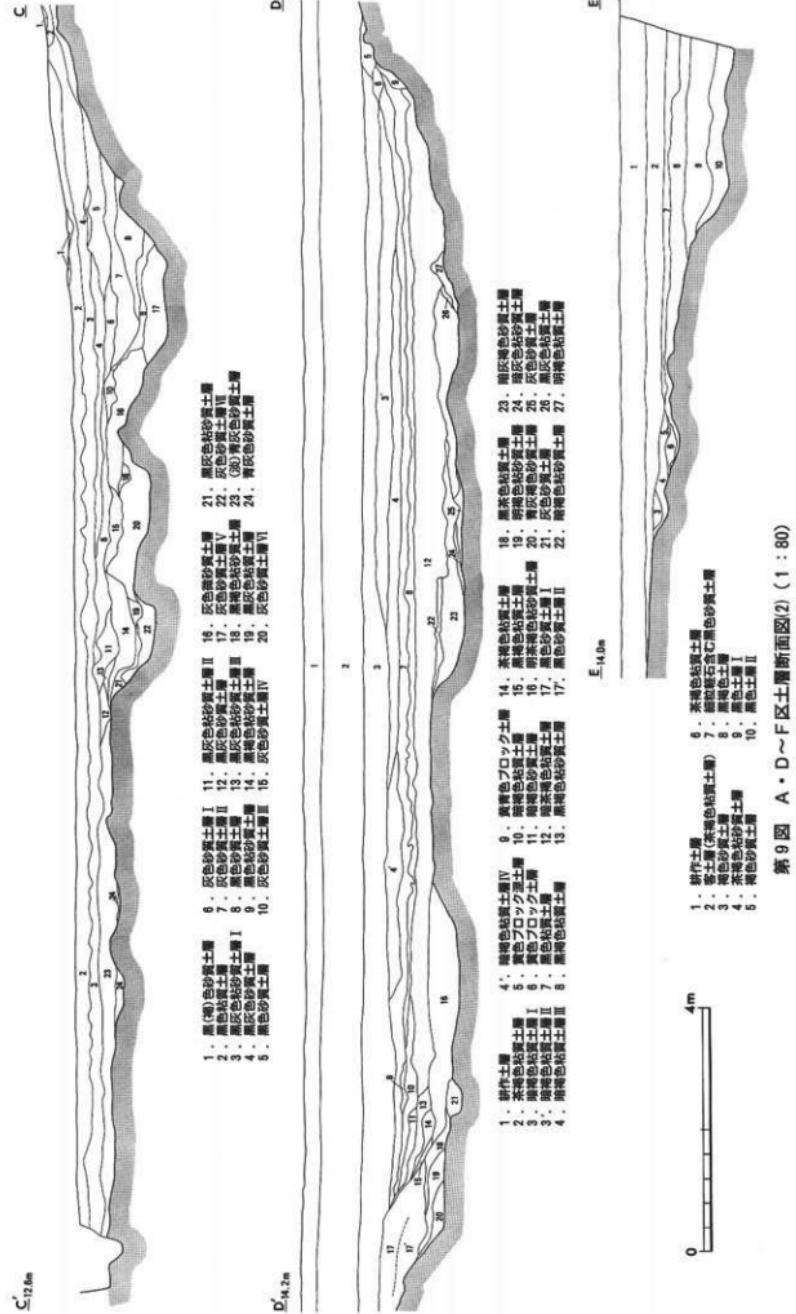
以上がA(F)区、B区、C区の3地点を結んだ三田谷の横断的な土層の概要であるが、発掘調査でのA・D～F区における上層の堆積状況を表すと、第9～11図のセクション図のとおりである。権現山の山裾に沿い、幅20～30mほどの谷地形が形成されており、上層は基本的に砂質土と粘土質土が自然堆積している。かってこの部分が三田谷の自然流路であり、淀みを形成しながら湿地化していたことや、そのなかにも幾つかの川筋があったことなどがうかがえる。この谷部からは縄文時代後期から平安時代までの遺物が数多く出土した。遺物の出土状況からすると、この自然流路は遺物出土量の多い縄文時代晚期から弥生時代の前期のころにかけて形成されたとみられ、のち11・12世紀ごろには広く湿地化していたと考えられる。



第7図 A・D～F区調査後地形測量図 (1:600)

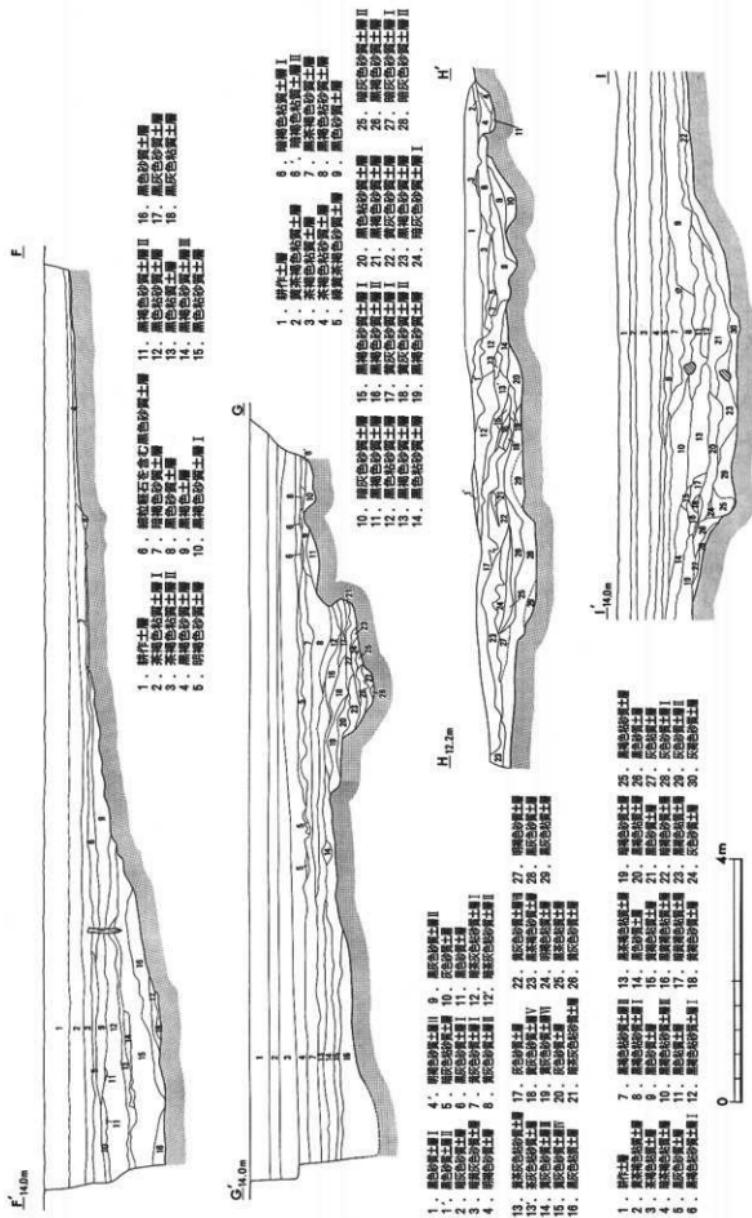


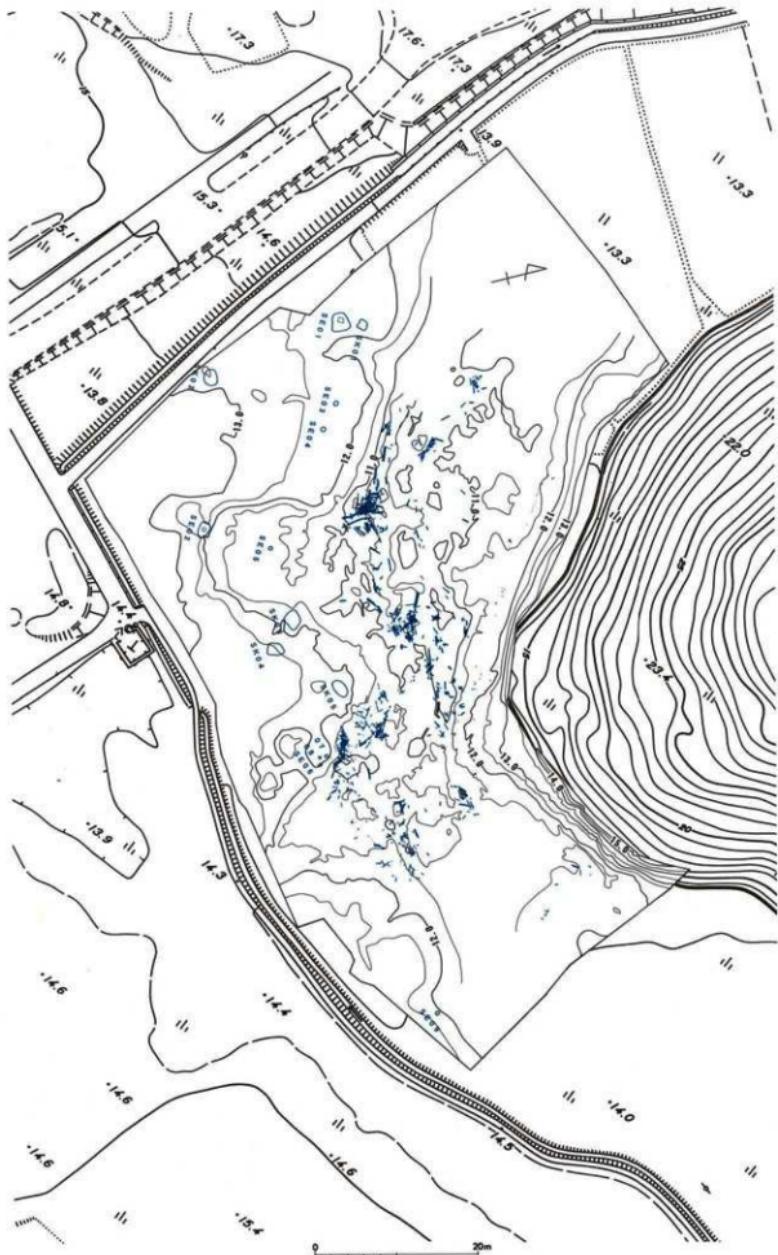
第8図 A・D～F区土層断面図(1) (1:80)



第9圖 A-D~F區土壤剖面圖(1:80)

第10图 A-D~F区土壤断面图(1:80)



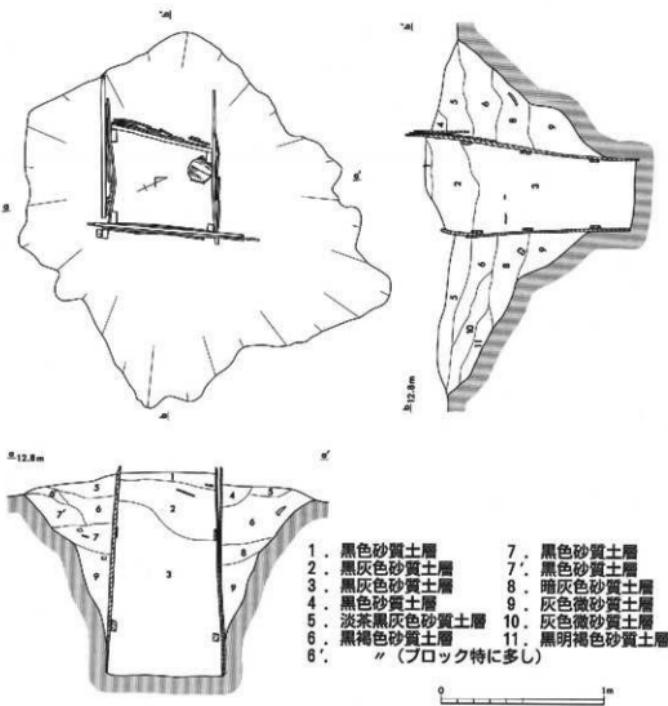


第11図 A・D～F区段構配図（1：600）

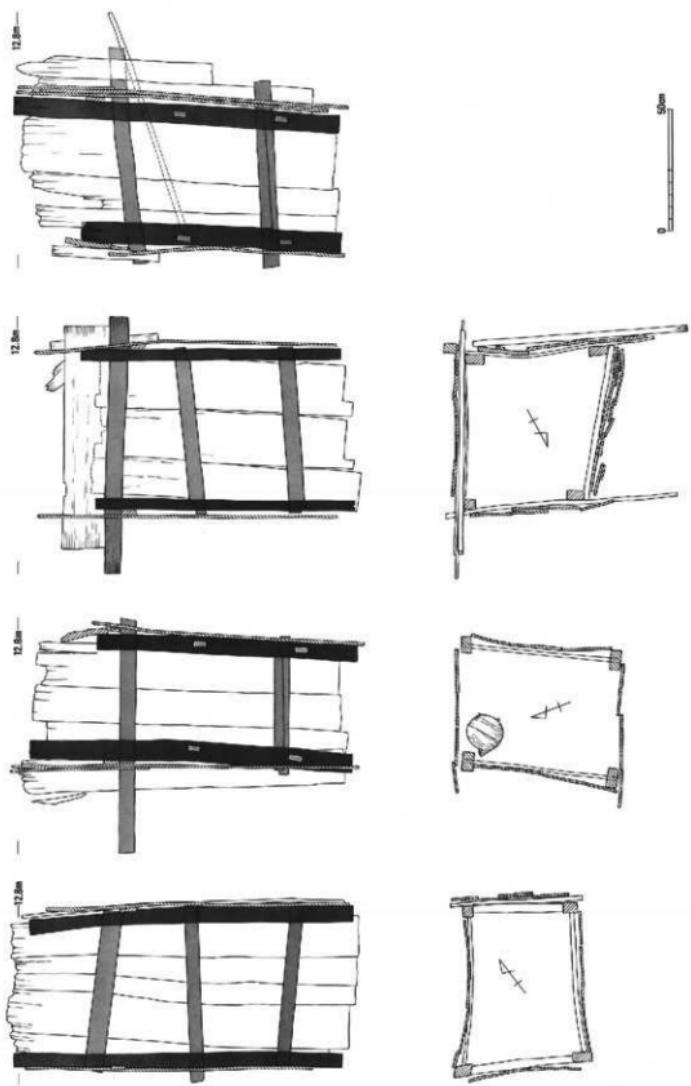
III 検出遺構について

1. 検出遺構の概要

A・D・E・F区で検出した遺構には、井戸跡と考えられるもの9(S E 01~09)、性格不明の土坑5(S K 01~05)がある。いずれも調査区南側の平坦部から谷部にさしかかる緩斜面で検出した。SK 02を除けば、ほぼD区(上流部)からE区(下流部)にかけての谷川筋にそって点在する格好である。遺構の時期は、SK 02が漆器碗の出土から中世かとみられ、SK 03が出土土師質土器から11・12世紀ごろとみられる。このほかの遺構は時期を特定しがたいが、曲物側板を据えただけの井戸跡は、周囲から比較的7・8世紀代を中心とする土器の出土が多かった。また、谷部では多くの木製品が出土した。板材が中心であるが、各種のものが含まれており、単に流出したものばかりではない。なかには杭をランダムに打ち込むなど、しがらみ状に集中してみられるところがあり、川べりで何らかの行為が伴っていたものと思われる。時期は明確にしがたいが、特に最深部で検出した木製品の集積は、周囲の出土土師器から古墳時代中期ころのものである可能性が高い。



第12図 S E 01 遺構実測図 (1 : 30)



第13図 SE 01 遺構展開図 (1 : 20)

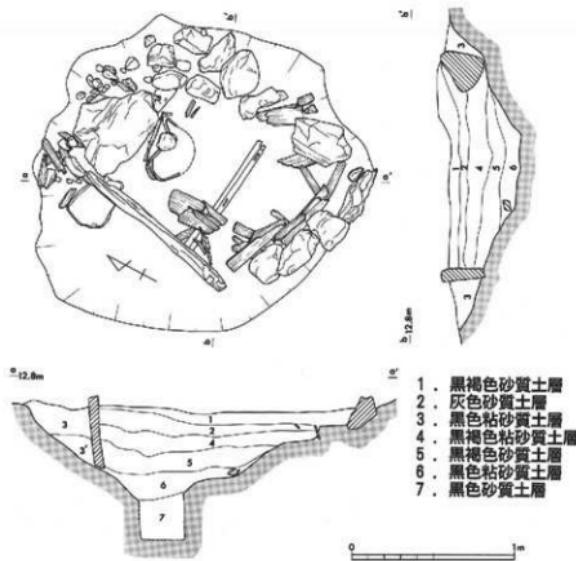
2. 各検出遺構について

S E01 (第12・13図、図版6)

縦板組隅柱横棟どめの方形井戸枠を据える井戸跡である。A区の北西隅の平坦面で検出した。標高は検出面で12.75m、底面11.4mである。井戸枠は内法で長辺側60cm、短辺側45cmで長方形の平面形をとり、底部から高さ1.25m残存する。枠は、四隅の柱に取り付けた横棟で縦板を保持する構造である。隅柱は断面方形であり、二本ずつ長さの異なる材が用いられているが、同じ高さの位置に納穴をあける。横棟は南東側と北西側を二段、北東側と南西側を一段に組んでいる。縦板は各面に三枚ないし四枚ずつ用いている。また北西側の縦板には接合可能な鋸目に入った割り板が用いられている（同図1・2）。上部では四面にわたした幅の狭い横木によって支えられている（155図8～11）。また、南東側の上端のみに横板が一枚かけてある（154図3）。出土遺物は、枠内の堆積土中、底面から70cm浮いた位置で曲物の底板一枚（第137図3）、掘り形の埋土からヘラ記号のある須恵器坏細片（古墳時代後期）、赤色塗彩の土師器細片（古墳時代中期）が認められた。

S E02 (第14図、図版7)

径2mほどの範囲を掘り窪め、自然石・厚板材・角材で方形に開んだ中に円形曲物の側板を据えた井戸跡である。A区の中央よりの平坦面で検出した。標高は検出面で12.7m、底面で11.8mほどである。曲物は遺存状態が悪かったが、径は30cm～40cm、高さは25cmほどと推定される。二方向を直角に囲む厚板材と角材が据えられた天端よりもやや浮いた位置から曲物底板が出土している（第



第14図 S E 0 2 遺構実測図 (1 : 30)

135図5)。最大径25.2cm、厚さ0.8cmで片面に黒漆が塗られている。年輪年代測定法によると、A.D.1168年 + α ($\alpha \approx 200$ 本前後) という結果が得られ、この板は14世紀後半から15世紀前半のものの可能性がある。

S E 03 (第15図、図版7)

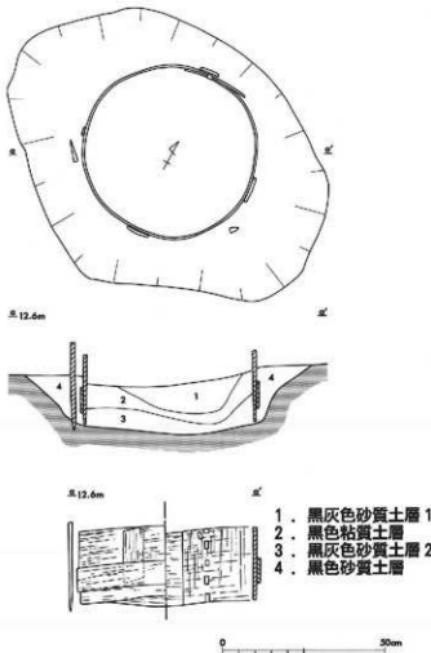
楕円形の掘り形に円形曲物の側板を据えただけの構造である。S E 01より南南西側に10mほど離れた平坦地で検出した。標高は検出面で12.5m、底面で12.25mである。掘り形は長径110cm、短径80cmである。曲物は径52cm、幅22cmあり、下方に幅7.5cmの枠が巡って2重になる。周囲には西側のみ幅7cm、厚さ1cm、高さ27cmの割板が突き刺してあった。これに伴う出土遺物は掘り形内から時期を特定しがたい土師器の細片一点がある。

S E 04 (第16図)

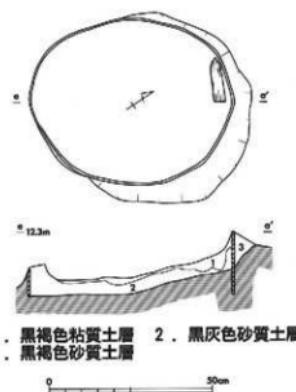
円形の掘り形に円形曲物の側板を据えただけの構造である。輪郭は把握できたが、遺存状態がわるく、残存していたのは側板の一部である。S E 03より南西側に3.5m離れた平坦地で検出した。標高は検出面で12.3m、底面は12.1mである。検出時、曲物は20cmほどの幅で、平面形は楕円形に歪み、長径62cm、短径50cmであった。径はもと55cmほどのものと推定される。出土遺物は、薄板片の1枚のみである。

S E 05 (第17図、図版7)

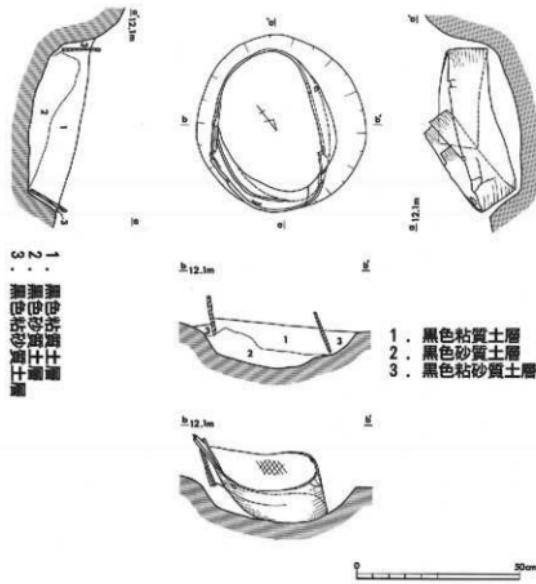
円形の掘り形に、円形曲物の側板を据えただけの構造である。調査区のほぼ中央、S E 02より北側に8m離れた、



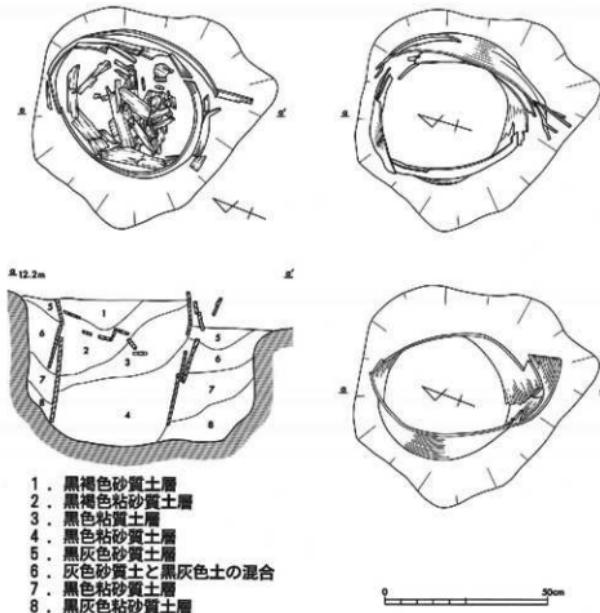
第15図 S E 03 遺構実測図 (1 : 15)



第16図 S E 04 遺構実測図 (1 : 15)



第17図 SE 05 遺構実測図 (1 : 15)



第18図 SE 06 遺構実測図 (1 : 15)

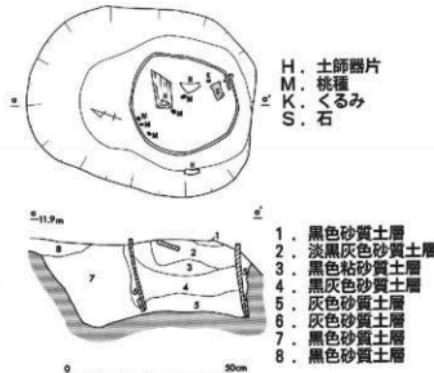
やや窪んだ地点で検出した。標高は検出面で12.0m、底面は最深部で11.8mである。掘り形は径52cmでほぼ正円形であるが、幅12cmの曲物は検出時、側板の留めがはずれて梢円形に歪み、長径50cm、短径32cmであった。径はもと40cmほどのものと推定される。出土遺物は、内部の覆土中から時期を特定しがたい土師器・須恵器細片がある。

SE 06 (第18図、図版7)

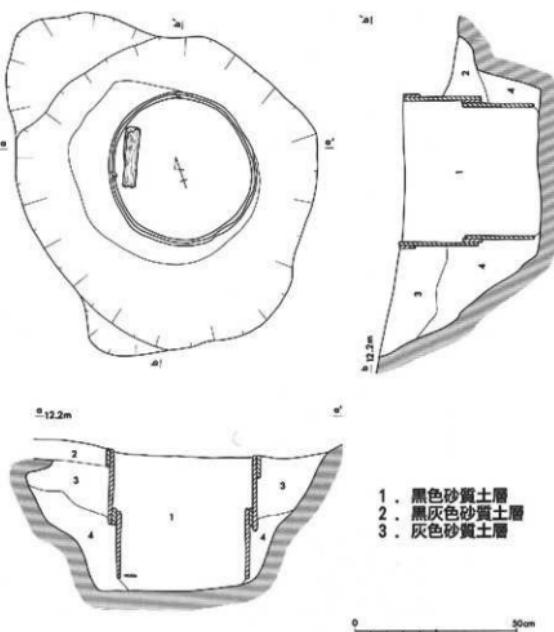
やや不整形な掘り形に円形曲物の側板を2段に重ねた井戸跡である。A区東側の谷部にやや下る地点で検出した。SE 05からは東側に27mほど離れている。標高は検出面で12.15m、底面で11.7mである。掘り形は径60~70cmほどで、曲物より少し広めに掘られている。曲物は2段に重ねられ、高さは上段が20cmほど、下段が25cmほどであり、径はもと40cmほどと推定される。曲物の内側上位には薄板片が多く重なり合っていたが、これには壊れた側板の破片が多く含まれているものとみられる。他に出土遺物は認められなかった。

SE 07 (第19図、図版7)

SE 06に近接して検出した、掘り形のなかに円形曲物の側板を据えただけの井



第19図 SE 07 遺構実測図 (1 : 15)

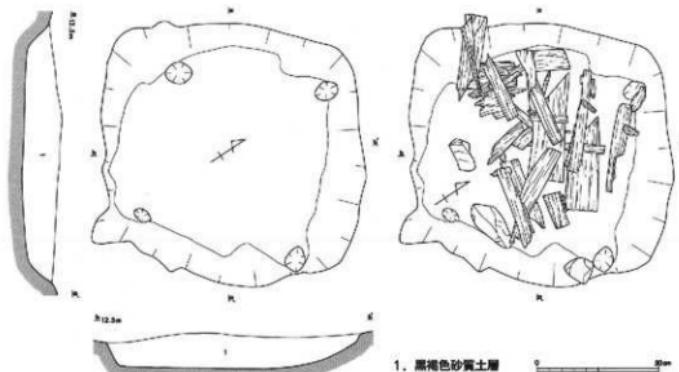


第20図 SE 09 遺構実測図 (1 : 15)

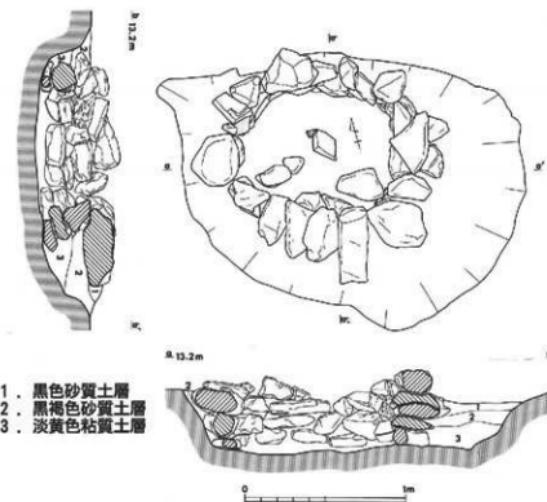
戸跡である。掘り形は径50cmほどで、曲物側板の径は35cmである。高さ7cmほどが残存していた。遺構検出面の標高は11.9mである。出土遺物は、曲物内部の覆土中上位に土師器片、桃種、くるみ、薄板材片、自然石があり、掘り形の上位に土師器片が認められた。

SE08

SE06・07に近接して検出した、掘り形のなかに円形曲物の側板を据えただけの簡単な井戸跡と

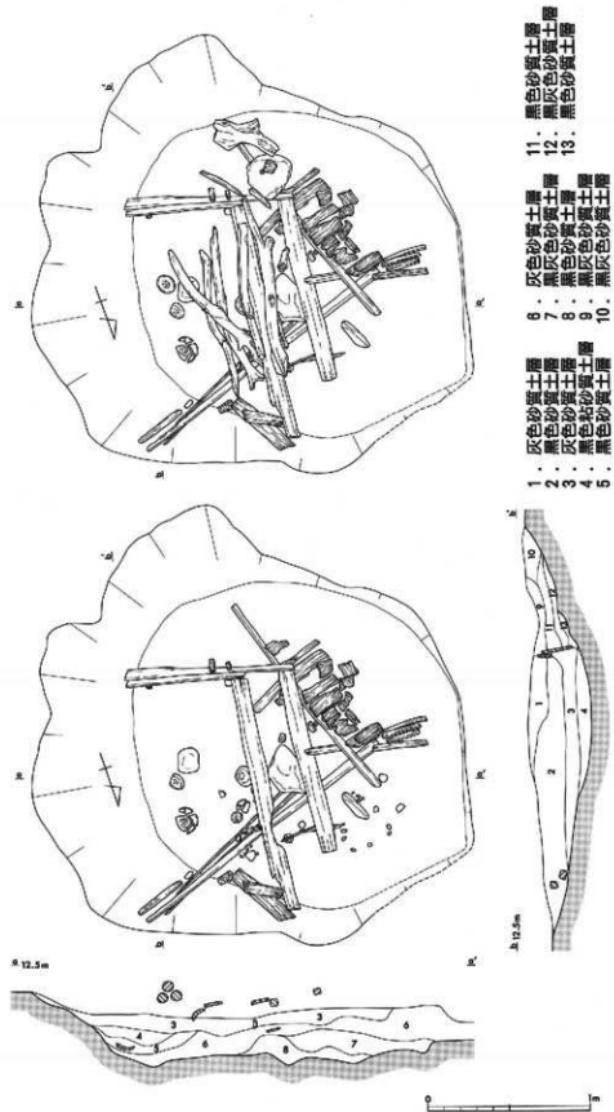


第21図 SK01 遺構実測図 (1:20)



第22図 SK02 遺構実測図 (1:30)

みられる遺構である。曲物は残存しなかったが、径35cmの掘り形とそれとほぼ同じ径の曲物の痕跡を確認した。掘り形の深さは2cmほどであった。遺構検出面の標高は、11.7mである。出土遺物は

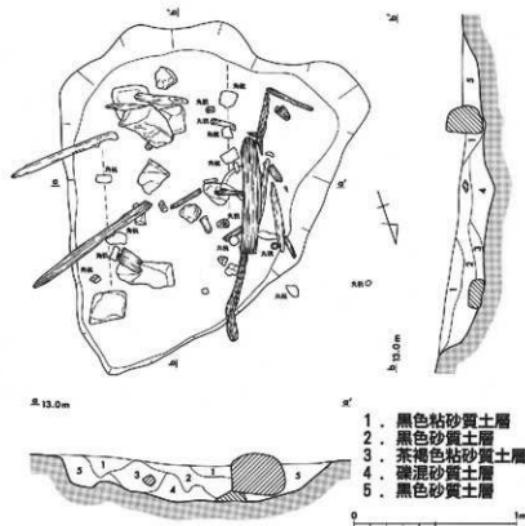


第23図 SK 03 遺構実測図 (1 : 30)

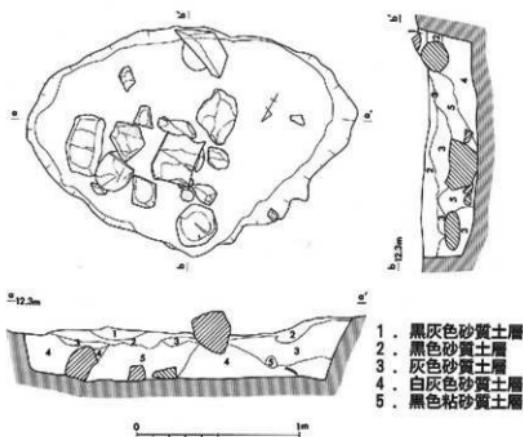
ない。

S E 09 (第20図、図版7)

全調査区のなかでは最も上流側に位置する、D区の南東側緩斜面で検出した遺構。円形の掘り形



第24図 SK 04 遺構実測図 (1 : 30)

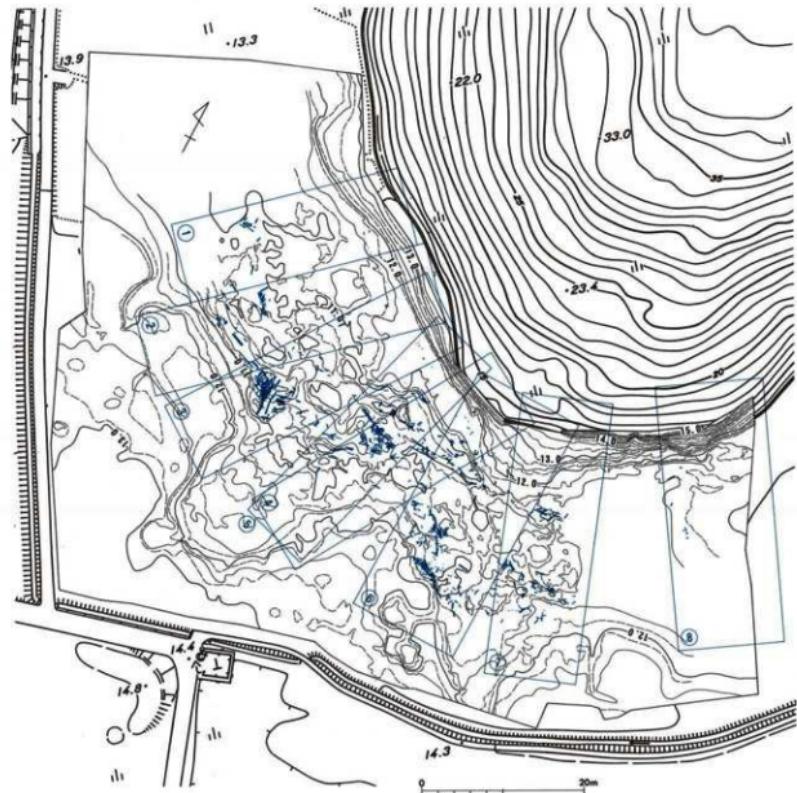


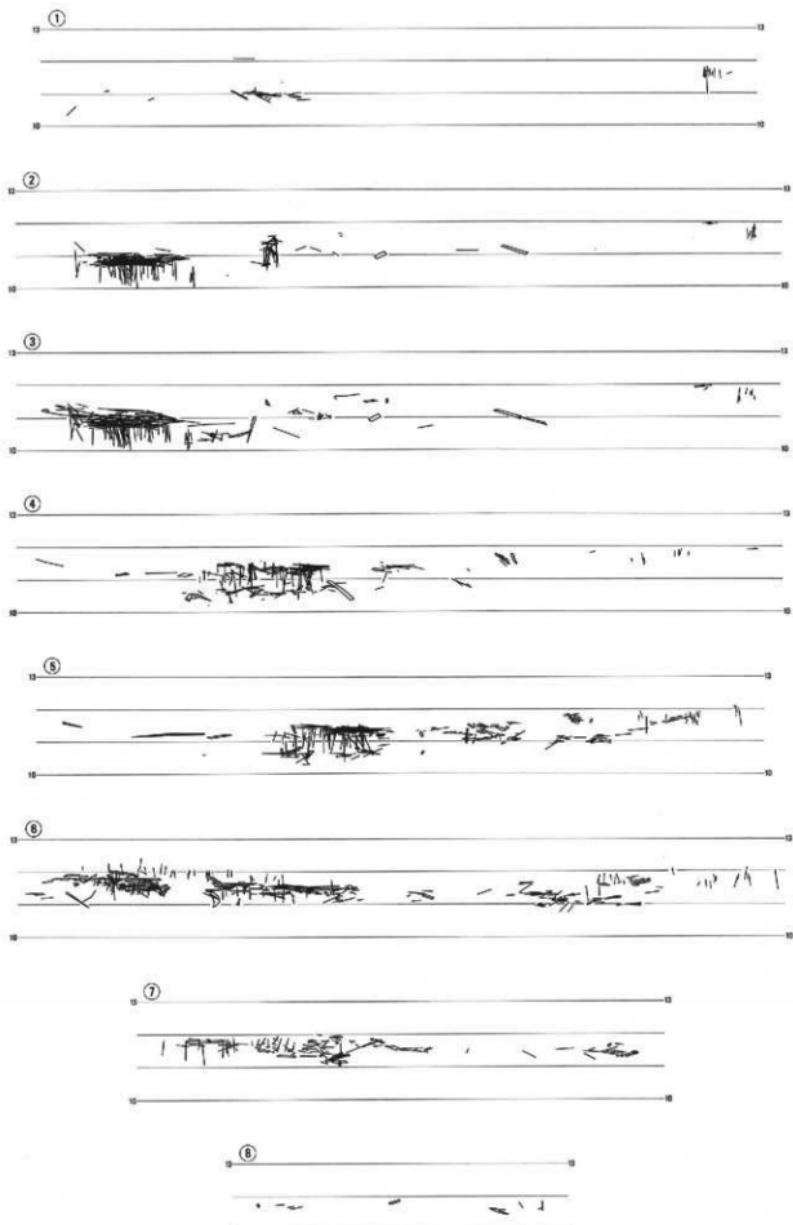
第25図 SK 05 遺構実測図 (1 : 30)

のなかに円形曲物の側板を2段重ねに据えた井戸跡である。標高は、曲物の天端で12.1m、底面で11.65mである。掘り形は径85cmほどのほぼ円形で、曲物は上段が径45cm・高さ22.2cm、下段が径42cm・高さ19.5cmで、それぞれ上端に幅4.8cm、4.0cmの枠が伴う。出土遺物は、底面近くの薄板材1片のみである。

S K01 (第21図)

A区北側の平坦地で検出した方形の土坑である。平面形は、少し丸みを帯びるが、105×110cmのほぼ正方形である。確認した深さは15cmと浅く、底面は平らである。底面の四隅に径7~10cm、深さ5cmほどの穴が認められ、ここに杭のようなものが立てられていた可能性がある。遺構検出面で短い薄板が重なるように出土した。性格、時期ともに不明である。





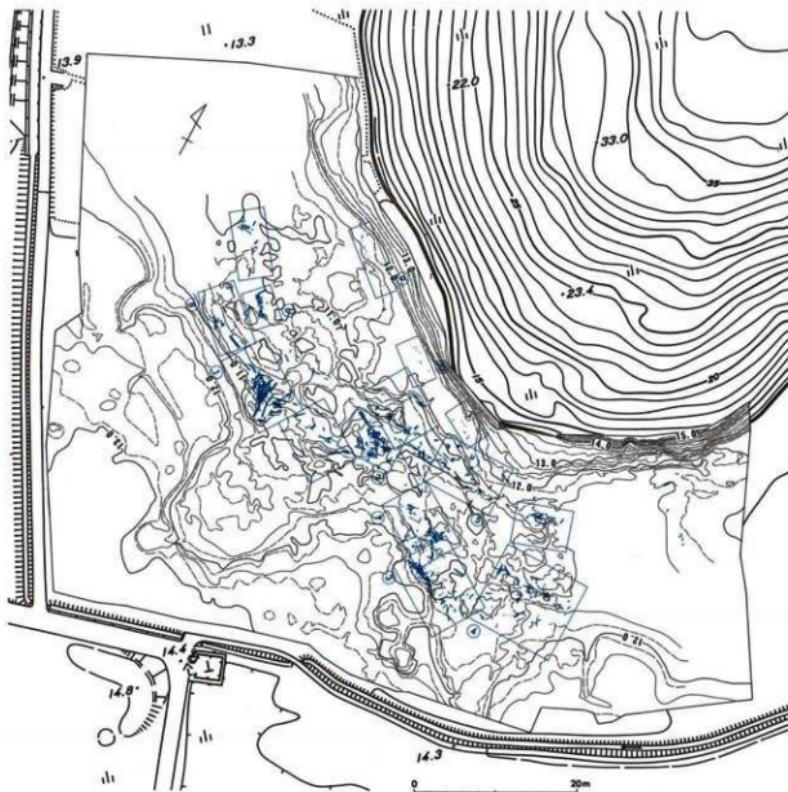
第27図 木製品出土状況横断見通図 (1 : 150)

S K02 (第22図、図版6)

A区北西側の平坦地で検出した楕円形の石積み遺構である。掘方は長径210cm、短径150cmのやや歪な楕円形で、石積は内法で長径90cm、短径75cm、深さ45cmである。自然石を用いており、3段から4段が残る。出土遺物は、底面よりすこし浮いて漆器椀1点（第140図2）出土している。性格は明らかにし難いが、井戸の可能性も考えられる。時期は中世かとみられる。

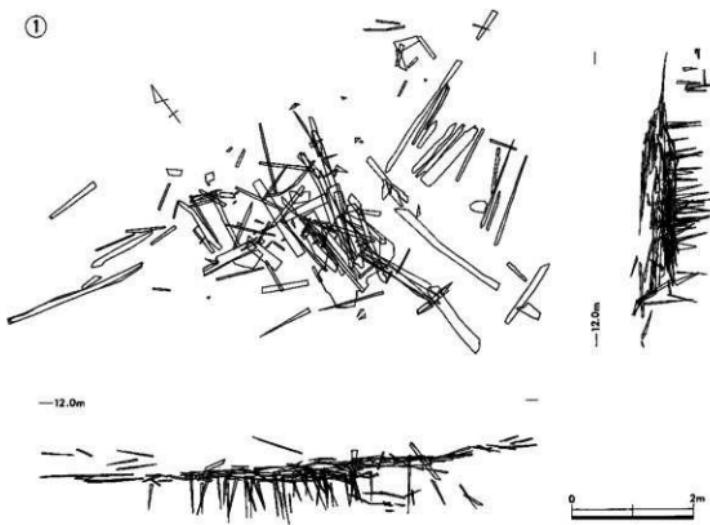
S K03 (第23図、図版6)

A区中央やや南よりの平坦地から谷部にかけて検出した不整形土坑である。壁面が明確ではなかったが、南北最大幅280cm、東西最大幅260cmとみられる土坑で、深さは東側から南側にかけて高く遺構検出面から最大で45cmあり、底面は必ずしもフラットではない。西側によせて角材が南北方向に置かれ、これに交差するかたちで変形「コ」の字状に、その南北両端に角材と

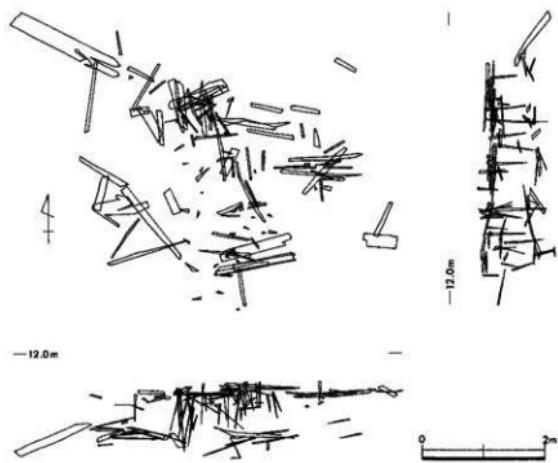


第28図 木製品出土状況部分見通設定図 (1 : 600)

①

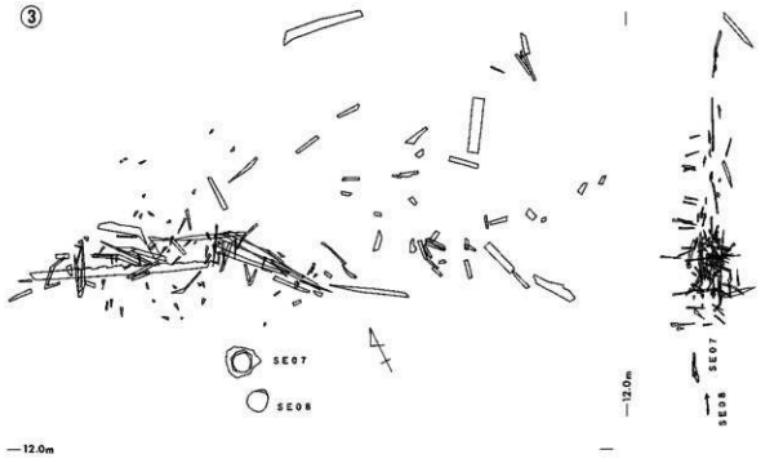


②



第29図 木製品出土状況部分見通図(1) (1 : 80)

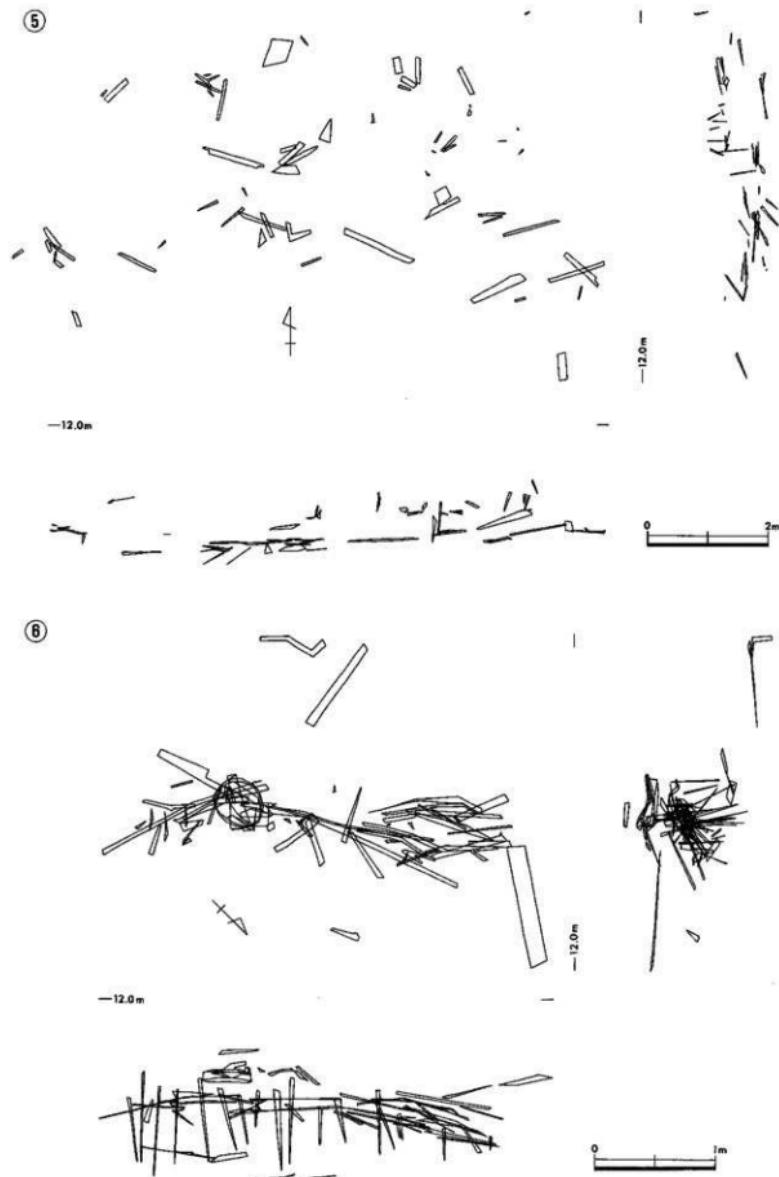
③



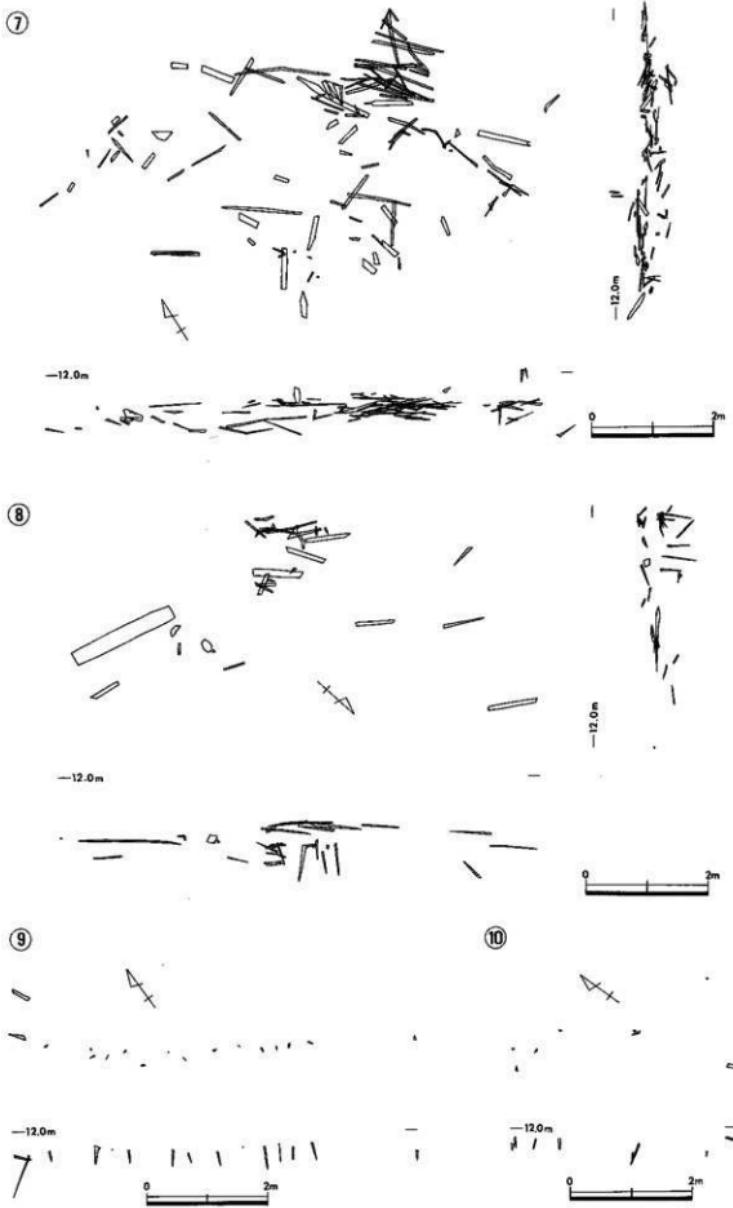
④



第30図 木製品出土状況部分見通図(2) (1 : 80)



第31図 木製品出土状況部分見通図(3) (1 : 80)



第32図 木製品出土状況部分見通図(4) (1 : 80)

板材が置かれていた。これら3方向の角材・板材は、それぞれ細い丸杭によって固定された感がある。さらに西側の角材には、幅10cmで長さ10cm～25cmほどの板材10枚ほどが横並びになって寄りかかっていた。出土遺物は、このコの字状の枠の中を中心にして破片・完形品含めて土師質土器壺10数点がある（第56図1～10）。なお、この遺構のすぐ上位には長さ1m前後の自然木5本ほどがほぼ一定方向（南北方向）に覆いかぶさっていた。時期は、出土した土師質土器から11、12世紀ごろのもとのみられる。

S K04（第24図、図版6）

A区の中央やや南側よりに検出した三角形状の不整土坑である。SK03とは250cmほどの距離を置く。長辺230cm、短辺180cm、深さ22cmである。底面は波打つがほぼ平らである。内部には角杭・丸杭が12、3本打たれており、なかには幅75cmほど、ほぼ平行するような角杭・丸杭の列も認められた。遺構検出面で小木材がほぼ水平堆積していたほか、土師器の細片が数点認められた。性格・時期とも不明である。

S K05（第25図、図版6）

F区のやや南東寄りの平坦面で検出した、隅丸三角形状を呈した不整形土坑である。SK04とは8mほどの距離を置く。長辺202cm、短辺140cm、深さ32cmで、周囲の壁は垂直にも近く、底面は平らである。内部には大小20個近い自然石がやや北側に寄せて認められた。土坑廃棄時に投棄されたものと思われる。土師器の細片、須恵器甕片が出土している。時期・性格は不明である。

木製品集積遺構・杭列（第26～32図、カラー図版4）

谷部での木製品は、平面的には谷部の川筋を反映するように、蛇行しながら集積する状況がみられた。なかでも特に集中するところとして、(a) 横断図②・③の右岸側の部分（平面図では①）、(b) 同④・⑤の中央よりの部分（平面図では②）、(c) 同⑥・⑦の右岸側の部分（平面図では③）がある。(a) ではほぼ同一のレベルで木製品と杭がまとまって出土した。杭はランダムに打ち込まれている。(b) ではおよそ上下2層に分かれ、上層では木製品と杭が集中し、杭はランダムに打ち込まれている。下層では杭はほとんど認められなかった。(c) では上層に谷部を一部横断するようなかたちで杭列がみられた。下層では南側のSE06～08の付近に木製品と杭が集中し（平面図では③）、それより北側の谷部中央では杭は認められなかった（平面図では⑦）。杭列は、権現山の山裾にそった部分にも認められた（平面図⑨・⑩）。

これらのなかで杭を伴う木製品の集積地点は、明らかに人為的なものとみることができるが、そこに含まれる木製品の種類や配置には特別まとまりが認められず、各種用済みの木製品が集められ、しがらみ状に杭が打ち込まれたものと思われる。

時期については、(a) 地点、および(b) 地点の下層では、周囲から古墳時代中期とみられる赤色塗彩された土師器を中心とする遺物が多く出土していることから、およそこの時期のものである可能性が高いと思われる。

IV 出土遺物について

1. 出土遺物の概要

94・95年度の発掘調査に伴って三田谷Ⅰ遺跡から出土した遺物には、次のようなものがある。

①土器・土製品・陶磁器

縄文土器（後期前葉・中葉・後葉）、晚期前葉・中葉・後葉）
弥生土器（板付Ⅰ・Ⅱ式、前期前葉・中葉・後葉、中期中葉・後葉、後期前葉・中葉・後葉）
土師器（古墳時代前期・中期・後期、奈良時代・平安時代）
須恵器（古墳時代中期・後期、奈良時代・平安時代）
赤色塗彩土師器（古墳時代中期～後期、奈良時代～平安時代）
手捏ね土器・土馬・土製支脚（古墳時代～奈良時代）
墨書き土器（土師器・須恵器～奈良・平安時代）・ヘラ書き上器（須恵器～奈良時代）
輸入陶磁器（白磁・青磁・褐釉・黒釉～平安・鎌倉・室町時代）
国産陶磁器（綠釉陶器～平安時代、古瀬戸～平安時代、常滑～平安・鎌倉時代、備前～鎌倉時代～室町時代）

②石器・石製品

石鐵（四基式石鐵、無茎式石鐵）、石錐、石匙、楔、押圧具、削器、スクレーパー、檜木製品、異形石器、大形楔形石核、ハンマー、剥片、打製石斧、石鍬、局部磨製偏平石斧、柱状片刃石斧、局部磨製石鎌、局部磨製石庖丁、磨製石鐵、磨製石斧、石錘（打欠石錘、切口石錘、有溝石錘）、石冠状石製品1、石棒3、磨石・凹石、石皿・台石、砥石、石製紡錘車、碧玉製管玉1、硯2、滑石製石鍋2、五輪塔（空風輪部2、火輪部2、水輪部6）、宝篋印塔（相輪部1、笠部1）、石臼1

③木器・木製品

農具類（鍬・鋤、えぶりり、横鋤、木鍤、田下駄）、紡織具（糸巻具）、武器（丸木弓）、服飾具（扇、下駄）、容器（挽物桶、剝物木皿・槽、円形曲物、楕円形曲物、長方形曲物、蓋物）、文房具（物指？）、祭祀具（人形、刀形、劍形、舟形）、雜具（火鑊板）、部材（机・案・箱）、建築部材（扉材・扉装置、壁板材）、杭、その他用途不明品

④金属製品・鍛冶関係遺物

銅錢（和同開珎1、開元通宝1、宋錢7、無文錢1）、鉄製品（刀子1、鉄斧1、穗摘具1、鉄鎌？、その他用途不明品）、鐵鎌（方頭式1、特保式2、鑿刃式1、楓葉式1）、鑄銅製巡方1、耳環1、方形隅切り天下一銘鏡1、鍛冶関係遺物（フイゴ羽口、鍛冶炉炉壁溶解物、椀型鍛冶岸、不定形鍛冶滓、鍛冶鉄塊系遺物）

⑤動植物遺存体

桃種、クルミ、ウリ科種子、牛馬齒、骨片

2. 縄文時代後期後半から縄文時代晚期後半の土器群

今回、本遺跡からは、縄文時代後期後半から晚期終末の土器群が多数出土した。また、晚期後半の突堤文土器は、弥生時代早期から前期にまでわたる土器であるので、ここでは弥生時代前期初頭土器群に併行するものについても含めることにする。

ここで解説する縄文時代後期後半から晚期後半の間は、土器の全体像をつかむのが難しく混然としている。ここでは、事実記載の便宜をはかるために、はじめに既存の型式編年を基準にしつつ、大まかな分類に基づいた大別をおこなっておく。なお、後期前葉より晚期中葉にわたる縄文土器の型式学的説明においては、近畿地域土器編年を主に参照し、それとの比較から地域の特性を見出すよう努めた。当然これは、当地域における型式設定に備えるものである。

精製有文土器

1～3は後期前葉に位置づけられるものである。嶮ヶ鼻式ないし、それに後出する北白川上層式3期に併行しよう。1、2はともに当期に特徴的な鉢であるが、前者の胴部意匠は特異である。3はバケツ形を呈そうか。口縁部に付される内外連繋施文の突起は九州・小池原下層式等との類似を指摘でき、外面の三角形意匠等は関東・堀之内式等との関係を連想させるものがある。

4、5はともに注口付土器の把手にあたろう。特に5は広域に分布する関東・加曾利B1式のそれとの類似が指摘される。4は3孔もつ点が特異であるが、二枚貝腹縁刺突を充填する特徴から一乗寺K式併行期にあたろう。6、7はともに波状口縁深鉢か。前者の内屈する口縁部の上端を無文とする点は一乗寺K式に共通するが、波頂部凸帯が下がって位置するところが新しい傾向である。後者は縦位有刻隆帯を2条並列させるもので、口縁部形態とともに位置づけが困難である。両者の時期に大差なく、ともに後期中葉であろうか。

8の器種は不明確であるが、縦位構造把手が取り付く。把手の両側は刻まれ、そこよりそれぞれの付け根を介して、横位に刻目帯が2条巡る。晚期初頭・滋賀里II式に併行しようか。9、10は2本ないし3本一單位の沈線束を水平に巡らすのみで、後期後葉・宮滝2式ないし滋賀里式併行期にあたろう。ただし、腹部の張るつくりはむしろ九州・御領式等に近いものを感じさせる。前者は注口付土器となるものか。

11、13は晚期中葉。12は不明である。14～17は口縁部内外に刺突列をもつ一群で、14、15は、11、13とともに縦原式ないし谷尻式併行期となろう。16、17は所謂孔列土器で、口縁部内面から半貫通の孔列を施す。片岡宏二氏分類の1-a類にあたろう（片岡 1998）。山陰における類例の増加は著しく、在地土器型式への一定の影響が14、15等に看取される。

19～21は注口部になる。19は不明であるが、20の付け根下腹部を膨らませる特徴は一乗寺K式に併行するものであろう。21は注口部も発達した宮滝式併行期のもので、体部から連続するようつくりは森遺跡出土土器群（柳浦編 1994）より若干新しく位置づけられるかもしれない。22、23は注口付土器胴部で同一個体であろう。2条の凹線の配されることから元住吉山II式に比定される。

18および24、25は文様意匠上、北陸に系譜を求めるべき土器である。水平沈線に連続する三

角形抉り意匠が特徴的である。18には縦位に相対するものも認められ、全体で「陽刻無軸木葉紋」(深澤 1989)の構成となる。同じ器形の28、壺形となる32も同様のものか。31もいずれかの底部となる可能性がある。27、29は樅原式文様の施された浅鉢。2点あわせて、段を越えて交互に相対する三角形抉文が展開しよう。26の斜格子目文は若干下る可能性があるものの、概ね滋賀里Ⅱ式に併行する。やはり、三角形抉文をもつ34は壺形となり、その位置づけに苦慮する。

35~43は後期後葉・凹線文土器群の範疇で理解できるもの。凹線も太く多条な35、36が古く、同一個体である39、40、48を経て沈線施文の37、38、43へと変化するものか。深鉢胴部の39、40は腹部の張りが強く、凹線2本一単位とする点で西部瀬戸内地域との類似を想起させるが、口縁部の48が異なる。なお42は瀬戸内・岩田第四類に類するものの可能性がある。

45は沈線末端が上に向く岩田第四類の深鉢類胴部。46、47は口縁部外屈する様から同類の中でも新しいものに近いが、口縁部の貼付手法は特異である。滋賀里Ⅲa式に併行しようか。後者の外面に1条の沈線と斜沈線を配す点は、京都府・平遺跡出土資料(河野・宮地 1997)に通じるかもしれない。49、50は元住吉山Ⅰ式に併行する無文深鉢であろう。

浅 鉢

浅鉢は各時期のものが出土している。

51、68~77は後期後葉から晩期初頭、52~140は晩期全般にわたる浅鉢各種。ただし、75や81などは器形及びその位置づけとともに疑問がある。51および77は岩田第四類に類似するもので晩期初頭に編年されるものである。

89~92は、体部が算盤玉形の黒色磨研の浅鉢である。89は頸部の屈曲がつよく口縁端部が内折する。樅原式古段階に相当する。88~92は口頸部の短い浅鉢である。いずれもヨコミガキを内外面に施している。93は内面突帯をもち、内外面にヨコミガキを施している。樅原式新段階・谷尻式に相当する土器である。53から57は、体部の屈曲部から口縁部が長く外反する黒色磨研の浅鉢である。いずれも樅原式中段階相当であろうか。100・101は口縁部が長く外反する黒色磨研の浅鉢であり、端部が内面に突出する。102~104は、100などのような器形の口縁端部にリボン状などの突起が付いた浅鉢である。これらの土器はいずれも樅原式中・新段階に相当する。

58~63・78~80・95~98・110~121は、突帯文期の浅鉢である。前池式段階から沢田式に相当するものが出土している。95から98はくの字形口縁の浅鉢である。いずれも端部が短く外反する。55・110から121は口縁部がくの字状を呈し、端部を平坦あるいは丸くおさめ(111・114他)る浅鉢である。これらの多くは120などのように、端部を玉縁状にしている。61・63・99・107・108は口縁部がやや長めに外反あるいは直立するものである。122から127は口縁部が長くやや内湾する上器である。口縁部上位と下位に細い沈線を施している。器壁が極めて薄いのが特徴である。128・129は、口縁部がくの字に内湾する器形であり、端部が先細りする。口縁部上位に2条の沈線を施す。131から138は口縁部がハの字に外反する浅鉢である。131のようにミガキではなくヘラケズリもしくはヘラナデを施した粗製のものが多い。

壺 形 土 器

168~175はいわゆる夜臼系の壺であり、基本的には全て内傾接合と思われる。168、169は頸部と

胴部の境に段を形成している。169は頸部の長い壺であり、特徴的である。170、171は168～172に比べやや小型の壺である。173も小型の壺と思われ、口縁部での外反の度合いが弱い。172以外はいずれも外面に横方向のミガキを施し、内面は170のみ横方向のミガキを施し、大半はナデを施す。174は口縁部に刻目突帯を巡らす、小型の壺形土器であると思われる。外面にミガキが施される。175はいわゆる浅鉢変形壺であり、体部で屈曲し、頸部は内湾するが、口縁部で短く外反する。口縁部内面に1条沈線が巡る。

突帯文深鉢

176～484は突帯文の巡る深鉢である。このうち176～434は突帯上に刻目を施す刻目突帯であり、435～484は刻目のない無刻目突帯である。これらは、器形、口縁端部と突帯上の刻目の有無、突帯の位置などから大まかに分類可能であり、以下記述上便宜的に分類してアルファベットを冠した。

刻目突帯A類（176～210）

器形は肩部で屈曲しており、刻目を口縁端部と突帯上のいずれにも施し、突帯を口縁端部より下がった位置に巡らせる一群である。176～200は緩やかに外反し、201～206は突帯を巡らせる位置付近でより強く外側へ屈曲している。207～210は緩やかに内湾する器形である。一般的に刻目突帯文深鉢の中でも古い、「前池式」段階によく見られる形態と考えられる。調整は外面に貝殻条痕やナデ、ヘラナデを施し、内面も貝殻条痕、ナデ、ヘラナデを施している。刻目はD字、V字の刻目が多い。特徴的な刻目としては、176の口縁端部、201の突帯上、206の口縁端部、突帯上が貝殻による刻目、177の刻目を入れた後、ナデを施し凹線状の窪みをいれる刻目突帯、200の突帯上が棒状工具によるO字刻目、204の半截竹管状の工具を使用したと思われる刻目などがみられる。181は内外両面に沈線文様が認められる。

刻目突帯B類（211、212）

2個体のみ確認される。器形は肩部で屈曲し、外反する。刻目を口縁端部と突帯上に施し、突帯の位置は口縁端部に接する。211は内面に貝殻条痕が施され、口縁端部、突帯上の刻目は細く浅い小D字である。212は小片の為、詳細は不明であるが胎土、焼成等他の刻目突帯文深鉢とは異質であると考えられる。刻目は小さなD字状で、その位置は口縁端部よりやや下がったところにあるようすに特徴的である。

刻目突帯C類（213～221）

器形は鉢に分類されるものも含み、いわゆる砲弾形を呈し、刻目を口縁端部と突帯上に施し、突帯を口縁端部より下がった位置に巡らせる一群。調整は、ほとんど内外面共ナデを施しているが、213のみ内面に貝殻条痕を施している。刻目はD字、I字が多い。215の刻目は貝殻による。

刻目突帯D類（222）

1個体のみ確認される。器形は砲弾形を呈し、刻目を口縁端部と突帯上に施し、突帯の位置は口縁端部に接する。外面に粗いケズリ調整が見られ、細く浅い刻目を口縁端部と突帯上に施している。

刻目突帯E類 (223～324)

器形は肩部で屈曲し、刻目を突帯上にのみ施し、突帯を口縁端部より下がった位置に巡らせる一群。突帯文上器の中で最も多くの個体数が確認される。223～311は緩やかに外反するもので、311～318は突帯を巡らせる位置付近でより強く外側へ屈曲している。319～324は緩やかに内湾するものである。刻目突帯文深鉢の中でも新しい、「沢田式」段階によく見られる形態と考えられる。調整は内外面共に貝殻条痕、ナデ、ヘラナデを施している。ナデ調整としているものの中には、貝殻条痕を施した後、ナデ消していると思われるものも幾らか含んでいる。それでも、貝殻条痕を施すものが多いことは、「沢田式」の特徴とは異なり、注目される。刻目はD字、V字が多い。貝殻による刻目は242、265、311、319、棒状工具による刻目は223、半截竹管状工具による刻目は302である。223、310のように二重に刻目を施すものもある。この他、251は補修孔があり、284の内面には沈線状の窪みが巡っている。

刻目突帯F類 (325～332)

器形は肩部で屈曲し、緩やかに外反するもので、刻目を突帯上のみに施し、突帯の位置は口縁端部に接している一群。調整は貝殻条痕、ナデ、ヘラナデが主に施されている。ナデ調整としたものの中には、貝殻条痕を施した後、ナデ消したものも含む。刻目はD字、O字、V字などが多い。327、328の刻目は棒状工具による刺突と考えられる。329の刻目突帯は刻目を施した後、ナデを施し、凹線状の窪みをいれている。330の刻目は非常に大きなD字で特徴的である。この他、331の頸部に斜め方向に走る刻目突帯が認められ、332は突帯と口縁端部との接合部に2条沈線を巡らせている。

刻目突帯G類 (333～375)

器形は砲弾形で、刻目を突帯上にのみ施し、突帯は口縁端部より下がった位置に巡らせる一群。調整は貝殻条痕、ナデ、ヘラナデが施されている。ナデ調整としたものの中には、貝殻条痕を施した後、ナデ消したものも含む。刻目はD字、V字、I字などが見られる。343の刻目は半截竹管状工具、347、348、371の刻目は棒状工具、350、356の刻目は貝殻などをそれぞれ刺突、押し引きなどしてつくっている。341の刻目突帯は刻目を施した後、突帯にナデを施し、凹線状の窪みをいれている。この他、342の内面に斜めに走る2条沈線文が認められる。

刻目突帯H類 (376～392)

器形は砲弾形で、刻目を突帯上にのみ施し、突帯の位置は口縁端部に接している一群。調整はほとんど内外面共にナデが施されている。擦痕が認められるものもある。刻目はV字、I字が中心である。381は頸部と胴部の境に刻目を施している。376の刻目は半截竹管状工具、390の刻目は棒状工具によるものである。380、381の頸部には斜め方向に走る刻目突帯が認められる。突帯の形状にも特徴があり、385のように口縁端部に突帯が覆い被さっているような形態のものもある。

刻目突帯I類 (393～408)

いわゆる2条突帯をもつ一群である。393～395は口縁端部まで残存しており、いずれも肩部で屈曲し、外反する器形である。396～408は、2条突帯の胴部と考えられる破片である。多くは屈曲す

る器形と思われるが、砲弾形のものも含まれている。

刻目突帯その他（409～434）

刻目突帯深鉢であるが、小片のため器形などが不明瞭で分類できない一群である。409～415は口縁端部と突帯上のいずれにも刻目が施され、突帯は口縁端部より下がった位置に巡る。416～427は突帯上にのみ刻目が施され、突帯は口縁端部より下がった位置に巡る。428は上端が欠損し、2条突帯の胸部破片とも思われるが、小片で摩滅が激しく不明瞭であり、断定できない。429～434は突帯上にのみ刻目を施し、突帯の位置は口縁端部に接している。

無刻目突帯A類（435～440）

器形は屈曲、外反し、無刻目突帯を口縁端部より下がった位置に巡らせる一群。435～439は突帯の巡る位置付近で強く外反するが、440は直線的に外反する。調整は内外面ともにナデが施されるものが多いが、435、437、438、440では擦痕がみられる。これらはヘラナデの跡とも考えられるが、不明瞭な部分もあり判断しきれない。

無刻目突帯B類（441～446）

器形は屈曲し、無刻目突帯の位置が口縁端部に接している一群。441は頸部で外反するが、442～446は内湾する。突帯の形状では、442のような厚手で玉縁状の突帯、445のような垂れ下がり気味の突帯を口縁端部に覆い被さるようにしてついているもののように特徴的なものがみられる。調整はほとんどが内外面共にナデが施されている。

無刻目突帯C類（447～450）

器形は砲弾形で、無刻目突帯の位置を口縁端部より下がった位置に巡らせる一群。447、448は器壁とともに突帯も薄手である。調整はいずれも内外面共にナデが施されている。

無刻目突帯D類（451～480）

器形は砲弾形で、無刻目突帯の位置が口縁端部に接している一群。無刻目突帯の中では最も個体数が多い。突帯の形状は小型のものから大型の玉縁状のものまである。474～480は口縁端部と突帯との境に窪みがみられ、特に475は溝状に巡っている。479は棒状工具による刺突文と思われるが、それ以外は指頭圧痕によるものである。調整はほとんどが内外面共にナデであるが、451の内外面にはヘラナデの跡であろうか擦痕、455、456、466には貝殻条痕がみられる。

無刻目突帯E類（481）

1個体のみ確認される。2条無刻目突帯をもつもので、器形は屈曲しており、口縁は波状口縁を呈す。内面の上半部はミガキが施され、内面下半部、外面はナデが施されている。

無刻目突帯その他（482～484）

無刻目突帯であるが、小片のため器形などが不明で分類できない一群である。482～484は一部欠

指しているものの無刻目突帯の位置は口縁端部に接している。調整も小片で摩滅していることから不明瞭であるが、内外面共にナデが施されていると思われる。

突帯文系土器（485～499）

これらの上器類は、基本的に砲弾形の器形で口縁に接して突帯を巡らせている。接合が外傾接合と思われるものがあり、色調も黄褐色系、橙褐色系のものが多く、通常の突帯文土器とは様相が異なることから、遠賀川式（系）土器の一つとして考え、ここではいわゆる弥生化した突帯文系土器とした。485～493は砲弾形の器形で、細いI字刻目をもつ刻目突帯を口縁端部に接して巡らせている。493は玉縁状の刻目突帯で、内面に1条沈線を巡らせている。494、495は刻目突帯を巡らせ、口縁上端の平坦面には刺突文があり、頸部に半截竹管状工具で押し引いたと思われる沈線文が見られる。496の突帯でつくった口縁下端に非常に細く、浅い沈線状の刻目が見られる。497、498は口縁上端の平坦面に細く、浅い沈線が見られ、それぞれ4条1単位、2条1単位で山形のようになっている。499は口縁上端の平坦面に2条1単位の沈線文と刺突文が交互に見られる。

深 鉢

図9～12は粗製の深鉢である。頸部の屈曲するもの（141～146・154～161）と砲弾形のもの（147～150・162～167）がある。155の口縁部内面の肥厚帯は低く器面との境が不明瞭となっている。141の内外面には貝殻条痕文を施している。157は口唇部が平坦であり、口縁部外面に条痕文をもつ土器で、篠原式古段階に相当する土器であろう。158～161は口唇部に刻み、あるいは押圧文をもつ土器であり、篠原式中・新段階に相当する土器であろうか。142～144は口縁部が無文であり、篠原式に相当する土器である。砲弾形については、145・150・164・166・167は無文であり、149・162・163・165は外面に条痕文あるいは擦痕を施している。このうち、162・163・165は口唇部に刻みをもち、篠原式中・新段階の様相を示している。

底 部

500から547は底部破片である。形態的にいくつかに分類できる。500から507は、丸底あるいは尖底を呈するものである。500～502・504は尖底であり、外面はヘラナデ、内面には削りを施している。503は丸底であり、外面にヘラナデ、内面に貝殻条痕を施している。505は丸底であり、中心部分に内側から粘土盤を貼り付け外側がやや窪む。外面にヘラナデを施している。506・507は底が丸底で、縁辺部がくの字に屈折するものである。508から511は底部が高台状になるものである。いずれも底部外面が窪み、縁辺が外側に張り出している。外面にはいずれもヘラナデを施している。512から520は、高台状を呈しつつも縁辺が外側に張り出さない底部である。521から531までは底部外面が上げ底状のものである。上げ底の程度は、521や531のように高いもの、529・530のように低いものがある。532から546までは平底の底部である。532から535までは、縁辺部が外側にやや突出する。536から542は、縁辺部の突出なく緩やかに外反する。536・542は、外面にヘラナデを施している。544は底部や上位に一条の沈線をもつ。外面にヘラナデを施している。546は、長胴気味に体部が立ち上がる底部であり、外面に貝殻条痕を施している。543・545は小形の鉢の底部と考えられ、体部はやや急に立ち上がる。543は無文で、545は体部下位に二条の沈線文をもつ。547は台部

の破片である。台部の縁辺部は肥厚し、体部との接合部外面に二条の沈線文を施している。底部外面については、網代痕等は1点もない。以上のように形態は大きく3つに分かたれ、底面をもたない丸底、中央の浮く凹底、そして平底がある。底部形態のみから時期を観察することは困難であるが、丸底は後期末以降の年代が与えられ、近畿では繩原式中段階以降、鬼塚期までに一般的である。しかし、日本海沿岸地域の平遺跡では後期末晚期前葉と考えられる深鉢においても同形態が採用されており、同県の板屋Ⅲ遺跡でも企形の復元できる砲弾形深鉢の多くが丸底となることから、より幅をもたせて推量した方がよいかもしれない。

(小林・岡田・下江)

3-1. 弥生時代前期初頭の土器群

本遺跡出土の弥生時代前期初頭の土器群は、出雲地域における前期最初頭の土器群であり、北部九州における板付I式からIIa式に相当する土器である。これら土器群は、縄文時代の土器群と同様に包含層出土であり、層位的な分離によるものではなく近年の他地域における該期土器研究を援用しつつ、胎土などの様々な特徴を加味して土器群としてのまとまりを抽出した。したがって、便宜的な様相であることは免れないが、当地域における弥生文化の成立を考える上で重要な資料であるので、敢えて以上のような方法をとった。土器は、壺と甕が出土している。

壺

548～559は壺である。548は突唇文系の壺であり、口縁部は粘土帯を外傾接合して作出し、外接させている。内面はヘラナデを施している。550は小形壺の口縁部であり、端部がわずかに肥厚する。549から558までは大形壺の口縁部片である。いずれも、粘土帯は外形接合であり、553・554・555・～558については、段の形成に接合部を利用している。いずれも内外面にヨコミガキを施している。

558-1は、口縁部の粘土接合部を利用した段をもち、端部がきつく外反する。外面は段部にも顯著にヨコミガキを施し、内面は上位のみヨコミガキを施している。ヨコミガキ部より下位にはハケメの痕跡がわずかに残る。外面と内面の上位に赤彩を施している。558-2から558-4までは558-1と同一個体と考えられる頸部及び体部片である。553-2は口縁部の下位から頸部にかけての破片であり、やや風化しておりミガキについては不明であるが、ハケメ痕がわずかに残る。内面には縦方向の強いナデを施している。外面に赤彩を施している。558-3は、頸部の段部付近の破片である。段は粘土帯の外傾接合を利用していている。段部より上位はヨコミガキを施し、下位には横方向のハケメ痕が残る。外面に赤彩を施す。

560-1から571は壺の口縁部片である。560から566までは口縁端部の下端に刻みをもついわゆる「口縁下端凸状壺」である。これらのうち、509から562は頸部に段をもつ壺である。560-1から3は同一個体である。口縁部は外反し、口唇部は平坦である。端部下端に板状工具による細かい刻みが施される。内面上位には細い沈線を一条施している。段部は、ヘラナデにより面取りしている。段部より上位は斜位または横位、下位には縦位のハケメを施している。内面は横位または斜位のハケメを施している。561は、頸部にも刻みを施した壺である。口縁部は外反し、細い粘土紐を端部下端に貼り付け、板状工具による細かい刻みを施している。段部は、粘土帯の外傾接合を利用しておらず、刻みは端部と同じ工具により施している。562は、端部に561同様細い粘土紐を端部下端に貼

り付け、板状工具による細かい刻みを施している。段部は、粘土帯の外傾接合を利用している。外面に斜位のハケメ、内面は横位のハケメを施している。563は口縁部が強く外接し、端部の下端に刻みをもつ。屈折部には沈線を一条施している。564も口縁部が強く外接する壺の口縁部片である。端部下端に刻みを施している。

565は粘土帯の内傾接合の壺の口縁部片である。端部の下端に刻みをもつ。566は口縁部が外接し、体部がやや張る器形の壺である。口唇部は平坦であり、口縁部下端に刻みをもつ。外面にハケメを施す。567は頸部がやや屈曲し、口縁部が緩く外側に立ち上がる壺である。口縁端部上位に一条の突帯がつく。棒状工具による刻みを施し、頸部と体部の境がわずかに段状を呈する。粘土帯の接合は外傾である。外面にヘラナデを施す。568から571は、如意形口縁甕に類する壺である。568・569はともに口縁部が外接する壺である。粘土帯接合は外傾である。外面はヘラナデを施している。570は口縁部が緩やかに立ち上がる壺の口縁部片である。端部下端に細かい刻みを施している。内外面にヘラナデを施している。571は刻みのない壺であり、端部がわざかに外接する。外面にヘラナデを施している。

3-2. 弥生前期中葉以降の土器

572は、壺の肩部片であり、肩部上位に三条の沈線文と、五条の重弧文をもつ。外面に赤彩を施す。外面にミガキを、内面にはナデを施す。内面にはハケメ痕が残る。573は舟形土器の一部になる可能性のある土器である。外面に細かい沈線による木ノ葉文を施している。574・575は中形壺である。頸部と肩部の境の段は削り出しにより、この段部と体部中位に沈線を三条施し体部文様帶を区画している。この区画の中には、綾杉文が施されている。(小林)

参考文献

- 河野一隆・宮地聰一郎ほか 1997「平遺跡」『京都府遺跡調査概報 第79冊-1』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 深澤芳樹 1989「木葉紋と流水紋」『考古学研究 第36巻第3号』考古学研究会
- 柳浦俊一編 1994「森遺跡・板屋I遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡」(志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2) 島根県教育委員会
- 柳浦俊一 1994「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要—飯石郡頃原町森遺跡出土土器を中心に—」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会
- 片岡宏一 1988「日本山上の前・中期無文土器—孔列土器・松菊里型土器を中心にして—」『環濠集落と農耕社会の形成』(九州考古学会・嶺南考古学会第3回合同考古学大会)九州考古学会・嶺南考古学会
- 片岡宏二 1998「島根県出土の孔列土器について—板屋III遺跡出土の孔列土器を中心にして—」、内田律雄編『板屋III遺跡』(志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書5)島根県教育委員会
- 家根祥多 1994「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」、林謙作編『縄紋晩期前葉～中葉の広域編年―文部省科学研究費(総合A)研究成果報告書一』北海道大学文学部

番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	調査	文様・特徴	胎土	焼成	色調	その他の
1	浅鉢	13.0	8.0	内: 外: ナガキ	体部に磨削文 ナガキ	0.5~1mmの大の擦を多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	裏文帯に赤色擦彩あり。
2	鉢			内: 外: ナダ	体部に羽状彫文	1mmの大の擦を含む。	普通	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
3	鉢	5.7		内: 外: ナガキ	口縁部に磨削線	0.5~1mmの大の擦を多く含む。母母合。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
4	注口付土器(把手)	6.5		内: 外: ナダ	外面に貝殻摩擦による丘陵文あり。	微少な白色擦を多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
5	圓鉢	5.5		内: 外: ナダ	楕円把手	1mmの大の擦を多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
6	圓鉢			内: 外: ナダ	脚部に刻文	擦込み。		内: 外: ナダ	被狀口縁。
7	圓鉢	7.1		内: 外: ナダ	縁部は底面を輻方向に走る、竹管	微少な擦をまばらに含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	波狀口縁。外面報付。
8	把手		7.3	内: 外: ナダ	外面把手部分に刻目	微少な擦をまばらに含む。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	外面報行者。
9				内: 外: ナダ	口縁部・体部に磨削文	擦込み。		内: 外: ナダ	
10	片口付土器?			内: 外: ナダ	体部に擦削文	擦込み。		内: 外: ナダ	
11	突起?	6.0		内: 外: ナダ	口縁部に中央の瘤と円形浮出	微少な白色擦をやや多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
12	突起?	4.4		内: 外: ナダ	唇鼻状突起	微少な擦を多く含む。	やや良	内: 外: 灰白色 灰白色	
13	圓鉢			内: 外: ナダ	口縁部に円形浮出	微少な擦をまばらに含む。		内: 外: ナダ	
14	圓鉢	2.7		内: 外: ナダ	内・外面に斜突文がある。	0.5~1mmの大の擦をまばらに含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	内・外面の擦は風化のため不明瞭。
15	圓鉢	2.8		内: 外: ナダ	内面に斜突文がある。(斜突文、D字文)	細粒まばらに含む。	普通	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
16	圓鉢	4.9		内: 外: ナダ	内面に斜突工具による斜突文があり、いわゆる孔突上部。	微少な擦をまばらに含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
17	圓鉢	4.1		内: 外: ナダ	内面に斜突工具による斜突文があり、いわゆる孔突上部。	0.5~1mmの大の白擦を多く含む。	やや良	内: 外: 灰褐色 灰褐色	
18	鉢	10.5		内: 外: ナダ	口縁部に横位刻印 I (29.0)	0.5~1mmの大の白色文字	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
19	往口付土器(往口部)	6.6		内: 外: ナダ	圓形、裏側に尖円状文。	0.5~1mmの大の白色擦を多く含む。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	表面風化のため調整小問題。
20	往口付土器(往口部)	7.1		内: 外: ナダ	輪形容	1mmの大の擦をやや多く含む。	良好	内: 外: ナダ	内面風化等の内部腐食。
21	往口付土器(往口部)	8.8		内: 外: ナダ	口下部に凹部と凸部	微少な白色擦を多く含む。表面白。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	外表面風化のため調整小問題。
22	往口付土器(WARD)			内: 外: ナダ	正面き三叉文、垂滑文、体部斜面文	やや粗良	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
23	往口付土器(WARD)			内: 外: ナダ	22と同一個体	やや粗良	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
24	鉢			内: 外: ナダ	横位対向 I 文字	擦込み。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
25	浅鉢			内: 外: ナダ	横位対向 II 文字	擦込み。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
26	鉢			内: 外: ナダ	縦曲文	擦込み。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
27	浅鉢			内: 外: ナダ	木の筋文	擦込み。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
28	浅鉢			内: 外: ナダ	横位対向 I 文字	擦込み。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
29	浅鉢			内: 外: ナダ	木の筋文	擦込み。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
30	浅鉢			内: 外: ナダ	法螺文 5 種	擦込み。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
31	鉢	2.8		内: 外: ナダ	底面部に I 文字。	擦込み。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
32	鉢			内: 外: ナダ	吹縮文	白擦多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
33	高杯形土器(BEND) 底部(7.2)	6.0		内: 外: ナダ	7.の平行沈線文。	微少な擦をまばらに含む。	良好	内: 外: 灰褐色 灰褐色	
34	浅鉢			内: 外: ナダ	トト割りくび二叉、外:ナガキ	白擦多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
35	深鉢?	3.7		内: 外: ナダ	外面に3条の凹彫あり。	白擦多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	内・外面の剥離は風化のため不明瞭。
36	深鉢?	6.4		内: 外: ナダ	外面に凹彫文があり。	1mmの大の擦を多く含む。	普通	内: 外: 灰褐色 灰褐色	内・外面の剥離は風化のため不明瞭。
37	深鉢?	6.3		内: 外: ナダ	内・外面に凹彫文あり。	0.5~1mmの大の擦を多く含む。	普通	内: 外: 暗褐色 暗褐色	内・外面の剥離は風化のため不明瞭。
38	深鉢?	6.0		内: 外: ナダ	外面に凹彫文あり。	細粒多く含む。	普通	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
39	深鉢?	7.6		内: 外: ナダ	外面に凹彫文あり。	細粒多く含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	内・外面の剥離は風化のため不明瞭。
40	深鉢?	5.8		内: 外: ナダ	外面に凹彫文あり。	精良。	良好	内: 外: 灰白色 灰白色	
41	深鉢?	6.6		内: 外: ナダ	内・外面に凹彫文あり。	0.5~1mmの大の白擦を多く含む。	やや良	内: 外: 暗褐色 暗褐色	
42	深鉢?	6.3		内: 外: ナダ	内面に羽状彫の溝ある。	1mmの大の擦をまばらに含む。	良好	内: 外: 暗褐色 暗褐色	

43	深林?		6.1 内: 7 外: 7	外面に葉紋?あり。 1mm大の葉を多く含む。	普通	内: 暗褐色 外: 暗褐色	内・外面の調整は風化のため不明显。
44	深林?		内: ナデ 外: ナデ	粗面部に葉紋 細粒多く含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色	内: 暗褐色 外: 暗褐色
45	深林		内: ナデ 外: ナデ	沈殿紋	細粒多く含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
46	深林		内: ナデ 外: ナデ	帶状口縫に網状紋	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
47	深林		内: ナデ 外: ナデ	帶状口縫に網状紋	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
48	浅林		5.6 内: ナデ 外: ナデ	外面凹皺?あり。 細粒多く含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色	内: 暗褐色 外: 暗褐色
49	深林		5.8 内: ナデ 外: ナデ	無文	1~2mm大の葉を含む。	やや良	内: 暗褐色 外: 暗褐色
50	深林		5.6 内: ナデ 外: ナデ	無文	0.5mm大の白穢を含む。	良好	内: 暗褐色 外: 黒褐色
51	浅林	口裂(30.0) 既熟透(8.5)	15.0 内: ミガキ 外: ミガキ	口裂部外側に網状と 細粒の塊にそれぞれ 2色斑紋がある。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色	内: 暗褐色 外: 暗褐色
52	浅林		4.6 内: ミガキ 外: ミガキ	口裂部内面2条沈殿紋。	やや良好 葉を含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
53	浅林	(20.6)	7.0 内: ナデ 外: ナデ	無文	1~2mm大の葉を含む。	やや良	内: 暗褐色 外: 暗褐色
54	浅林	(30.0)	7.9 内: ? 外: ?	口裂部内面に1条沈殿紋。	細粒多く含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
55	浅林	(25.2)	5.4 内: ミガキ 外: ミガキ	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
56			内: ミガキ 外: ミガキ	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
57	浅林	(37.6)	6.5 内: ミガキ 外: ミガキ	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
58	浅林	(27.6)	8.0 内: ? 外: ?	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
59	浅林	(30.0)	3.9 内: ヘラナデ 外: ナデ	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
60	浅林	(30.0)	6.4 内: ? 外: ?	無文	2~3mm大の白穢 を多く含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
61	浅林	(26.0)	7.7 内: ミガキ 外: ミガキ、 ヘラナデ	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
62	浅林	(31.4)	5.0 内: ? 外: ?	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
63	浅林	(20.0)	7.4 内: ミガキ 外: ミガキ	無文	1~2mm大の白穢 含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
64	浅林	(32.2)	7.8 内: ヘラナデ 外: ケナデ?	無文	1mm人の白穢を含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
65	浅林	(21.4)	5.5 内: ケナデ? ヘラナデ?	無文	1~2mm大の葉を 多く含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
66	浅林	(26.4)	6.3 内: ミガキ 外: ミガキ	無文	細粒をまばらに含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
67	浅林	(18.2)	9.2 内: ミガキ 外: ナデ	無文	1~2mm人の白穢 を含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
68	浅林		内: ナデ	無文		良好	内: 外:
69	浅林		4.5 内: ナデ 外: ナデ	口裂部外縁に外面に1 条沈殿紋。	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
70	浅林		5.2 内: ナデ 外: ナデ	口裂内面1条沈殿紋。	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
71	浅林		5.3 内: ? 外: ?	口裂部外縁に3条沈 殿紋。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色	内: 暗褐色 外: 暗褐色
72	浅林		3.6 内: ナデ 外: ナデ	外面を2条沈殿紋。	1~2mm大の葉を まばらに含む。	普通	内: 暗褐色 外: 暗褐色
73	浅林		4.7 内: ? 外: ?	口裂部外縁に3条沈 殿紋。		内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色
74	浅林		8.3 内: ナデ 外: ナデ	外面口縫部、頭部と 細粒多く含む。それぞれ 2条沈殿紋。	細粒多く含む。	普通	内: 暗褐色 外: 暗褐色
75	浅林		4.1 内: ミガキ 外: ミガキ	口裂部分、外面に1条 沈殿紋。	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
76	浅林		5.6 内: ナデ 外: ナデ	口裂部外縁に2条沈 殿紋、口裂部内面に1 条沈殿紋。	白穢含む。	普通	内: 黑色 外: 黑色
77	浅林		4.0 内: ヘラナデ 外: ヘラナデ	内面を1条沈殿紋。	0.5mm人の葉を含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
78	浅林		5.4 内: ナデ 外: ナデ、ケ ナデ?	内面を1条沈殿紋。	1mm人の葉をまば らに含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
79	浅林		6.0 内: ナデ 外: ナデ	口裂部口縫部、頭部と 細粒多く含む。それぞれ 2条沈殿紋。	細粒をまばらに含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
80	浅林		8.8 内: ナデ 外: ナデ、ケ ナデ?	外口裂部と調節部の 間に1条沈殿紋。	0.5mm大の白穢を 多く含む。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
81	浅林		5.3 内: ナデ 外: ナデ	11種内面に2条沈 殿紋。	細粒多く含む。	やや良	内: 暗褐色 外: 暗褐色
82	浅林		3.0 内: ミガキ 外: ミガキ	11種内面に2条沈 殿紋。	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
83	浅林		4.6 内: ケナデ? 外: ケナデ?	外面に沈殿?	0.5mm以下の葉を 多く含む。葉 含む。	やや粗悪	内: 暗褐色 外: 暗褐色
84	浅林		6.0 内: ミガキ 外: ミガキ	無文	精良。	良好	内: 黑色 外: 黑色
85	浅林		4.9 内: ミガキ 外: ミガキ	無文	精良。	良好	内: 暗褐色 外: 暗褐色
86	浅林		4.0 内: ミガキ 外: ミガキ	無文	2mm大の白穢を多 く含む。	普通	内: 暗褐色 外: 暗褐色

87	浅跡		4.0	内：ナデ 外：ナデ	無文	稍良。	普通	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
88	浅跡		3.8	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	稍良。	良好	内：暗褐色 外：黑色		
89	浅跡	(17.2)	1.7	内：ナデ 外：ナデ	無文	稍良。	良好	内：暗褐色 外：黑色		
90	浅跡		6.0	内：ナデ 外：ナデ	無文	1mm人の瞳を多く含む。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
91	浅跡		4.4	内：ナデ 外：ナデ	無文	稍良。	普通	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
92	浅跡		3.8	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	細粒を多く含む。	普通	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
93	浅跡		2.7	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	稍良。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
94	浅跡		3.8	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	稍良。	普通	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
95	浅跡		5.0	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	細粒を多く含む。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
96	浅跡		5.0	内：ナデ 外：ナデ	無文	稍良。	良好	内：暗褐色 外：灰褐色		
97	浅跡		4.0	内：ミガキ 外：ミガキ	外側に凹縫条の窪みあり。	稍良。	良好	内：明灰褐色 外：明灰褐色		
98	浅跡	(17.8)	6.0	内：-	無文	細粒を多く含む。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
99	浅跡		3.9	内：ミガキ 外：ミガキ	内面1条次線底5.	細粒を多く含む。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
100	伏跡		5.0	内：-	無文	細粒を多く含む。	やや粗悪	内：灰褐色 外：暗褐色	LJ接縫部が粗悪。	
101	浅跡		5.4	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	稍良。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色	補修孔あり。	
102	浅跡		4.1	内：ミガキ 外：ミガキ	1mm以内の白色の外縫部に1条底5.表面滑らか?実記あり。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
103	浅跡		3.0	内：ミガキ 外：ミガキ	口縫部内部に1条底5.縫通る。突起あり。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
104	浅跡		3.6	内：ミガキ 外：ミガキ	実記あり。	1mm以下の白色縫を多く含む。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
105	浅跡		7.4	内：ミナナデ 外：ミナナデ	無文	1mm以下の白色縫をまばらに含む。	良好	内：明灰褐色 外：明灰褐色		
106	浅跡		8.7	内：ナデ 外：ナデ	無文	砂粒多い。	やや粗悪	内：灰褐色 外：暗褐色		
107	浅跡		5.5	内：ナデ 外：ナデ	無文	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
108	浅跡		4.6	内：ナデ 外：ナデ スリ	無文	細粒まばらに含む。	普通	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
109	浅跡		5.5	内：ヘナナデ 外：ヘナナデ	無文	頭部と脚部の境の外縫部に叩き入り、並んで1列縫孔。0字。	稍良。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色	
110	浅跡		5.9	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部と脚部の境の外縫部に叩き入り、並んで1列縫孔。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
111	浅跡		4.6	内：ナデ 外：ナデ	無文	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
112	浅跡		3.8	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	稍良。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
113	浅跡		4.2	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部の端に陥り。頭部の端に陥り。	稍良。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
114	浅跡		2.8	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	稍良。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色		
115	浅跡		5.1	内：ナナミ 外：ナナミ	無文	2~3mmの大の縫をまばらに含む。	良好	内：灰褐色 外：暗褐色		
116	浅跡		4.0	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	1~2mmの大の縫を含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
117	浅跡		5.2	内：ミガキ 外：ミガキ	口縫部に沈縫部。	稍良。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色		
118	浅跡		4.3	内：ミガキ 外：ミガキ ヘルナナデ	口縫部・脚部に沈縫部。	茎舟含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	外縫部付着。	
119	浅跡		6.3	内：ミガキ 外：ミガキ	口縫部・脚部に沈縫部。	周舟。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
120	浅跡		3.7	内：ミガキ 外：ミガキ	口縫部・脚部に沈縫部。	稍良。	良好	内：灰褐色 外：暗褐色		
121	浅跡	(14.2)	10.2	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部に赤色形容。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
122	浅跡		7.0	内：ナデ 外：ナデ	口縫部外縫に2条底5.縫通る。	細粒を含む。	普通	内：灰褐色 外：暗褐色		
123	浅跡		7.0	内：ミガキ 外：ミガキ	口縫部外縫に1条底5.縫通る。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	「やや弱」の注記あり。	
124	浅跡		4.5	内：ミガキ 外：ミガキ	口縫部外縫に1条底5.縫通る。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
125	浅跡		5.9	内：ナデ 外：ナデ	「口縫部外縫に1条底5.縫通る。頭部と脚部の外縫部に1条底5.縫通る。」	細粒を含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色		
126	浅跡		6.9	内：ナデ 外：ナデ	前面を2条底遮断。	稍良。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色		
127	浅跡		8.7	内：ナデ 外：ナデ	口縫部外縫に1条底5.縫通る。頭部と脚部の外縫部に1条底5.縫通る。	稍良。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色		
128	浅跡		7.6	内：ミガキ 外：ミガキ ヘルナナデ	口縫部外縫に2条底5.縫通る。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
129	浅跡		5.5	内：ミガキ 外：ミガキ	口縫部外縫に2条底5.縫通る。	稍良。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		

130	浅林		2.5	内：外：	口縫部外側に3条状 筋道ある。	筋道。	-	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
131	浅林		7.8	内：ヘラナデ 外：ミガキ	無文	1~3人の顔を多く 含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
132	浅林		8.1	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	精緻。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
133	浅林		8.4	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	筋道。	良好	内：外：			
134	浅林		6.5	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	0.5~1~3人の顔 をばらばらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	内面剥離？		
135	浅林		6.0	内：ナデ 外：ナデ	無文	筋道。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
136	浅林		6.4	内：ナデ 外：ナデ	無文	筋道。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
137	浅林		3.9	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	筋道。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
138	浅林		4.4	内：ナデ 外：ナデ	無文	筋道。	良好	内：灰白色 外：灰白色			
139	浅林		7.5	内：ミガキ 外：ミガキ	無文	筋道。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
140	浅林		9.5	内：ナデ 外：ナデ	無文	1~3人の白顔をま ぶらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
141	深林		13.6	内：条紋 外：条紋	条紋文	1~3~5人の顔を 含む。	やや粗雑	内：暗褐色 外：暗褐色			
142	深林	(34.0)	10.4	内：ナデ、ヘ 外：ナデ、ヘ ナデ		2~3人の顔を含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
143	深林	(39.0)	14.5	内：ヘラナデ 外：ナデ、ナ デ		細粒多く含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
144	深林	(36.2)	15.3	内：ヘラケズ 外：ミタナツ		1~1.5mm大の白 色縞。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	外面剥付有。		
145	深林	(39.0)	14.0	内：ヘラナデ 外：ヘラナデ (ケズり後)		2~3人の顔をま ぶらに含む。	良好	内：暗褐色 外：灰白色	外面剥付有。		
146	深林	36.2	32.1	内：外：条紋、ナ デ		1~3~5人の顔を 多く含む。	吉満	内：暗褐色 外：暗褐色	抜け口縞。 外面剥付有。		
147	深林	34.5	27.3	内：ナデ 外：ナデ		1~3人の顔を 多く含む。	普通	内：暗褐色 外：暗褐色	外面剥付有。		
148	深林	18.6	13.2	内：ナデ 外：ナデ		1~3人の顔を 多く含む。	普通	内：暗褐色 外：暗褐色	内面剥付有。		
149	深林	(38.0)	15.8	内：ナデ 外：ヘラナデ		細粒多く含む。	やや良	内：暗褐色 外：灰白色	内面剥離は漸化のた め不規則。		
150	深林	(38.6)	24.0	内：ナデ 外：ヘラナデ		細粒多く含む。	やや粗雑	内：灰白色 外：灰白色	外向度化物性。		
151	深林(脚部一底部) 脚部最大径 (18.6)	9.2	内：ナデ 外：ナデ		筋粒を含む。 筋母を含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	外面剥付有。底 12.2は脚部あるが、 本脚部は因縁被され ていない。			
152	深林(底部) 脚部最大径 (14.8)	8	内：条紋 外：ケズリ		1~2~3人の顔を 含む。筋母含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	吉満？らしきと ある。			
153	深林	(11.2)	9	内：ナデ 外：ミガキ		1~3人の白顔をま ぶらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	吉満？らしきと ある。		
154	幹	29.2	18.4	内：ナデ 外：ナツ		0.5~1~3mmの顔 を多く含む。	良好	内：明灰褐色 外：暗褐色	口縫部透続糸目文 脚部が中央消失あり。		
155	深林		7.5	内：ナデ 外：ナデ	口縫部内面肥厚	細粒含む。	普通	内：暗褐色 外：暗褐色	口縫部が肥厚。		
156	深林		8.1	内：ヘラナデ 外：ミガキ (筋肉後)	条紋文	1~3~5人の顔を やや多く含む。	良好	内：暗褐色 外：灰褐色			
157	深林		5.8	内：ヘラナデ 外：条紋		細粒含む。	普通	内：暗褐色 外：暗褐色			
158	深林		7.0	内：ナデ 外：ヘラナデ (ケズり後)	口縫部:D字?	細粒ばらばらに含む。	良好	内：暗褐色 外：灰褐色			
159	深林		8.5	内：ヘラナデ 外：ヘラナデ (ケズり後)	口縫部:O字?	1~2~3mmの大白 色縞を含む。	良好	内：暗褐色 外：灰褐色			
160	深林		3.1	内：ナデ 外：ナデ	II縫部:D字?	筋道。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
161	深林		9.2	内：条紋 外：条紋	口縫部:O字?	0.5mm以下の大白 色縞を多く含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	外面剥付有。		
162	深林		8.0	内：ケズリ、 外：ヘラナデ ケズリ	口縫部:D字?	1~2~3人の顔を まぶらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
163	深林		11.3	内：ナデ 外：ナデ ケズリ	口縫部:V字?	筋道。筋母含む。	良好	内：灰白色 外：灰白色			
164	深林		6.6	内：ナデ 外：ナデ		1~3人の顔を含む。	良好	内：暗褐色 外：灰褐色	椎巣孔あり。		
165	深林		10.2	内：ナデ 外：ヘラナデ	I口縫部:D字?	0.5~1~3人の顔 を含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
166	深林		9.5	内：ナデ 外：ナデ		2~3人の顔を含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
167	深林		6.6	内：ナデ 外：ヘラナデ ケズリ		1~3人の白顔を含 む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
168	彫刻土器	(18.4)	10.1	内：ナデ 外：ミガキ		彫刻部の施に施あり。	1~3人の山形内。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
169	彫形土器	(16.2)	16.4	内：ミガキ 外：ミガキ		彫刻部の施に施あり。	1~2~3人の白顔 を含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色		
170	彫形土器	(10.4)	7.8	内：ミガキ 外：ミガキ		筋道。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			
171	彫形土器	(12.0)	6.4	内：ナデ 外：ミガキ		筋道。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色			

172	象形土器	馬小屋 (6.1)	11.0 内: 外: 内: 外: 内: 外:	細紋を多く含む。 横斜	普通 良好 やや良 良好 やや良 良好	内:暗褐色 外:暗褐色	内:外側の表面は風化のため不鮮明。
173	鹿形土器		8.2 内: 外: 内: 外: 内: 外:	横斜	良好 良好 やや良 良好 良好 良好	内:暗褐色 外:暗褐色	
174	刻目実帯文彫形土器		3.9 内: 外: 内: 外: 内: 外:	突唇: 1字 横斜: D字	1~5mm人の顔を含む。 1~5mm人の顔を含む。	やや良 内: 暗褐色 外: 暗褐色	表面から杏形土器に分離される。
175	鉢	33.7	9.3 内: 外: 内: 外: 内: 外:	横斜: D字	1~5mm人の顔を多く含む。	良好 内: 暗褐色 外: 暗褐色	口部内面に段があり。全体に凹凸。
176	刻目実帯文彫跡	(44.6)	9.1 内: 外: 内: 外: 内: 外:	口縁端部: 比較 突唇: D字	1~5mm人の顔をまばらに含む。	良好 内: 暗褐色 外: 暗褐色	表面を削った後の跡みを残す。
177	刻目実帯文彫跡	(35.6)	8.8 内: 外: 内: 外: 内: 外:	口縁端部: 小D字 突唇: 小字	1~4mm人の顔を含む。雲母含む。	やや良 内: 暗褐色 外: 暗褐色	表面を削った後の跡みを残す。
178	刻目実帯文彫跡	(34.6)	16.8 内: 外: 内: 外: 内: 外:	口縁端部: 小D字 突唇: 小字	3mm以下の白い点をまばらに含む。	良好 内: 暗褐色 外: 黒色	表面下半の調整はケタで施す。
179	刻目実帯文彫跡	(15.4)	5.2 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
180	刻目実帯文彫跡		6.2 内: 外: 内: 外: 内: 外:	口縁端部: D字 突唇: D字	1~2mm人の顔をまばらに含む。	良好 内: 暗褐色 外: 暗褐色	表面研磨。
181	刻目実帯文彫跡		3.8 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
182	刻目実帯文彫跡		4.1 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
183	刻目実帯文彫跡		9.3 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 黑色 外: 黑色	表面研磨。
184	刻目実帯文彫跡		8.7 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	表面土はヘラケズり気味。
185	刻目実帯文彫跡		7.6 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 黑褐色 外: 黑褐色	
186	刻目実帯文彫跡		8.9 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
187	刻目実帯文彫跡		6.2 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
188	刻目実帯文彫跡		7.5 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
189	刻目実帯文彫跡		6.1 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
190	刻目実帯文彫跡		6.4 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
191	刻目実帯文彫跡		6.2 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
192	刻目実帯文彫跡		4.3 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	被状II型。
193	刻目実帯文彫跡		4.0 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
194	刻目実帯文彫跡		4.5 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
195	刻目実帯文彫跡		3.4 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	被状II型の可能性あり。
196	刻目実帯文彫跡		3.5 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 白褐色	内面の調査は不明瞭。
197	刻目実帯文彫跡		3.3 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
198	刻目実帯文彫跡		3.0 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
199	刻目実帯文彫跡		2.9 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 黑褐色	
200	刻目実帯文彫跡		2.2 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 黑褐色 外: 黑褐色	
201	刻目実帯文彫跡	(31.0)	9.4 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
202	刻目実帯文彫跡	(30.4)	9.0 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
203	刻目実帯文彫跡	(15.4)	8.4 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	外面研磨。
204	刻目実帯文彫跡	(15.4)	4.6 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	「表面は加温状に近い」
205	刻目実帯文彫跡		4.4 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
206	刻目実帯文彫跡		6.5 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
207	刻目実帯文彫跡		7.2 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
208	刻目実帯文彫跡		6.7 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
209	刻目実帯文彫跡		4.9 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	
210	刻目実帯文彫跡		5.5 内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 外: 内: 外: 内: 外:	内: 暗褐色 外: 暗褐色	

211	刺目夾文深跡	3.7	内：各版 外：ナデ	口輪端部・小V字 突部：小V字	精良。	良好	内：暗黒褐色 外：暗黒褐色	
212	刺目夾文深跡	2.6	内：7 外：7	D輪端部・小D字 突部：小D字	1~2 mmの大の縫を まばらに含む。	良好	内：暗黒色 外：灰褐色	内・外面の調整は小 片のため不明顯。
213	刺目夾文深跡	6.5	内：各版 外：ナデ	口輪端部・小D字 突部：小D字	1~3 mmの大の縫を 多く含む。重複含む。	良好	内：淡黃褐色 外：口輪色	
214	刺目夾文深跡	8.5	内：ナデ 外：ナデ(推 測あり)	口輪端部・小V字 突部：小V字	1~3 mmの大の縫を まばらに含む。	良好	内：灰褐色 外：暗黒色	
215	刺目夾文深跡	6.5	内：ナデ 外：ナデ	口輪端部・良版 突部：良版	精良。	良好	内：暗黒褐色 外：暗黒褐色	
216	刺目夾文深跡	4.2	内：ナデ 外：ナデ	口輪端部・小V字 突部：小V字	精良。	良好	内：暗黒褐色 外：暗黒褐色	
217	刺目夾文深跡	5.1	内：ナデ 外：ナデ	口輪端部・D字 突部：D字	細縫多くまばらに含む。	やや良	内：暗黒色 外：暗黒色	
218	刺目夾文深跡	4.9	内：7 外：ナデ	口輪端部・V字 突部：V字	1~3 mmの大の縫を 多く含む。重複含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	内面の調整は唐度の ため不明顯。
219	刺目夾文深跡	4.6	内：ナデ 外：ナデ	U輪端部・小D字 突部：D字	精良。	良好	内：暗黒色 外：灰褐色	外面糊付。
220	刺目夾文深跡	4.3	内：ナデ 外：ナデ	D輪端部・小V字 突部：小V字、小D字	1~3 mmの大の縫を 含む。	良好	内：淡黃褐色 外：淡黃褐色	
221	刺目夾文深跡	1.7	内：ナデ 外：カズリ	I輪端部・小D字 突部：小D字	1~2 mmの大の縫を まばらに含む。重 複含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	外面の調整は小片の ため不明顯。
222	刺目夾文深跡	6.1	内：ナデ 外：カズリ	口輪端部・小V字 突部：V字	1~3 mmの大の縫を 多く含む。	良好	内：淡黃褐色 外：暗黒色	
223	刺目夾文深跡	(43.4)	内：各版 外：各版	突部：I字	1 mmの大の縫を含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
224	刺目夾文深跡	(40.0)	内：カズリ 外：各版	突部：V字	1~2 mmの大の縫を 多く含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
225	刺目夾文深跡	(40.0)	内：ナデ	突部：D字	1 mmの大の縫をま ばらに含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	外面糊付。
226	刺目夾文深跡	(36.0)	内：ヘラナデ 外：ヘラナデ	突部：V字	0.5~1 mmの大の白 縫を多く含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
227	刺目夾文深跡	(35.8)	内：各版 外：ヘラナデ	突部：D字	精良。良好	内：暗黃 外：暗黃 褐色	外面糊付。	
228	刺目夾文深跡	(32.6)	内：ナラナデ 外：ナラナ デ?	突部：V字	1~3 mmの大の縫を 多く含む。重複合 じ。	やや粗悪	内：淡灰褐色 外：灰褐色	
229	刺目夾文深跡	(30.0)	内：ヘラナデ 外：ナラナ デ?	突部：小D字	1 mmの大の縫をま ばらに含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
230	刺目夾文深跡	(34.6)	内：各版 外：各版	突部：D字	1~3 mmの大の縫を 含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
231	刺目夾文深跡	6.4	内：各版 外：各版	突部：?	1~2 mmの大の縫を 含む。重複含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	安部部分糊付。
232	刺目夾文深跡	(22.0)	内：各版 外：各版	突部：D字	1~3 mmの大の縫を まばらに含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	裏面上に糊みを一箇 にしている部分あり
233	刺目夾文深跡	6.4	内：各版 外：各版	突部：D字	1~3 mmの大の縫を 多く含む。重複含 む。	やや粗悪	内：暗黒色 外：暗黒色	
234	刺目夾文深跡	5.5	内：各版 外：各版	突部：小D字	1~2 mmの大の縫を まばらに含む。	普通	内：暗灰褐色 外：灰褐色	
235	刺目夾文深跡	11.5	内：各版 外：ヘラナデ	突部：V字	1~3 mmの大の白 縫を多く含む。重複 含む。	普通	内：暗黒色 外：暗黒色	
236	刺目夾文深跡	4.2	内：各版 外：各版、ヘ ラナデ	突部：V字	0.5~1 mmの大の白 縫を多く含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
237	刺目夾文深跡	9.2	内：ヘラナデ (下刷) 外：ナデ(上 手)、ヘラナ デ(下刷)	突部：V字	0.5~1 mmの大の白 縫を多く含む。	やや良	内：暗黒色 外：暗黒色	外面糊付。
238	刺目夾文深跡	4.0	内：各版 外：各版	突部：小D字	1~3 mmの大の縫を 含む。重複含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
239	刺目夾文深跡	4.4	内：各版 外：各版	突部：D字	砂継が多い。	普通	内：暗黒褐色 外：暗黒褐色	
240	刺目夾文深跡	9.6	内：各版 外：各版	突部：V字	細粒多く含む。	良	内：灰白色 外：灰白色	
241	刺目夾文深跡	5.1	内：各版 外：各版	突部：O字	1~2 mmの大の縫を 含む。重複含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
242	刺目夾文深跡	5.6	内：各版 外：各版	突部：比級	1~2 mmの大の縫を 含む。重複含む。	良好	内：暗黒褐色 外：暗黒褐色	
243	刺目夾文深跡	5.8	内：各版 外：各版	突部：V字	普通	内：灰白色 外：灰白色		
244	刺目夾文深跡	5.3	内：ナラナデ 外：ヘラナデ 、ハケメ?	突部：小V字	1~2 mmの大の縫を 含む。	普通	内：暗黒色 外：暗黒色	外面糊付。
245	刺目夾文深跡	9.7	内：各版 外：ナラナ デ?	突部：V字	1~3 mmの大の縫を 含む。重複含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
246	刺目夾文深跡	4.8	内：各版 外：各版	突部：D字? V字?	1~3 mmの大の縫を 多く含む。	普通	内：暗黒色 外：暗黒色	
247	刺目夾文深跡	4.4	内：各版 外：各版	突部：D字	1~2 mmの大の縫を 含む。	良好	内：暗黒色 外：暗黒色	
248	刺目夾文深跡	4.2	内：各版 外：ナデ	突部：D字	1~2 mmの大の縫を まばらに含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	

249	刺目突蒂文渦跡	4.5	内: 冬眠 外: 冬眠	実害: V字	1~3mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 深褐色	
250	刺目突蒂文渦跡	4.0	内: 冬眠 外: 冬眠?	実害: V字	1~2mmの大の蟲を多く含む。	やや良	内: 黄白色 外: 黄褐色	
251	刺目突蒂文渦跡	3.4	内: 冬眠 外: ヘラナ?	実害: O字	1~3mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 深褐色	頭部に発成後に開けた孔あり。
252	刺目突蒂文渦跡	3.0	内: 冬眠 外: ナダ?	実害: V字	1~3mmの大の蟲を多く含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
253	刺目突蒂文渦跡	3.0	内: 冬眠? 外: ナダ?	実害: D字? O字?	1~2mmの大の蟲を多く含む。	やや良	内: 白褐色 外: 白褐色	
254	刺目突蒂文渦跡	3.3	内: 冬眠? 外: ナダ?	実害: 小D字	1~3mmの大の蟲を多く含む。	やや良	内: 深褐色 外: 黑褐色	内・外縁の調整は不規則。
255	刺目突蒂文渦跡	4.2	内: 冬眠 外: 冬眠	実害: D字	1~3mmの大の蟲を多く含む。	良好	内: 明褐色 外: 明褐色	
256	刺目突蒂文渦跡	3.2	内: 冬眠 外: 冬眠	実害: V字	1~3mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
257	刺目突蒂文渦跡	4.0	内: 冬眠 外: ナダ? (冬眠後?)	実害: D字?	1~3mmの大の蟲を多く含む。	やや良	内: 明褐色 外: 黄褐色	外面に瘤直あり。
258	刺目突蒂文渦跡	4.0	内: 冬眠? 外: ナダ? (冬眠後?)	実害: 1字	1~2mmの大の蟲をまさに含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
259	刺目突蒂文渦跡	3.6	内: 冬眠 外: ナダ?	実害: O字	1~3mmの大の蟲を含む。葉母含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 茶褐色	
260	刺目突蒂文渦跡	3.2	内: ナダ? (冬眠後?) 外: ナダ?	実害: 小V字	1~2mmの大の蟲を含む。	良好	内: 淡褐色 外: 黑褐色	
261	刺目突蒂文渦跡	2.7	内: 冬眠 外: 冬眠?	実害: V字	1~3mmの大の蟲を多く含む。葉母含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡褐色	
262	刺目突蒂文渦跡	3.6	内: ナダ? (冬眠後?) 外: ナダ? (冬眠後?)	実害: D字	1~2mmの大の蟲を含む。葉母含む。	やや良	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
263	刺目突蒂文渦跡	3.4	内: 冬眠 外: ナダ?	実害: 小D字?	1~2mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黑褐色	
264	刺目突蒂文渦跡	3.9	内: 冬眠 外: 冬眠?	実害: D字?	1~3mmの大の蟲を多く含む。	やや良	内: 淡黄褐色 外: 淡褐色	
265	刺目突蒂文渦跡	3.0	内: ナダ? 外: ナダ?	実害: 日版	1~3mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
266	刺目突蒂文渦跡	3.2	内: 冬眠 外: ナダ?	実害: 小D字?	1~2mmの大の蟲をまさに含む。葉母含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 黄褐色	
267	刺目突蒂文渦跡	3.1	内: 冬眠? 外: ナダ?	実害: D字?	1~3mmの大の蟲をまさに含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内・外縁の調整は不規則。
268	刺目突蒂文渦跡	9.0	内: ナダ? 外: ナダ?	実害: 小V字? 細胞? 外: ナダ?	葉の細胞をばらばらに含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黑褐色	内・外縫、度化物付着。
269	刺目突蒂文渦跡	7.2	内: ナダ 外: ナダ?	実害: D字	1~2mmの大の蟲をまさに含む。葉母含む。	良好	内: 黄白色 外: 黄白色	
270	刺目突蒂文渦跡	7.0	内: ナダ? 外: 冬眠	実害: D字	1~3mmの大の蟲を多く含む。葉母含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	斑状紋。
271	刺目突蒂文渦跡	5.4	内: ナダナダ 外: ナダ	実害: D字	1mmの大の蟲を含む。	良好	内: 淡褐色 外: 淡褐色	内縁の調整はケメリ。
272	刺目突蒂文渦跡	6.8	内: ナダナダ 外: ナダナダ	実害: D字	1~2mmの大の蟲を多く含む。葉母含む。	良好	内: 黑褐色 外: 深褐色	
273	刺目突蒂文渦跡	4.1	内: ナダナダ 外: ナダナダ?	実害: V字?	1~2mmの大の蟲をまさに含む。葉母含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
274	刺目突蒂文渦跡	5.3	内: ナダ 外: ナダナダ	実害: V字	1mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
275	刺目突蒂文渦跡	5.8	内: ナダ 外: ナダ?	実害: 1字	1~3mmの大の蟲を多く含む。	良好	内: 黑褐色 外: 黄褐色	
276	刺目突蒂文渦跡	5.9	内: ナダ 外: ナダナダ?	実害: V字	葉の細胞をばらばらに含む。葉母含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
277	刺目突蒂文渦跡	5.2	内: ナダ 外: ナダ?	実害: 小V字	1~2mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
278	刺目突蒂文渦跡	6.6	内: ナダ 外: ナダナダ	実害: D字	細粒含む。	良好	内: 明褐色 外: 淡褐色	
279	刺目突蒂文渦跡	6.3	内: ナダ 外: ナダ?	実害: D字	1~3mmの大の蟲を含む。葉母含む。	普通	内: 黄褐色 外: 黄白色	
280	刺目突蒂文渦跡	7.0	内: ナダ 外: ナダ	実害: D字	1~2mmの大の蟲をまさに含む。	普通	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
281	刺目突蒂文渦跡	5.1	内: ナダナダ 外: ナダ	実害: D字?	1~2mmの大の蟲を含む。	普通	内: 淡褐色 外: 淡褐色	
282	刺目突蒂文渦跡	6.3	内: ナダナダ 外: ナダ?	実害: D字	1~2mmの大の蟲を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
283	刺目突蒂文渦跡	5.3	内: ナダ (ナダあり)	実害: 小D字?	1~3mmの大の蟲を多く含む。葉母含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	非常に選手。落葉部分多く刺目不明瞭。
284	刺目突蒂文渦跡	5.0	内: ナダ (ナダあり)	実害: D字?	口縫内面に沈継状の虫糞がある。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
285	刺目突蒂文渦跡	5.4	内: ナダ (ナダあり)	実害: O字	砂多く含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	
286	刺目突蒂文渦跡	5.6	内: ナダ (ナダあり)	実害: O字	1~2mmの大の蟲を含む。葉母含む。	良好	内: 淡褐色 外: 黑褐色	
287	刺目突蒂文渦跡	5.9	内: ナダナダ 外: ナダ?	実害: D字	砂多く含む。	良好	内: 黑色 外: 黑色	

288	刻印美文深跡		5.6	内：ナデ？ 外：ナラナデ (無目り)	突帯：小D字	1～2mmの大の縦をまばらに含む。黒母地。	良好	内：黒褐色 外：白色	内面の調整は不明確。
289	刻印美文深跡		4.9	内：ナデ 外：条模	突帯：小D字	1～3mm人の白縦を多く含む。	粗悪	内：黒褐色 外：灰褐色	
290	刻印美文深跡		4.6	内：ナデナデ 外：ナラナデ	突帯：D字	砂多く含む。	良好	内：黒褐色 外：暗褐色	
291	刻印美文深跡		4.2	内：ナデ 外：条模	突帯：小D字	砂少ない。	良好	内：褐色 外：褐色	
292	刻印美文深跡		4.1	内：ナデ 外：条模	突帯：V字	砂多く含む。	良好	内：墨色 外：墨色	外表面付着。
293	刻印美文深跡		4.0	内：ナラナデ 外：ナラナデ	突帯：V字	砂多く含む。	良好	内：黒褐色 外：暗褐色	
294	刻印美文深跡		3.4	内：ナデ 外：ナラナデ (無目り)	突帯：V字	0.5mm以下の白縦を含む。	良好	内：黒褐色 外：暗褐色	
295	刻印美文深跡		3.6	内：ナデ 外：ナラ	突帯：V字	2～3mmの大の白縦をまばらに含む。	良好	内：黒褐色 外：灰褐色	
296	刻印美文深跡		4.9	内：ナデ 外：ナラ	突帯：D字？〇字？	1～2mmの大の縦をまばらに含む。	良好	内：黒褐色 外：墨褐色	
297	刻印美文深跡		5.0	内：ナデ 外：ナラ	突帯：D字	1～2mm人の縦をまばらに含む。	良好	内：黒褐色 外：灰褐色	
298	刻印美文深跡		4.9	内：ナラナデ 外：ナラナデ	突帯：V字	砂まばらに含む。	良好	内：白色 外：灰白色	
299	刻印美文深跡		4.5	内：ナラナデ (無目り) 外：ナラナデ	突帯：小V字	1～5mmの大の縦をまばらに含む。	良好	内：淡灰褐色 外：黑色	
300	刻印美文深跡		4.7	内：ナデ 外：ナラ	突帯：D字	1～2mmの大の縦を含む。	良好	内：墨褐色 外：墨褐色	
301	刻印美文深跡		4.4	内：ナデ 外：ナラ	突帯：V字	1～3mmの大の縦を多く含む。	やや良	内：明黄色 外：明黄色	
302	刻印美文深跡		5.2	内：ナデ 外：ナラ	突帯：半截竹筋	1～3mmの大の縦を多く含む。黒母地。	普通	内：黒褐色 外：暗褐色	
303	刻印美文深跡		4.2	内：ナデ 外：ナラ？	突帯：O字	1～2mmの大の縦を含む。黒母地。	普通	内：墨褐色 外：暗褐色	
304	刻印美文深跡		3.5	内：ナデ 外：ナラ	突帯：小D字	1～2mmの大の縦を多く含む。黒母地。	普通	内：黒褐色 外：明黄色	
305	刻印美文深跡		3.2	内：ナデ 外：ナラ	突帯：小O字	1～2mmの大の縦を含む。	良好	内：黑褐色 外：深墨褐色	
306	刻印美文深跡		4.1	内：ナラナデ (無目り) 外：条模	突帯：D字	1～3mm人の縦を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：深褐色	
307	刻印美文深跡		3.3	内：ナデ 外：ナラ	突帯：D字？V字？	1mmの縦を含む。 並様模。	やや良	内：黒褐色 外：灰褐色	
308	刻印美文深跡		2.6	内：ナデ 外：条模	突帯：D字	1mmの縦をまばらに含む。	良好	内：黒褐色 外：茶褐色	
309	刻印美文深跡		3.6	内：ナラ 外：ナラ	突帯：D字？	1～3mmの大の縦を多く含む。黒母地。	やや良	内：淡褐色 外：淡褐色	内・外面の調整は摩滅のため不明確。
310	刻印美文深跡		3.5	内：ナラ 外：ナラ	突帯：V字？指？	1mmの縦をまばらに含む。	やや良	内：黑色 外：黑色	刻印は2度打ってい る(V字二指?)
311	刻印美文深跡		2.4	内：ナラナデ 外：ナラ	突帯：員級	1mmの縦をまばらに含む。	良好	内：白色 外：白色	
312	刻印美文深跡		6.3	内：条模 外：条模	突帯：D字	1～2mmの大の縦をまばらに含む。	良好	内：白色 外：淡褐色	
313	刻印美文深跡		5.6	内：条模 外：条模	突帯：V字	1～2mmの大の縦を含む。黒母地。	やや良	内：暗褐色 外：暗褐色	外表面付着
314	刻印美文深跡		5.9	内：ナラナデ (無目り) 外：ナラ	突帯：D字	1～2mmの大の縦を含む。	良好	内：黑色 外：灰褐色	
315	刻印美文深跡		6.0	内：条模 外：条模	突帯：D字	1～2mmの大の縦を含む。黒母地。	良好	内：黑色 外：黑色	
316	刻印美文深跡		4.4	内：ナラ 外：条模	突帯：D字	1～2mmの大の縦をまばらに含む。	良好	内：明黄色 外：明黄色	
317	刻印美文深跡		9.2	内：ナラ 外：条模	突帯：V字	1～2mm人の縦を多く含む。黒母地。	普通	内：黒褐色 外：暗褐色	
318	刻印美文深跡		8.3	内：ナラ 外：ナラ	突帯：D字	1mmの大の縦を多く含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
319	刻印美文深跡		6.3	内：ナラナデ 外：条模	突帯：員級	1～2mmの大の縦を含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	
320	刻印美文深跡		10.7	内：ナラナデ (無目り) 外：ナラナデ (無目り)	突帯：D字	1～2mmの大の縦を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	
321	刻印美文深跡		10.0	内：ナラ 外：ナラ	突帯：員級？	1mmの大の縦を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	
322	刻印美文深跡		6.4	内：ナラナデ 外：ナラ	突帯：V字	1～2mmの大の縦をまばらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
323	刻印美文深跡		6.1	内：ナラナデ 外：条模	突帯：小V字	1～2mmの大の縦をまばらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
324	刻印美文深跡		4.9	内：ナラ 外：ナラ	突帯：D字	1～2mmの大の縦を含む。黒母地。	やや粗悪	内：暗褐色 外：黑色	
325	刻印美文深跡		6.3	内：条模 外：条模	突帯：D字	1～2mmの大の縦を含む。黒母地。	良好	内：灰褐色 外：白色	

326	剣日突蒂文渦跡	5.5 内:ナデ 外: 底模 系膜	美帯: 小〇字? 小D 字?	1~3 mmの大の縫を 含む。茎母含む。	やや粗悪	内: 黄白褐色 外: 淡黄褐色
327	剣日突蒂文渦跡	5.6 内:ナデ? 外: 底模?	美帯: 神状	1~3 mmの大の縫を 多く含む。茎母含む。	良好	内: 白褐色 外: 淡黄褐色
328	剣日突蒂文渦跡	5.7 内:ナデ 外:系膜	内面に横に並列する 細縫あり。 美帯: 1字?	1~3 mmの大の縫を 含む。茎母含む。	やや良	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
329	剣日突蒂文渦跡	5.9 内:ナデ 外:系膜	美帯: 1字	1~3 mmの大の縫を 含む。茎母含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
330	剣日突蒂文渦跡	5.9 内:ナデ 外:系膜	美帯: V字	1~3 mmの大の縫を 含む。	良好	内: 白褐色 外: 白褐色
331	剣日突蒂文渦跡	5.9 内: 外:系膜	口輪端部: V字 美帯: D字?	1 mmの大の縫を多 く含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
332	剣日突蒂文渦跡	4.7 内:ナデ 外:ナデ	口輪端部に2条並縫 美帯: 小D字	1~2 mmの大の縫を 多く含む。茎母含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
333	剣日突蒂文渦跡	(38.2) 10.0 内: 外:ナデ	美帯: 小D字	1 mmの大の縫を含 む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
334	剣日突蒂文渦跡	(36.4) 8.1 内: 外:ナラナデ	美帯: 小V半	2~3 mm次の口輪 部はばららに含む。	良好	内: 明褐色 外: 淡黄褐色
335	剣日突蒂文渦跡	(27.5) 15.3 内: 外:ナラナデ?	美帯: 小V字	3~4 mmの大の縫を 多く含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
336	剣日突蒂文渦跡	7.1 内:ナデ 外:系膜?	美帯: D字? V字?	1~2 mmの大の縫を 含む。茎母含む。	やや粗悪	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
337	剣日突蒂文渦跡	5.3 内:ナデ? 外:系膜?	外側にX印?あり。 美帯: D字?	1~3 mm人の縫を 含む。茎母含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
338	剣日突蒂文渦跡	6.5 内:系膜 外:系膜	美帯: 小D字	1~1 mmの大の縫を多 く含む。茎母含む。	やや粗悪	内: 黄褐色 外: 白褐色
339	剣日突蒂文渦跡	5.3 内: 外:ナラナデ	美帯: V字	1 mmの大の縫を含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
340	剣日突蒂文渦跡	5.1 内:ナデ 外:ナデ	美帯: 指?	1~3 mmの大の縫を 含む。茎母含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
341	剣日突蒂文渦跡	3.9 内:ナデ? 外:ナデ?	内:ナラナデ? 外:ナラナデ?	1~3 mmの大の縫を 含む。茎母含む。 美帯: D字?	良好	内: 黄褐色 外: 口輪部 内: 口輪部
342	剣日突蒂文渦跡	4.0 内:ナデ 外:ナデ	内面に2条の縫網あ り。	1~3 mmの大の縫を多 く含む。茎母含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
343	剣日突蒂文渦跡	3.7 内:ナデ 外:ナデ	内:ナラナデ? 外:ナラナデ?	半球竹質	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
344	剣日突蒂文渦跡	4.0 内:ナデ 外:ナデ?	美帯: D字?	1~3 mmの大の縫を 多く含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
345	剣日突蒂文渦跡	2.6 内:ナデ 外:ナデ	美帯: V字	1~3 mmの大の縫を多 く含む。茎母含む。	やや粗悪	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
346	剣日突蒂文渦跡	2.8 内:ナデ 外:ナデ	美帯: 小V字	1~2 mm人の縫を 多く含む。茎母含む。	やや良	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
347	剣日突蒂文渦跡	2.4 内:ナデ 外:ナデ	美帯: 神状	1~3 mmの大の縫を 含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
348	剣日突蒂文渦跡	2.4 内:ナデ?	美帯: 1字	1~3 mmの大の縫を多 く含む。茎母含む。	やや良	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
349	剣日突蒂文渦跡	2.0 内:ナデ	美帯: D字?	1~2 mmの大の縫を 多く含む。	やや良	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
350	剣日突蒂文渦跡	2.0 内:ナデ	美帯: 離葉	1~2 mmの大の縫を 多く含む。	良好	内: 白褐色 外: 淡黄褐色
351	剣日突蒂文渦跡	8.5 内:ナデ	美帯: D字	1~2 mm人の縫を 含む。	やや良	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
352	剣日突蒂文渦跡	7.4 内:ナデ	美帯: V字	0.5 mmの大の縫を多 く含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
353	剣日突蒂文渦跡	7.2 内:ナデ 外:ナラナデ?	内外面に指運圧痕あ り。	1~2 mm人の縫を まばらに含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
354	剣日突蒂文渦跡	7.4 内:ナデ 外:ナラナデ?	美帯: V字	細胞まばらに含む。	良好	内: 明褐色 外: 淡黄褐色
355	剣日突蒂文渦跡	6.0 内:ナデ 外:ナラナデ?	美帯: 小V字	1~5 mmの大の縫を 含む。	やや粗悪	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
356	剣日突蒂文渦跡	5.2 内:ナデ 外:系膜	美帯: 鳞片	茎舟含む。	普通	内: 黑褐色 外: 淡黄褐色
357	剣日突蒂文渦跡	5.8 内:ナラナデ 外:ナラナデ	美帯: 小V字	1~3 mmの大の縫を 含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
358	剣日突蒂文渦跡	5.3 内:ナデ 外:ナラナデ	美帯: 小V字	細胞まばらに含む。	良好	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色
359	剣日突蒂文渦跡	6.3 内:ナデ 外:ナデ	美帯: 小V字	1~3 mmの大の縫を まばらに含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黑褐色
360	剣日突蒂文渦跡	5.4 内:ナデ 外:ナラナデ	美帯: D字	1~3 mmの大の縫を まばらに含む。	良好	内: 黄褐色 外: 黑褐色
361	剣日突蒂文渦跡	5.2 内:ナデ 外:ナデ	美帯: D字	1~3 mmの大の縫を まばらに含む。	良好	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色

362	刻日突毫文深跡		5.0	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：小V字	1~3mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
363	刻日突毫文深跡		4.3	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：D字? O字?	1~3mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
364	刻日突毫文深跡		4.5	内：? 外：?	突唇：D字	1~3mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色 内・外面の調整は厚紙のため不明瞭。
365	刻日突毫文深跡		4.5	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	やや粗悪	内：黒褐色 外：黒褐色
366	刻日突毫文深跡		4.2	内：ヘラナデ 外：ナデ?	突唇：D字	1~2mmの大いの歯をばらに含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
367	刻日突毫文深跡		4.3	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：D字	1~2mmの大いの歯を含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
368	刻日突毫文深跡		4.0	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：D字	1~2mmの大いの歯を含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
369	刻日突毫文深跡		3.4	内：? 外：ナデ?	突唇：D字	1~3mmの大いの歯を多く含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色
370	刻日突毫文深跡		5.4	内：ヘラナデ? 外：ヘラナデ?	突唇：D字?	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色
371	刻日突毫文深跡		4.8	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：I字	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：白褐色 外：白褐色 口錆部一部欠損。
372	刻日突毫文深跡		3.3	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：D字	1~3mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	やや粗悪	内：黒褐色 外：黒褐色
373	刻日突毫文深跡		3.0	内：ナデ? 外：ナデ?	突唇：D字	1~2mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
374	刻日突毫文深跡		2.7	内：? 外：ナデ?	突唇：V字	1mmの大いの歯をばらに含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色 内面の調整は厚紙のため不明瞭。
375	刻日突毫文深跡		2.0	内：ナデ? 外：ナデ?	突唇：D字	1~2mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
376	刻日突毫文深跡 (31.0)		9.9	内：ナデ? 外：ナデ? (無脈あり)	突唇：半截性者?	1mmの大いの歯を多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
377	刻日突毫文深跡		7.8	内：ケズリ 外：ケズリ	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色
378	刻日突毫文深跡		8.2	内：ナデ? 外：ナデ?	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色
379	刻日突毫文深跡		10.1	内：ナデ 外：ヘラナデ	突唇：V字	1mmの大いの歯をや多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 外面黒化する。外画はカクテル気味。
380	刻日突毫文深跡		5.9	内：ナデ 外：ナデ?	口輪部突唇：小V字 腹部突唇：小V字	1mm人の内歯をや多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 次第に輪郭部が濃くなるものと腹部輪郭部が濃くなるものとの2者が並ぶ。
381	刻日突毫文深跡?		5.8	内：? 外：?	突唇：V字 頭部と脚部の境：小V字	粗糞。	やや粗悪	外面黒付する。内面褐色化する。
382	刻日突毫文深跡		5.0	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
383	刻日突毫文深跡		4.2	内：? 外：ナデ	突唇：O字	1~2mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 内面の調整は厚紙のため不明瞭。
384	刻日突毫文深跡		3.8	内：? 外：ナデ	突唇：V字	1~2mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 内面の調整は厚紙のため不明瞭。
385	刻日突毫文深跡		3.8	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 外面の調整は厚紙のため不明瞭。
386	刻日突毫文深跡		2.9	内：ナデ? (無脈あり) 外：ナデ?	突唇：V字	1~2mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
387	刻日突毫文深跡		2.9	内：ナデ? (無脈) 外：ナデ?	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色
388	刻日突毫文深跡		3.3	内：ナデ? 外：ナデ? (無脈後)	突唇：I字	1~3mm人の歯を含む。黒丹含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色
389	刻日突毫文深跡		2.2	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を含む。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 安全のつけ方が奇異的。
390	刻日突毫文深跡		3.2	内：? 外：ナデ	突唇：拂状	1~2mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色 内面の調整は厚紙のため不明瞭。
391	刻日突毫文深跡		2.9	内：? 外：ナデ	突唇：V字?	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色 内面の調整は厚紙のため不明瞭。
392	刻日突毫文深跡		2.5	内：? 外：?	突唇：V字?	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色 内面の調整は厚紙のため不明瞭。
393	刻日突毫文深跡 (21.6)		7.2	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を含む(石突)。	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 波紋口縁。2条足帯深跡。
394	刻日突毫文深跡		10.5	内：ナデ 外：ナデ? (上 手) (下 手)	突唇：小D字	細糞	良好	内：黒褐色 外：黒褐色 2条足帯深跡。
395	刻日突毫文深跡		7.6	内：ナデ? 外：ナデ?	突唇：D字	1mm以下の白糞を多く含む。	良好	内：黑色 外：黑色 2条足帯深跡。
396	刻日突毫文深跡		6.7	内：ヘラナデ 外：ナデ(無 脈)	突唇：竹管?	1~3mmの大いの歯を含む。黒丹含む。	やや粗悪	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色 2条足帯深跡の剥離。
397	刻日突毫文深跡		8.5	内：ナデ 外：ナデ	突唇：V字	1~3mmの大いの歯を多く含む。黒丹含む。	やや粗悪	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色 2条足帯深跡の剥離。

398	刻目美帝文源跡		6.8	内：ナデ 外：ナデ	突唇：D字	1~mmの大の顎を含む。	良好	内：褐色 外：褐色	2 条突唇源跡の調査。
399	刻目美帝文源跡		8.4	内：ナデ 外：ナデ	突唇：小D字?V字?	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	1 条突唇源跡の調査。	
400	刻目美帝文源跡		4.9	内：ナデナダ 外：ナデナダ	突唇：D字	黒毛少量含む。	普通	内：灰褐色 外：灰褐色	2 条突唇源跡の調査。
401	刻目美帝文源跡		5.3	内：ナデ 外：条幅(下 半手)	突唇：小V字	1~2mmの大の顎を多く含む。黒毛含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	2 条突唇源跡の調査。
402	刻目美帝文源跡		4.8	内：ナデ	突唇：V字	1~mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：灰白色 外：灰白色	2 条突唇源跡の調査。
403	刻目美帝文源跡		6.0	内：ナデナダ	突唇：V字			内： 外：	2 条突唇源跡の調査。
404	刻目美帝文源跡		5.1	内：ナデ 外：条幅(下 半手)	突唇：D字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	2 条突唇源跡の調査。
405	刻目美帝文源跡		4.3	内：ナデ?	突唇：D字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	悪態	内：田縞色 外：灰褐色	2 条突唇源跡の調査。
406	刻目美帝文源跡		4.1	内：ナデ	突唇：D字	1~2mmの大の顎を含む。	やや良	内：暗褐色 外：黄(?)色	2 条突唇源跡の調査。
407	刻目美帝文源跡		4.3	内：ナデ 外：条幅(下 半手)?ナデ	突唇：D字	1~2mmの大の顎をばらに含む。	良好	内：白褐色 外：白褐色	2 条突唇源跡の調査。
408	刻目美帝文源跡		2.8	内：ナデ	突唇：半載竹管	1~2mmの大の顎を含む。	良好	内：淡黃褐色 外：淡黃褐色	2 条突唇源跡の調査。
409	刻目美帝文源跡		3.4	内：?	D輪端部：D半 字?	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：灰褐色 外：外面の黒帯は不 明顯。	
410	刻目美帝文源跡		3.2	内：ナデ 外：ナデ	口輪端部：O字	1~2mmの大の顎を含む。	良好	内：淡黃褐色 外：白褐色	
411	刻目美帝文源跡		3.2	内：? 外：条幅	D輪端部：小D字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：黃褐色 外：灰褐色	内・外面の黒帯は不 明顯。
412	刻目美帝文源跡		3.0	内：ナデ 外：ナデ?	D輪端部：小D字	1~2mmの大の顎を含む。	良好	内：田縞色 外：灰褐色	非常に厚手。
413	刻目美帝文源跡		2.5	内：ナデ 外：ナデ?	D輪端部：小V字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	やや良	内：淡褐色 外：白褐色	
414	刻目美帝文源跡		2.8	内：ナデ 外：ナデ?	D輪端部：小O字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：淡黃褐色 外：淡黃褐色	
415	刻目美帝文源跡		1.6	内：?	D輪端部：小V字	1~2mmの大の顎を含む。	良好	内：田縞色 外：灰褐色	少しだけため調整等は 不明瞭。
416	刻目美帝文源跡		2.1	内：条幅 外：?	突唇：小V字	1~2mmの大の顎を多く含む。黒毛含む。	良好	内：黃褐色 外：黃褐色	少しだけため調整等は 不明瞭。
417	刻目美帝文源跡		2.6	内：?	内面に2条の縦割あ る。	1~2mmの大の顎を多く含む。黒毛含む。	良好	内：黃褐色 外：黃褐色	刻目は大きい。小片 のため調整等は不明 瞭。
418	刻目美帝文源跡		2.9	内：条幅 外：ナデ	突唇：D字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	やや良	内：淡褐色 外：淡褐色	
419	刻目美帝文源跡		3.9	内：? 外：条幅	突唇：D字	1mmの大の顎を多く含む。黒毛含む。	やや悪態	内：黃褐色 外：黃褐色	内面の調整は厚誠の ため不明瞭。
420	刻目美帝文源跡		4.1	内：ナデ後?	突唇：D字	1~2mmの大の顎を多く含む。黒毛含む。	やや良	内：黃褐色 外：黃褐色	
421	刻目美帝文源跡		2.5	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：V字	1~2mmの大の顎を多く含む。	良好	内：黃褐色 外：黃褐色	
422	刻目美帝文源跡		3.0	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：小D字	1~2mmの大の顎を含む。	やや良	内：田縞色 外：白褐色	
423	刻目美帝文源跡		2.6	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：小V字	1~2mmの大の顎を含む。	良好	内：田縞色 外：白褐色	
424	刻目美帝文源跡		2.5	内：ナデ	突唇：小V字	1~2mmの大の顎を多く含む。	良好	内：田縞色 外：白褐色	
425	刻目美帝文源跡		2.5	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：D字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：黃褐色 外：黃褐色	
426	刻目美帝文源跡		2.5	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：V字	1~2mmの大の顎を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	
427	刻目美帝文源跡		2.5	内：ナデ 外：ナデ?	突唇：小V字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：白褐色 外：白褐色	
428	刻目美帝文源跡		2.7	内：?	突唇：V字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：黃褐色 外：黃褐色	多少次回頭時の調査? 元細胞等は底面のた め不明瞭。
429	刻目美帝文源跡		2.4	内：?	突唇：V字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：灰褐色 外：暗褐色	内・外面の調整は小 片のため不明瞭。
430	刻目美帝文源跡		2.5	内：? 外：ナデ	突唇：D字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	元細胞等は厚誠の ため不明瞭。
431	刻目美帝文源跡		3.3	内：ナデ 外：ナデ	突唇：V字	1~2mmの大の顎を含む。黒毛含む。	良好	内：淡黃褐色 外：淡黃褐色	
432	刻目美帝文源跡		2.9	内：ナデ 外：条幅	突唇：小V字			内：褐色 外：褐色	
433	刻目美帝文源跡		2.3	内：ナデ 外：ナデ	突唇：V字	1~2mmの大の顎をまばらに含む。黒 毛含む。	良好	内：区間色 外：区間色	
434	刻目美帝文源跡		3.0	内：? 外：ナデ	突唇：D字?V字?	1~2mmの大の顎を多く含む。	良好	内：灰褐色 外：白褐色	内面の調整は厚誠の ため不明瞭。
435	刻目美帝文源跡 (28.8)		10.0	内：ナデ 外：ナデ(筆 致あり)		1~2mmの大の顎をまばらに含む。	良好	内：明褐色 外：黑褐色	外側撥付質。外面に 黒斑あり。
436	刻目美帝文源跡 (22.4)		5.0	内：ナデ 外：ナデ		1~2mmの大の顎を多く含む。	良好	内：黑褐色 外：黑褐色	

437	無刺目突帯文深鉢		6.0	内：ナデ 外：ナデ（複数あり）		1~3mmの繩を多く含む。或結合する。	良好	内：黒褐色 外：黄褐色	
438	無刺目突帯文深鉢		7.1	内：ナデ 外：ナデ（複数あり）		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黄褐色	
439	無刺目突帯文深鉢		3.9	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黄褐色	
440	無刺目突帯文深鉢		4.0	内：ナデ（複数あり） 外：ナデ		1~2mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
441	無刺目突帯文深鉢	(28.0)	5.9	内：ナデ 外：ナデ		1mmの繩を多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黄褐色	
442	無刺目突帯文深鉢	(20.6)	7.0	内：ナデ 外：ナデ		1mmの繩を多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黄褐色	
443	無刺目突帯文深鉢		6.6	内：ナデ？ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：黒褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。腹面不明顯。
444	無刺目突帯文深鉢		4.6	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩をまばらに含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
445	無刺目突帯文深鉢		5.4	内：ナデ 外：ナデ		1~2mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
446	無刺目突帯文深鉢		4.6	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を含む。或結合する。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着？
447	無刺目突帯文深鉢		9.0	内：ナデ 外：ナデ		2mm以上の繩をあげて含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。
448	無刺目突帯文深鉢		8.0	内：ナデ 外：ナデ		2mm以上の繩を多く含む。	普通	内：黒褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。
449	無刺目突帯文深鉢		5.4	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩をまばらに含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
450	無刺目突帯文深鉢		3.7	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩をまばらに含む。或結合する。	良好	内：黒灰褐色 外：黄灰褐色	
451	無刺目突帯文深鉢	(39.0)	19.0	内：ナデ（複数あり） 外：ナデ（複数あり）		1~2mmの繩を含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	内斑蝶は剥落のため不明顯。
452	無刺目突帯文深鉢	(23.2)	4.3	内：ナデ？ 外：ナデ		1~3mmの繩をまばらに含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
453	無刺目突帯文深鉢	(21.6)	4.3	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
454	無刺目突帯文深鉢	(14.8)	4.1	内：ナデ 外：ナデ		1~2mmの繩を多く含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。
455	無刺目突帯文深鉢		8.6	内：全般 外：全般		1~3mmの繩を含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	
456	無刺目突帯文深鉢		5.2	内：全般 外：ナデ		1~2mmの繩を含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
457	無刺目突帯文深鉢		8.4	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩をまばらに含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。
458	無刺目突帯文深鉢		8.2	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
459	無刺目突帯文深鉢		8.3	内：ナデ（複数あり）		1~3mmの繩を多く含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	
460	無刺目突帯文深鉢		7.4	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	
461	無刺目突帯文深鉢		7.1	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	
462	無刺目突帯文深鉢		6.7	内：ナデ 外：ナデ（複数あり）		1~2mmの繩を多く含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	
463	無刺目突帯文深鉢		7.0	内：ナデ？ 外：ナデ？		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	内・外の剥離は摩滅のため不明顯。
464	無刺目突帯文深鉢		6.8	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	
465	無刺目突帯文深鉢		6.0	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
466	無刺目突帯文深鉢		5.4	内：全般？ 外：全般		1~3mmの繩を含む。或結合する。	やや良	内：三種褐色 外：黄褐色	
467	無刺目突帯文深鉢		6.6	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
468	無刺目突帯文深鉢		5.4	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。或結合する。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	
469	無刺目突帯文深鉢		3.6	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。
470	無刺目突帯文深鉢		6.3	内：ナデ 外：ナデ		1~2mmの繩をまばらに含む。或結合する。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。
471	無刺目突帯文深鉢		6.0	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩を多く含む。	普通	内：三種褐色 外：黄褐色	外斑蝶付着。
472	無刺目突帯文深鉢		5.4	内：ナデ（複数あり）		1~3mmの繩を含む。或結合する。	良好	内：黄褐色 外：黄褐色	
473	無刺目突帯文深鉢		3.8	内：ナデ 外：ナデ		1~3mmの繩をまばらに含む。	良好	内：黄褐色 外：黄褐色	
474	無刺目突帯文深鉢	(25.4)	7.5	内：ナデ	口球上瘤に指頭状疣 痕がめぐる。	1~2mmの繩をまばらに含む。或結合する。	良好	内：三種褐色 外：黄褐色	

475	無刻目突帯文深鉢	7.3	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~3mmの大の繩を多く含む。重母音。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色		
476	無刻目突帯文深鉢	9.6	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~3mmの大の繩を多く含む。重母音。	普通	内:黄褐色 外:黄褐色		
477	無刻目突帯文深鉢	5.9	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~3mmの大の繩を多く含む。重母音。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色		
478	無刻目突帯文深鉢	6.9	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~3mmの大の繩を多く含む。重母音。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色		
479	無刻目突帯文深鉢	4.5	内:ナデ 外:ナデ	内縁は無刻文あり、口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~2mmの大の繩を多く含む。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色		
480	無刻目突帯文深鉢	4.1	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色		
481	無刻目突帯文深鉢	8.0	内: ^{ナデ} ^(ナデ) 外: ^{ナデ}	内: ^{ナデ} ^(ナデ) 外: ^{ナデ}	1~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	發見地。2条尖帯深鉢。	
482	無刻目突帯文深鉢	3.8	内:ナデ 外:ナデ	1~3mmの大の繩を含む。重母音。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色	外縁の調査は漸落によって不明瞭。		
483	無刻目突帯文深鉢	3.0	内:ナデ? 外:ナデ?	1~2mmの大の繩を含む。重母音。	やや良	内:黄褐色 外:黄褐色	外縁の調査は小片のため不明瞭。		
484	無刻目突帯文深鉢	2.3	内:? 外:?	1~3mmの大の繩を含む。	良好	内:白褐色 外:白褐色	内・外縁の調査は小片のため不明瞭。		
485	複形土器?	(25.2)	内:ナデ 外:ナデ	突唇:V字	1~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:白褐色 外:白褐色		
486	複形土器?	9.7	内:ナデ? 外:ナデ?	突唇:V字	1~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	外縁付着。調査不明。	
487	複形土器?	8.1	内:ナデ 外:ナデ	突唇:V字	2~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	外縁下半は剥落のため不明瞭。	
488	複形土器?	7.2	内:ナデ 外:ナデ	突唇:V字	1~2mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
489	複形土器?	6.5	内:ナデ 外:ナデ	突唇:1字	1~2mmの大の白繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
490	複形土器?	6.1	内:ナデ 外:ナデ	突唇:V字	1~2mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
491	複形土器?	5.9	内:ナデ 外:ナデ	突唇:1字	1~2mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
492	複形土器?	4.8	内: ^{ナデ} ^{(ナ} ^{デ)} 外:ナデ	突唇:V字	1~2mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
493	複形土器?	3.3	内: ^{ナギ?} 外: ^{ナギ?}	外縁に比較状の凹みあり。突唇:V字	1~2mmの大の繩を多く含む。重母音。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色		
494	複形土器?	4.2	内:ナデ 外:ナデ	外縁に半圓竹管工具による指墻状紋、口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
495	複形土器?	3.6	内:ナデ 外:ナデ	外縁外縁に半圓竹管工具による指墻状紋、口縁上部に指墻状紋、底文がぐぐる。	1~3mmの大の繩を多く含む。重母音。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
496	複形土器?	3.4	内:ナデ? 外:ナデ?	突唇:小V字	1~3mmの大の繩を含む。	良好	内:黄褐色 外:黄褐色	前日は非常に細く浅い。	
497	複形土器?	8.8	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部に4条1單位の底文があり。口縁上部:斜削	1~3mmの大の繩を含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
498	複形土器?	2.7	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部に2条1單位の底文があり。口縁上部:鋸削	1~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色		
499	複形土器?	5.5	内:ナデ 外:ナデ	口縁上部:斜削	1~3mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	口縁上部に2条1單位の底文があり。口縁上部:鋸削	
500	底部	1.1	内: ^{ナラナ} 外: ^{ナラナ}	白繩を多く含む。	普通	内:灰褐色 外:灰褐色	外縁の調査は悪化のため不明瞭。		
501	底部	1.9	内:ナデ 外:ナデ	1~3mmの大の繩を含む。重母音。	やや粗面	内:灰褐色 外:灰褐色			
502	底部	7.7	内:ナデ 外:ナデ	0.5~1mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	内面に炭化物付着。		
503	底部	10.6	内:ナデ 外:ナデ	1mmの大の繩をやや多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色			
504	底部	2.3	内:? 外:?	1~2mmの大の繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	内・外縁の調査は悪化のため不明瞭。		
505	底部	3.0	内:ナデ? 外:ナデ?	白繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色			
506	底部	1.8	内:ナデ 外:ナデ	白繩を含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色			
507	底部	2.6	内:ナデ 外:ナデ	0.5~1mmの大の繩をまばらに含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色			
508	底部	2.0	内:ナデ 外:ナデ					判斷あり。	
509	底部	3.2	内:ナデ 外:ナデ	細繩を多く含む。	良好	内:灰褐色 外:灰褐色			
510	底部	3.6							

511	底部	底面径 (6.0)	4.3	内：ヘタナデ 外：ケツナデ	0.5~1 mmの繩をやや多く含む。	やや良	内：灰褐色 外：灰褐色	
512	底部	底面径 (5.4)	2.1	内：ナデ 外：ナデ	0.5 mm以下の繩を多く含む。	良好	内：黑色 外：灰色	
513	底部	底面径 (5.0)	1.3	内：ナデ 外：ナデ	1 mm以上の繩をまばらに含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
514	底部	底面径 (7.0)	1.7	内：ナデ 外：ナデ	1 mm以上の繩を多く含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
515	底部	底面径 (8.4)	1.8	内：ヘタナデ 外：ラナデ	細粒をまばらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
516	底部	底面径 (7.0)	3.3	内：ナデ 外：ナデ	細粒をまばらに含む。	普通	内：灰白色 外：灰白色	
517	底部	底面径 (5.4)	4.8	内：？ 外：？	微小な白繩を多く含む。	普通	内：灰白色 外：灰白色	
518	底部	底面径 (7.4)	1.8	内：ナデ 外：ナデ	1~2 mmの大繩を多く含む。	良好	内：明灰褐色 外：明灰褐色	
519	底部	底面径 (10.8)	0.5	内：ナデ 外：ヘタナデ	1~2 mmの大繩をやや多く含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
520	底部	底面径 (9.8)	1.1	内：ナデ 外：ナデ	1 mmの大繩を含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
521	底部	底面径 (6.8)	1.8	内：ナデ 外：ナデ	1~3 mmの大繩を多く含む。茎母合む。	やや粗悪	内：灰褐色 外：灰白色	
522	底部	底面径 (7.4)	1.1	内：ナデ 外：ナデ	1~4 mmの大繩を含む。茎母合む。	良好	内：淡灰褐色 外：赤褐色	
523	底部	底面径 (5.2)	1.6	内：ヘタナデ 外：ナデ	1~3 mmの大繩を多く含む。茎母合む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
524	底部	底面径 (6.2)	2.3	内：ナデ 外：ナデ	3~7 mmの大繩をまばらに含む。	良好	内：基褐色 外：基褐色	
525	底部	底面径 (7.0)	2.0	内：ナデ 外：ナデ（ケ ズリ後）	細粒をやや多く含む。茎母合む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
526	底部	底面径 (9.6)	2.3	内：ナデ 外：？	1~3 mmの大繩を多く含む。茎母合む。	やや粗悪	内：黑褐色 外：灰褐色	
527	底部	底面径 (4.4)	2.0	内：？ 外：？	1~3 mmの大繩を多く含む。	やや粗悪	内：灰褐色 外：灰褐色	
528	底部	底面径 (5.4)	3.0	内：ナデ 外：ナデ	0.5~1 mmの大繩をまばらに含む。	良好	内：白灰褐色 外：白灰褐色	
529	底部	底面径 (7.2)	2.2	内：ナデ 外：ナデ	微小な白繩をまばらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
530	底部	底面径 (9.6)	1.5	内：？ 外：？	1~1 mmの大繩を多く含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
531	底部	底面径 (6.0)	4.5	内：ナデ 外：ヘタナデ	1~2 mmの大繩を多く含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
532	底部	底面径 (9.2)	1.8	内：ミガキ 外：ナデ	1~3 mmの大繩を含む。茎母合む。	良好	内：淡黑褐色 外：深褐色	
533	底部	底面径 (10.0)	2.9	内：？ 外：？	細粒を多く含む。	やや粗悪	内：灰白色 外：灰白色	
534	底部	底面径 (7.2)	1.3	内：？ 外：？	1 mmの大繩を多く含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
535	底部	底面径 (11.2)	2.5	内：ナデ 外：ナデ	比較？らしき縦割りあり。	1~3 mmの大繩を多く含む。	良好	内：白褐色 外：白褐色
536	底部	底面径 (5.4)	4.2	内：ナデ 外：ヘタナデ	細粒を多く含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
537	底部	底面径 (8.0)	3.3	内：ナデ 外：ヘタナデ	1 mmの大繩を多く含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
538	底部	底面径 (8.8)	1.3	内：ナデ 外：ナデ	1 mmの大繩を含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
539	底部	底面径 (10.4)	2.6	内：ミガキ 外：ナデ	1~2 mmの大繩を含む。茎母合む。	やや粗悪	内：黑褐色 外：暗褐色	
540	底部	底面径 (7.4)	4.9	内：ナデ 外：ナデ	細粒をやや多く含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
541	底部	底面径 (7.6)	2.2	内：ヘタナデ 外：ヘタナデ	0.5 mmの大繩をまばらに含む。	良好	内：暗灰褐色 外：暗灰褐色	
542	底部	底面径 (9.0)	3.9	内：ヘタナデ 外：ヘタナデ	2 mmの大繩をまばらに含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
543	底部	底面径 (4.2)	2.4	内：？ 外：？	細粒をやや多く含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
544	底部	底面径 (9.6)	4.5	内：ナデ 外：ミガキ	内側に1集成線？あり。	やや良	内：灰褐色 外：灰褐色	
545	底部	底面径 (3.8)	5.0	内：？ 外：？	底部外側を2条沈黙通る。	1~3 mmの大繩を多く含む。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色
546	底部	底面径 (6.0)	12.0	内：ナデ 外：ミガキ	1~3 mmの大繩をまばらに含む。茎母合む。	やや粗悪	内：暗褐色 外：暗褐色	
547	森林形土壌？（樹 脂）	底面径 (10.6)	6.3	内：ナデ 外：ミガキ	樹形と地に2条沈黙。	良好	内：暗褐色 外：暗褐色	
548	森林形土壌	（13.4）	8.9	内：カクテー 外：ナデ	樹形？	1~3 mmの大繩を多く含む。茎母合む。	良好	内：灰褐色 外：白褐色
549	森林形土壌		4.0	内：？ 外：？	瓶瓶設あり。	1~3 mmの大繩を多く含む。茎母合む。	良好	内：暗褐色 外：淡褐色
550	森林形土壌		4.5	内：ナデ 外：ナデ	1~3 mmの大繩を含む。茎母合む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
551	森林形土壌？		3.9	内：ミガキ 外：ミガキ	瓶瓶設あり。	1~3 mmの大繩を含む。茎母合む。	良好	内：暗褐色 外：淡褐色

552	彫形土器		2.6	内：ミガキ 外：ナメ	頭部設あり。	1~2 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	
553	彫形土器		4.2	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部設あり。	1~2 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：青褐色 外：青褐色	
554	彫形土器		4.9	内：ナメ 外：ミガキ (下部)	頭部設あり。	1~2 mm大きさの穂を多く含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	内部の調査は誠実のため不明。
555	彫形土器		4.2	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部設あり。	1~2 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	内部調査。
556	彫形土器		4.0	内：ミ 外：ナメ	頭部設あり。	1~2 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	554と同一個体の可能性あり。内部の調査はため不明。
557	彫形土器		4.0	内：ミ 外：ナメ	頭部設あり。	1~2 mm大きさの穂を多く含む。茎も含む。	やや粗悪	内：淡褐色 外：淡褐色	口端部破損。575と同一個体。
558-1	彫形土器	(21.5)	6.0	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部設あり。	0.5mm大きさの砂粒を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	内部に赤彩を施す。①~③は同一軸。
558-2	彫形土器		9.1	内：ナメ 外：ミガキ ミガキ 外：ミ		0.5mm大きさの砂粒を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	外部に赤彩を施す。外面部は擦痕のため表面不明瞭。内部一部にハケ。
559-1	彫形土器		7.0	内：ナメ 外：ミガキ ミガキ 外：ナメ (下部)	頭部の邊に段があり。	0.5mm大きさの砂粒を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	外面に赤彩を施す。
559-4	彫形土器		6.9	内：ナメ 外：ミガキ (ハマ後)		0.5mm大きさの砂粒を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	穿孔(鉛抜孔)あり。内部に赤彩を施す。
559-5	彫形土器		7.3	内：ナメ 外：ミガキ	頭部の邊に段があり。	1~3 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	やや良	内：淡褐色 外：淡褐色	
560-1	彫形土器		5.4	内：ナメ 外：ミガキ (上部) 外：ナメ (下部)	頭部設あり。口端部に1本毫毛がある。	1~3 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：灰褐色	口端部下端凸状態。560-2と同一個体。
560-2	彫形土器		4.8	内：ナメ 外：ミ	頭部設あり。口端部に1本毫毛がある。	1~3 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	口端部下端凸状態。
560-3	彫形土器		5.9	内：ミ 外：ミ	頭部設あり。口端部に1本毫毛がある。	1~3 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	口端部下端凸状態。
561	彫形土器		3.9	内：ナメ 外：ナメ	頭部と肩部の邊に、嵌合工具突起・板状工具	1cm以上の幅を多く含む。	やや良	内：淡褐色 外：淡褐色	外縫合が認められる。1番下端凸状態。
562	彫形土器		4.5	内：ナメ 外：ナメケ	突起：貝殻	1cm以上の幅を多く含む。茎も含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	口端部下端凸状態。
563	彫形土器		4.4	内：ナメ 外：ミ	口端部突起：板状工具	1~3 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：灰褐色	1本毫毛あり。1番下端凸状態。
564	彫形土器		2.1	内：ナメ 外：ナメ	口端部突起：板状工具	1~2 cmの幅を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：暗褐色	外面のナメ調査はハゲの後。1番下端凸状態。
565	彫形土器		3.7	内：ナメ 外：ナメケ	口端部突起：D字	1~2 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：明るい褐色	口端部下端凸状態。
566	彫形土器		7.1	内：ナメ 外：ナメ	口端部突起：板状工具	1~3 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	やや良	内：灰褐色 外：灰褐色	口端部下端凸状態。
567	彫形土器		8.5	内：ナメ 外：ミガキ	頭部部の一部を削除。先端：二字	1~3 mm大きさの穂を多く含む。茎も含む。	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	外縫合付近。外縫合。
568	彫形土器		4.1	内：ナメ 外：ナメ	突起：V字	1~3 mm大きさの穂を含む。	良好	内：白褐色 外：白褐色	口端部の形態は加熱状況に近い。
569	彫形土器		2.7	内：ナメ 外：ナメ	突起：小V字	1~3 mm大きさの穂を含む。茎も含む。	良好	内：墨褐色 外：灰褐色	
570	彫形土器		7.2	内：ナメ 外：ナメ	突起：二字	1~3 mmの穂を多く含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：灰褐色	内部の調査は一部不明瞭。則に浅く削る。
571	無制目実物文跡跡		6.1	内：ナメ (押出あり) (押出なし)	口部部無文の加熱状態	1~3 mm大きさの穂を多く含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	
572	彫形土器		3.9	内：ミガキ 外：ミガキ	3条1單位の平行弦状と5單位：a=1单位の無文文。	1~3 mmの幅を多く含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	頭部破損。
573	彫形土器?				木炭文	1~3 mmの穂を多く含む。茎も含む。	やや良	内：淡褐色 外：淡褐色	接合面剥離あり。
574	彫形土器	頭部最大径 (26.0)	13.0	内：ナメ 外：ナメ	頭部部の邊に段があり。段と3本平行弦状と5本平行弦状。	1~3 mmの幅を多く含む。茎も含む。	良好	内：白褐色 外：白褐色	
575	彫形土器		0.7	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部設あり。頭部部の邊に段があり。段と3本平行弦状。	1~3 mm大きさの穂を多く含む。茎も含む。	やや粗悪	内：淡褐色 外：淡褐色	
576	彫形土器	頭部最大径 (24.5)	13.5	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部設あり。頭部部の邊に段があり。段と3本平行弦状。	1~3 mm大きさの穂を多く含む。茎も含む。	良好	内：白褐色 外：白褐色	
577	彫形土器	頭部最大径 (23.3)	6.6	内：ミガキ 外：ミガキ	頭部設あり。頭部部の邊に段があり。段と3本平行弦状。	1~3 mm大きさの穂を多く含む。茎も含む。	良好	内：墨褐色 外：墨褐色	
578	大型彫形土器	1径 (13.8) 2径 (63.0)	42.0	内：ナメ 外：ミガキ	口端部、「」の字の頭部と肩部の邊に段がある。	1~3 mmの穂を多く含む。茎も含む。	良好	内：淡褐色 外：淡褐色	口端部に修復孔あり。外側に赤彩を施す。

4. 弥生土器

弥生土器は谷部を中心にして出土している。時期的には前期・中期・後期を通してみられるが、出雲（松本）編年II様式の資料を欠いている。出土量では、前期が多く、中期・後期は少ない。既述のように、前期は前葉のものからあり、かつ、当地方で最も古い段階の資料で、北九州からの搬入品の可能性がある丹塗りの壺が含まれている点で注目される。器種は、壺、壺、広口壺、短頸壺がほとんどで、無頸壺、高坏は稀である。

弥生前期土器（第31～37・40図、図版23～28のうち）

第31図558は丹塗りの壺である。板付I式の新段階ないしは板付II式の古い段階のものと推定される。搬入品である可能性が高い。

第32図549～555・557～560の壺は、I-1様式に相当すると考えられるが、口縁部がやや丸くなるものは少し後出し、I-2様式に下る可能性のあるものもある。

第33図568は、大形の壺である。頸部が直線的おり胴部との境にかすかにアクセントがつく。口縁部は直線的で「く」の字に屈折し、頸部との境が明瞭である。補修孔かとみられる穿孔が認められる。口唇部は平坦に仕上げる。壺脂の可能性も考えられる。板付IIの段階のものと推定される。同図562は木の葉文を有する土器であるが、器種は不明である。なお、第35図1の口縁部を「く」の字状に短く屈曲させ、頸部が垂下気味になる広口壺もI-1・2様式であろう。同図561・563～566の壺は、I-2様式に相当するものと考えられる。同図567は口縁部が屈曲するタイプの壺であるが、これもI様式のうちのものとしてよからう。

第34図1～10・12～18の壺破片および11の舟形土器片は、I-2様式から3様式に相当するものである。直線文、重弧文、羽状文、木葉文などがみられる。2・5の破片は外面に赤く彩色されている。同図19・20は小形の壺で、I-4様式に相当する。

第35図3～5および第38図23の壺は、I-4様式と考えられる。3は胴部上半に3条の貼付突帯を、広口壺4は頸部に断面三角形の4条の貼付突帯をめぐらし、さらに口縁部内面には注ぎ口状に開口する1条の突帯を貼り付けている。5は胴部の上半に10条の平行ヘラ描き曲線を2段に巡らしている。23は胴部ほぼ中央に刻目を有する2条の貼付突帯を巡らし、さらにその上部が貝殻腹線により施文されている。

第36図は壺であり、口縁部が「く」の字状に屈曲するものとゆるく外反するものがある。頸部の段の表現が、1・2はあいまいであり、3・4は調整をかえて段をつける。5・6はヘラ描きの一束直線文を施し、9は2条、10は4条を施す。11～14のように界線がなく、無文のものもある。これらはI-2から3様式のものと考えられる。

第37図も壺で、1～7・15～18は口縁端部に刻みを有し、頸部にはヘラ描きによる一条から数条の直線文を巡らすものや、列点文が施されている。口縁部は「く」の字状に屈曲するか、ゆるく外反するかであるが、4・5は逆L字形口縁を有している。9～13は口縁端部に刻みを有しない壺で、列点文のみのものと、列点文と直線文とを組み合わせて施文するものがある。時期は、8がI-2～3様式にかけて、6・7・19がI-3様式、9～13がI-3～4様式、4・5・14～18がI-4様式に相当するものと考えられる。

弥生中期土器（第35・38～40図、図版26・28のうち）

器種としては壺がほとんどであり、出土量も比較的少ない。第35図2は、Ⅲ-1様式かとみられ、頸部は短く外反し、口頸部から胴部の上半分にかけて縦横に櫛描直線文を組み合わせ、さらに波状文や列点文を施している。

第38図1～7・16～20は、口縁部が「く」の字状に屈曲ないしは屈折する壺である。1～4は口縁端部をわずかに内側につまみだし、19・20は口唇部をわずかに窪ませる。文様は皆無か、ヘラ状工具または櫛状工具による列点文を簡素に巡らす程度である。12・21・22は壺である。11は複合化した口縁部を有する小形短頸壺である。12は口縁端部に斜格子状の刻みと内側に波状文を描く。21は口縁部に円形浮文を置き、頸部に刺突文を伴う貼付突帯を巡らす。22は口縁端部に斜格子文に円形浮文を施し、頸部に指頭圧痕文帯を巡らしている。13は無頸壺で、口縁部に凹線文を施している。15は高坏の坏部で、口縁部が屈折して直立気味に立ち上がり、凹線文を伴っている。1～4・7・16～18がⅢ-1様式、5・6・12・14・19・20がⅢ-2様式、11・13・22がIV-1様式、15・21がIV-2様式に相当するものと考えられる。第39図1も中期のものであり、同図2・3の口縁部に凹線文を施した壺は、IV-2様式と考えられる。

弥生後期土器（第39・41図、図版27・29のうち）

器種は壺または壺であり、出土量もさほど多くはない。口縁が複合口縁化し、外面には擬凹線文、直線文が施され、そして無文化したものがある。内面頸部以下はヘラケズリが施されている。第39図の4～10・16～17の壺および18の壺は、V-1様式、草田1期に相当するとと思われ、後期前葉のものと考えられる。このうち4はそのなかでもやや古い時期の段階、後期初頭ごろではないかと考えられる。18の壺はやや長い筒状の頸部を有している。第39図11～15・19の壺は、V-2～3様式、草田2～3期に相当するものと考えられる。

第41図9・10・12・13の壺は、V-4様式、草田5期に相当するものと考えられる。第41図2～5はV-4様式、草田6期に相当するものと考えられ、そのなかでも5は新しい段階のものではなかろうかとみられる。なお、草田1期および2期がおおむね後期前半、草田3期および4期が後期後半、草田5期および6期が後期終末と考えられている。

5. 土 師 器

土師器は、古墳時代前期・中期・後期、奈良・平安時代のものが出土している。量的には古墳時代では、中期ごろのものが最も多く、前期のものが少い。土師器は時期を特定しがたいものが多いが、後期のものも少なくないと思われる。器種の点では、前期は壺・壺類であるが、中期は壺・壺・壺・高坏・手捏土器などがあり、壺を含め、暗文入りや赤色塗彩された壺・高坏が多くある。出土地点は谷部が中心であり、完形品ないしはそれに近い状態で出土したものが少なくない。

奈良・平安時代では、壺が中心であり、これに煮炊具などが加わるものとみられる。奈良時代の壺には淡く赤色塗彩されたものが多く、螺旋状・放射状暗文入りの土器も存在する。製塙土器もこの時期のものが多いと思われる。（第41～58図、図版29～37）

古墳時代前期では、第41図14の肩部に沈線の入った壺は、草田6期でも新しい段階ないしは7期

に相当し、古墳時代前期初頭のころのものと考えられる。第41図1は前期末から中期初頭、5世紀前半のものと考えられる。第41図15・16の壺形土器は前期末から中期前半のものではなかろうかと考えられ、同図17はこれらよりやや古く4世紀後半ごろのものではなかろうかと考えられる。第43図11や第48図14は、4世紀後半から末のものと考えられる。

古墳時代中期であるが、第42～45図は5・6世紀代の土師器壺が中心に載る。このなかでも第42図の1・2・5・8、第43図の4・10・13、第44図の3・4・7、第45図の3・4などが5世紀代でも前半を中心とした時期のものと思われる。第48図の2もこの時期のものであろう。また、第43図の3・7などが5世紀代も後半のころのものと考えられる。

中期においては、赤色塗彩された土師器も多い。第50～53図は、一部無彩色のものを含むが、5・6世紀代の赤色塗彩された壺・高壺・壺を掲載した。

壺は、体部が外側に開くものと、内湾するものに大きく分かれる。後者のものには、口縁端部が丸くおさまるもの、シャープに方形に仕上げるもの、少し折り返すものなどがある。暗文のあるものは、後者は内面のみに施されているが、前者には内面のみのものと内外両面に施されたものがある。暗文は、基本的に放射状といえるが、丁寧に施されたものとそうでないものがあり、中には加えて体部中ほどに横方向に巡らしたものもある。

高壺は壺部の体部と底部との境が段をなして区分されるものと、そうでないものに大きく分かれると、前者はさらに体部が直線的に外傾するものと、丸みを帯びて内湾するものとがあり、後者もさらに口縁部が外反気味のものと深く内湾するものとがあり、また、なかには須恵器有蓋高壺の器形を明らかに真似たものもみられる。暗文は、放射状のものと、斜格子状のものとがあり、壺部の内面のみのものと、内外両面に施されたものとがある。

壺類はいずれも丸底で、口縁部は複合口縁のものは少なく、大半ほど直線的に外傾する単純口縁のものである。暗文は、口縁部の内外面や胴部の肩に斜格子状、放射状に施されており、なかには縱方向のみのものもある。赤色塗彩の土器には、このほか短頸壺や無頸の小壺のものもある。

6. 手捏ね土器・製塙土器・土製支脚・土馬・埴輪・土鍤

手捏ね土器（第49図、図版34）

おおよそ口径2～8cm大、器高2～7cm大のものである。古墳時代から奈良時代にかけてのものとみられる。

製塙土器（第61図）

出土量は、細片が多いが、コンテナ約一箱分出土している。その出土分布は、第34図の④に示すように、調査区の広範囲に出土するものの、A区とF区の上流左岸側と、D区の左岸側の二つの地点に特に集中する傾向が認められた。

色調はおおむね淡赤褐色、淡赤紫色、淡黄褐色を呈している。胎土は緻密であるが、なかに1mm大の赤褐色土の粒子を含んでいるのが特徴である。調整は内面がヨコナデ、外面は二次焼成を受けて器表面が荒れている。器形は、口縁部から体部が直線的に垂下するか、丸みを帯びて次第にすぼまるものである。口縁部は、尖り気味のものや、丸くおわるもの、平坦面を有するものなどがある。残りのよいもので、口縁部から平均5cmほどが残存するが、底部の形態は不明である。法量的には、

推定復元した場合、口径が7cmほどから11cmほどであり、平均すると9cmほどになる。

時期は、おおむね奈良時代から平安時代を中心とするものではないかと推定される。

土 製 支 脚 (第59・60図、図版47)

出土した土製支脚は、大きく分けると、頂部の二叉の後方に、もうひとつ突起を付けるものと、そうでないものがある。また、体部のなかほどに丸い穿孔のあるものと、そうでないといった違いがある。穿孔は、貫通するものと、途中でとどまるものがある。

時期は、6世紀末あたりをはじまりとしながらも、おおむね7世紀代のものと推定される。そのなかでも、穿孔があつて後方に突起のないものが古い時期のものと思われる。

土 馬 (第49図35・36)

土馬は2点出土している。35は偏平な頭部の破片である。両耳、両鼻孔、口元、継髪を表現する。目は片方が確認できる。4.7cm×4.6cm大で、最大厚は1.8cmである。36は、四足の痕跡と欠けた頭部、尾部から、土馬の可能性の高い遺物である。現存長10.0cm、最大高4.2cm、胴部最大幅4.0cmである。時期は不明であるが、35は偏平な点から、奈良時代の可能性が考えられる。

埴 輪 (第62図4)

円筒埴輪の破片が1点出土しており、タガの確認できる小片である。古墳時代後期のものと思われる。

土 錘 (第63図)

完形のものでおおよそ長さ4~6cm、径1.5~2.0cm、重さ8~13gのものが多い。

7. 須 恵 器

須恵器は、5世紀代から10世紀代のものまである。器種は豊富で壺、皿、高壺、甕、甕類、壺類、瓶類、鉢類などがあり、出土量も多い。なかでも7~8世紀代を中心にした壺類が多く、高壺も目立つ。大半谷部から出土しているが、ローリングを受けるなどして器表面が風化したものはあまり認められず、打ち欠いたとみられるものが少くない。

畫壺・壺・皿類 (第64~76図、図版38~41)

第64図は、壺身で蓋を受ける壺蓋である。おおむね天井部と口縁部との境が認められ、天井部外面はほとんど回転ヘラ削りが確認できる。5世紀後半から6世紀代。第65図も壺蓋であるが、天井部と体部との境がなくなり、全体が丸みを帯びている。外面の調整は、ヘラ切りのちナデを加えるか、ヘラ切りのままである。7世紀前半代。第66図は頂部におもに宝珠状のつまみの付く壺蓋である。1~13は内面に身を受けるためのかえりがつくタイプ、14~30はかえりではなく端部を折り返したタイプのものである。7世紀後半~8世紀代。第67図は頂部に輪状のつまみの付く壺蓋である。1~17は内面に身を受けるためのかえりがつくタイプ、18~33はかえりではなく端部を折り返したタイプのものである。21は転用鏡の可能性がある。7世紀後半~8世紀代。

第68図と第69図1～29は、环蓋を伴い、立ち上がりがつく环身である。このうち第68図1～16は底部外面にヘラケズリ調整を施す。5世紀後半～6世紀代。第68図17～第69図29はヘラ切りののちナデか、ヘラ切りのままである。7世紀前半代。第69図30～33はかえりの付く环蓋を伴う环身である。7世紀前半代。第70図は高台付の环で、体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がるタイプのものである。底部には直立気味か、ハの字状に聞く高台がつく。底部外面の調整が、1～12はヘラ切りによるもの、13～24は回転糸切り痕を残すもの、25～36は静止糸切り痕跡を残すものである。7世紀後半～8世紀前半代。第71～73図は、蓋を伴わないで体部が曲線的に立ち上がるるものや、内湾させるもの、あるいは口縁部がつまみ出すタイプのものである。底部はいずれも回転糸切りないしは静止糸切りの痕跡を残す。おおむね8世紀代。第74図は高台付の环で、体部が直線的に外傾するタイプのものである。器高の高めのものと低めのもの、体部の外傾の度合いの強いものとそうでないもの、高台の位置が体部近くのものとそうでないものなどの違いがある。8世紀～10世紀初頭ごろ。第75図は、無高台の皿である。底部がヘラ切りのものと、回転糸切痕のものとがある。12の底部外面には墨書が認められる（第101図9と同一）。8世紀代～10世紀初頭ごろ。第76図は、高台付の皿である。高台が短く直立もしくは内傾ぎみに貼り付けられている。5以外はすべて底部がヘラ切りである。8世紀～9世紀代。

高 壱（第77～83図、図版42・43）

第77～81図は、高环である。高环は环類と並んで出土量が多い。高环は、大半环部の破片、または脚部の破片として検出し、小片として確認したものがかなりある。故意に壊された可能性があるものが少くない。高环には、有蓋高环と無蓋高环がある。明らかに有蓋高环といえるものはごく僅かである。無蓋高环のうち量的に多いのは、环部の見込みが浅く、立ち上がりが直線的に外に聞くか、または丸みの少ないものである。脚部の透かしのあるものとないものがある。第81図の21・22は脚が筒状に高くなるタイプで环部も盤状になるものである。6世紀代から8世紀代のものである。

趣（第82・83図、図版43）

第82・83図は、趣であり、30個体分ほどが出土している。完形品に近い状態のものや、胴部の残りのよいものがある。大形のものや、胴部がソロバン玉状になるもの、底部に糸切り痕を有するものの、高台を伴うものなど、大小・新旧のものが認められる。胴部の一部や円孔部分を剥落したものがある。5世紀後半から8世紀代のものである。

甕・壺類（第84～88図、図版46）

第84・85図は、大形甕類である。第86図は、1～10が子持壺の体部と小壺の破片である。17～25の甕類破片は、胴部内面に放射状タタキ目を残すものである。第87図は、口縁部の短い中形の甕類である。第88図は、中形の甕類である。

瓶・壺・鉢類（第89～100図、図版44～47）

第89～91図は、横瓶である。第92図の1～9は、胴部に丸みのある長頸壺である。10～12は、胴部が丸みをもつか、やや肩のある平瓶である。第93図の1～14は、胴部が丸みをもつかやや肩のあ

る短頸壺である。15は縦長の長頸瓶であり、16は頸部に波状文と丸い浮文のある壺である。第94図の1～4は壺類である。5・8は平瓶の口縁部から胴部肩にかけての破片であり、6・7は平瓶の把手部の破片である。9・10は提瓶である。第95図は、台付の長頸壺である。胴部の肩を明瞭に設けるものと丸みをつけるものがある。第96図は台付の壺類、およびその底部と考えられるものである。1は胴部の肩の張る広口壺、3是有蓋短頸壺である。第97・98図は台付の壺類と考えられるものである。98-5は短頸壺である。第99図の1～6は台の付かない平底の壺類である。7～9は鉄鉢形土器であり、10・11は鉢である。第100図は、壺類の口縁部や胴部、および瓶類の頸部の破片である。17・18・24のように頸部や胴部に突帯を巡らすものもある。

8. 陶磁器

古代から中世にかけた陶磁器（第102図、図版48）は、国産のものには綠釉陶器（1～3）、常滑（36～44）、古瀬戸（18・19）、備前（45～50）があり、輸入陶磁器には中国製白磁（6～17・20・34）、青磁（25～32）、黒釉（55）、褐釉（21・22）、朝鮮李朝のもの等がある。

1～3は、綠釉陶器の碗皿類の破片である。1はやや上げ底気味の円盤状削り出し高台のものである。火を受けてか、銀化している。2は台高の低い有段輪の貼り付け高台のものであり、内面には円形に小溝が巡る。3は口端部の小片で、外反せるものである。1は9世紀代（前半か）、2は10世紀後半代のものと考えられる。

18・19は古瀬戸の卸皿のように破片である。両者は同一個体の可能性が高い。口縁端部は中央にややくぼみのある平坦面を設け、方形に仕上げる。底部は外面には糸切り痕跡をとどめ、底部内面から体部下半にかけては縦横の筋が入る。時期は、古瀬戸前期様式の後半、IV期に相当し、13世紀後葉あたりではないかと思われる。このほか古瀬戸には同時期の瓶類の頸部を思わせる破片がある。

36～44は常滑系窯の裏破片である。36～39は口縁部の破片であるが、端部の上端と下端に違いが認められる。36は上端が平坦で下端がわずかに垂下し、37は上端は欠失し不明であるが下端は36よりも垂下する。37・39は上端がまるくすぼまり、下端はほとんど垂下しない。42～44は体部の破片で押印文が認められる。40は首部から胴部にかけての破片とみられ、線刻が認められる。これららの常滑系の破片の時期は、口縁部の特徴からすると、常滑窯5型式から6型式にかけてのものとみられ、12世紀末から13世紀代と考えられる。

45・46は古備前の壺の口縁部の破片である。両者は同一個体の可能性が高い。色調は須恵器と変わりなく灰色を呈している。ややにぶくはあるが、口端部が丸く折り曲げられて玉縁状に作られている（備前焼第Ⅲ期に相当し、鎌倉時代後半期）。13～14世紀代。47～50は備前焼の摺鉢の破片である。47～49は口縁部、50は底部のものである破片である。口縁は47・48が外側に内反り気味の平坦面がつくられ、49は外側にやや丸みがつく。47・48・50ともに7本単位の筋が刻まれている。これらの摺鉢片は15世紀末（16世紀）とみられる。

輸入陶磁関係では、4・5は白磁碗の底部である。ともに12世紀前半のものと考えられる。

6～10は白磁碗の口縁部の破片で、口縁端部は玉縁につくられる。いずれも12世紀代のものと考えられる。11は白磁皿である。12は白磁皿である。13・14は白磁碗の底部破片である。15～17は白磁碗である。15は内面に、外面に、13世紀代と考えられる。16は内面に雷文が描かれている。13世紀代と考えられる。17は内面に雷文が認められる。13世紀代と考えられる。

20は白磁四耳壺の肩部の破片で、耳の下に2条の沈線が巡る。21は褐釉系四耳壺の胸部破片、22は同四耳壺の底部破片である。23は薄手づくりの壺で、胸部下半から底部にかけた破片である。24は無文の碗の口縁部破片である。口縁端部は玉縁状に丸くおさめる。15世紀代と考えられる。

25は鍋蓮弁の青磁碗である。13世紀後半から14世紀代と考えられる。26・27は鍋蓮弁の青磁碗である。ともに13世紀後半から14世紀代と考えられる。28は鍋のない蓮弁を表した青磁碗である。29はかなり形骸化した蓮弁を表した青磁碗である。28・29は15世紀代のものと考えられる。

30は青磁碗の口縁破片で、口縁端部で短く外に屈曲する。15世紀後半と考えられる。31は青磁碗の底部で見込みにパターン化した蓮弁模様を線刻する。15世紀後半と考えられる。32は青磁碗の底部片で、15世紀後半と考えられる。33は朝鮮李朝のものである。内面に砂目積みの痕跡が残る。16世紀終わりから17世紀初頭の時期のものとみられる。34は白磁香合の蓋である。35は黒釉瓶の頸部の破片である。13世紀後半から14世紀代のものと考えられる。

9. 石器・石製品

石器・石製品には、縄文時代から中世にいたるまでのものが出土している。量的に多いのは、縄文時代から弥生時代にかけての大・中・小形の打製石器や磨石・凹石類であり、器種としては特に石斧（石鎌）や小形石鎌の多さが目立っている。磨製・局部磨製石器には、石鎌、石包丁、石錐、石斧があるが量は少ない。時期を特定しがたいものが多いなか、出土量の多い打製石斧（石鎌）は突帯文系土器や弥生前期土器とともに谷部の最下層から出土しており、おおむね弥生前期を前後する時期のものと思われる。石材は、打製石器は流紋岩、安山岩、そして玉髓メノウ質のものが多く、神戸川流域など近隣から採集されたものと思われる。また、黒曜石が少ないのが特徴であり、石棒と考えられる石器は四国産または紀伊半島産の可能性が極めて高い砂泥質片岩であることが注目される。

石 鎌（第103図、カラー図版1）

90点ほどが谷部から出土している。おおむね小型で軽量のものである。図化したものでは、長さ・幅・厚さ・重さの順でいえば、最大値が4.1cm、2.8cm、0.8cm、6.3g、また最小値では1.3cm、0.9cm、0.2cm、0.2gであり、平均値では2.24cm、1.63cm、0.4cm、1.33gとなる（71・73・75は未製品であろう）。形態的には、おおきくは平基無茎式と凹基無茎式との2種類のものが出土している。

石材は流紋岩ないしは安山岩が多く、次いで玉髓瑪瑙質のもので製作されている。黒曜石が最も少ない。

石錐・異形石器・楔・剥片（第104図、図版49・50）

1～8・10～15は石錐であり、9はその未製品と考えられる。

16・17は異形石器で、16は断面三角形状を呈し、刃部・柄部からなる。柄部には刃済し加工がみられる。17は背面に節理面を残し、全体に急角度で大きな剥離面による粗い調整がみられる。上方は基部状に加工されている。18・19は、互いに相似形の異形石器で、縁辺の矢印は流れを表している。二次加工は先端の尖る硬い工具の押圧剥離である。20～23は押圧具で、両側縁または片側縁に細かい剥離と流れがみられる。24は刃済し加工のある石器片である。断片なので詳細は不明である。

が、この石器だけが硬質ハンマーによる真正の刃潰し加工のある石器である。25~33は両極剥片であり、26は使用痕が認められる。34は小型剥片の右核である。35・36は巾形の楔である。

これらには石英安山岩、流紋岩、溶結凝灰岩か凝灰岩、流紋岩の溶岩か溶結凝灰岩か凝灰岩、めのう、黒曜石が使用されている。

削器・スクレーパー（第105図、図版50）

1は縦長剥片を利用した削器で、一次剥離面を大きく残す。鋸歯状の刃部をもち、自然面は粗砥でまんべんなく研ぐ。上縁の整形加工は直接打撃により、側縁の整形加工と刃部は押圧剥離によっている。2はスクレーパーである。3は横長剥片を利用したスクレーパーであり、凹刃である。4は上部を欠くが、表裏側の三面に節理面を大きく残し、半円形に整えられた削器で、凸刃である。5は縦長剥片を利用した削器で、押圧整形され、刃付けも押圧で両面から浅い連続剥離である。6は不定形な台形を呈する薄くて小形のスクレーパーであり、上辺に潰れがみられる。7は薄く半月形に整形加工されたスクレーパーで、刃部は下辺一辺のみである。8は縦長剥片の削器で、縁辺の一部にごく浅い連続剥離のみを施している。9は凹刃の削器であり、刃部調整はごく浅い連続剥離が両面から施されている。10は縦形剥片の削器で、縁辺をぐるりと両面から調整している。11は削器で、刃部調整は片面からのみである。12はスクレーパーで、全面両面とも調整が加えられており、1はめのう、2は流紋岩の可能性が高いもの、3~10・12は流紋岩、11は石英安山岩、である。

檜木製品・剥片（第106図、図版51）

1~6・8は檜木製品ないしは檜木未製品である。7は垂直打ちに近い剥離角のコアである。9は礫面を残した大形剥片である。10は垂直打ちの剥片である。11・12は打製石斧（石鎚）の製作剥片である。13は使用痕の認められる剥片である。14は一部に礫面を残す使用痕剥片である。これらの石材は、流紋岩、めのう、黒曜石、流紋岩の溶岩か溶結凝灰岩か凝灰岩のいずれかであると思われる。

大形楔形石核・ハンマー（第107図、図版51）

1は100×116mm、厚さ47mm、重さ619.7g、流紋岩製の大形くさび形石核である。上辺・下辺と左辺の一部の面に潰れが認められる。2は98×105mm、厚さ45mm、重さ414.3g、めのう製の石核スクリーパーである。表面の一部に潰れが認められる。3は61×51mm、厚さ51mm、重さ187.8g、めのう製の石核転用ハンマーである。かなりの敲打痕が認められる。4は52×68mm、厚さ55mm、重さ205.2g、石英安山岩製のハンマーである。これに伴う接合剥片が認められた。5は89×75mm、厚さ59mm、重さ545.7g、めのう製のハンマーである。3箇所および上下両面周辺の角を利用しており、敲打痕が広い範囲に認められる。

打製石斧（石鎚）（第108~110図、図版52~58）

石器類のなかで出土量の最も多いものである。谷部から出土している。小形のものから大形のものまで大小があるが、大形のものが少くない。岩石名は青灰色で小さな穿孔が斑点のようにあるのが石英安山岩であり、これが大半を占めている。その他は、白色系の流紋岩か、もしくは流紋岩

の溶岩か溶結凝灰岩か凝灰岩のいずれかである。

打製石斧にはその形状が縦長のもの、横長のもの、あるいは円形のものなど幾つかのパターンが認められる。このうち量的に最も多いのが縦長タイプであり、さらに第36図のような分類が可能である。

磨製・局部磨製石器（石鎌・石斧・石庖丁・石錐）（第111図、図版58）

1・2は局部磨製の石庖丁であり、3は磨きが認められないが、刃部を形成していて石庖丁の可能性がある。1は変形台形状で、底辺と左辺と2辺が刃部である。1・2は両面からの穿孔がある。4は局部磨製の石鎌と考えられる。5は全体によく磨かれた磨製石鎌である。刃部を研出し、下半部の両側縁を面取りする。中ほどを横方向に磨き、わずかに座ませる。装着のためかと思われる。6は柱状片刃石斧である。7～9は局部磨製偏平石斧である。いずれも偏平石材を用いて、刃部を研出している。重さは1が65.2g、2が29.9g、3が28.0g、4が39.2g、5が16.6g、6が93.5g、7が91.7g、8が54.8g、9が116.2gである。1～4が頁岩、5が頁岩か流紋岩のいずれかであると思われるもの、6が安山岩質凝灰岩、8が安山岩質凝灰岩の可能性が高いもの、7が流紋岩質凝灰岩、9が流紋岩である。

磨製石斧（第112図・第113図、図版59）

約50点ほどが出土している。そのほとんどは基部か刃部の欠損品である。

第112図は、5・11・15・16が流紋岩、2～4・6・10が流紋岩の可能性が高いもの、7～9・13が石英安山岩の可能性が高いもの、12がガーネットを含まない泥質片岩、14が安山岩、である。

第113図は、1が石英安山岩、3・4・6～8・10～12・14・15・17～19が流紋岩、2・5・9・13・20が流紋岩の可能性が高いもの、21が流紋岩質凝灰岩、16が流紋岩質凝灰岩の可能性が高いものである。

石錐・石棒・石冠状石器（第114図、図版49）

石棒と考えられるものが3点出土している。圓化した2点は、1がガーネットを含んだ泥質片岩であり、2が砂泥質片岩である。いずれも打撃を加えた痕跡があり、故意に壊されたものと思われる。3は凹面と凸面を有する石冠状石製品であり、流紋岩質凝灰岩である可能性が高い。石錐についてはそれほど多くはなく、約20点出土している。4は有溝石錐、5～14は打欠き石錐、15～17は切目石錐である。4が流紋岩質安山岩、5が安山岩質凝灰岩の可能性が高いもの、6・8・10・12・16が流紋岩質凝灰岩、7が細粒の花崗岩（アップライト）、9・13が流紋岩、14が流紋岩か頁岩のいずれかであると思われるもの、11が砂岩、15・17が石英安山岩質凝灰岩である。

磨石・凹石類（第115図～第119図、図版59）

約90点ほどが出土している。第115図は、玢岩、安山岩、流紋岩質の結晶質凝灰岩、細粒の閃綠岩、石英安山岩、安山岩質凝灰岩などである。第116図は、大半が安山岩で、そのほかは石英安山岩、流紋岩であると思われる。第117図は、斑状安山岩、流紋岩、安山岩などである。第118図は、流紋岩、安山岩、石英安山岩、結晶質流紋岩と考えられる。第119図は、流紋岩、玢岩、石英安山

岩、安山岩、細粒の花崗岩（アップライト）、頁岩、珪質片岩、砂岩がある。

石皿・砥石類（第120・121図、図版60）

約40点ほどが出土している。第120図は、石英安山岩、安山岩、安山岩質の溶岩か凝灰岩と考えられるものである。第121図は、石英安山岩、安山岩、安山岩質凝灰岩、砂岩と考えられるものである。

砥 石（第122～123図）

約40点ほどが出土している。第122図は、砂岩、流紋岩質凝灰岩、流紋岩である。第123図は、砂岩、細粒の砂岩、極細粒の砂岩、流紋岩質の凝灰質砂岩、流紋岩質凝灰岩、流紋岩である。

石製紡錘車（第124図）

10点ほどが出土している。1～4は断面の軒口の厚さに相違があるが、上部と下部とを区別する界線があるので、比較的背の高いタイプのものである。また1～4は線刻に稚拙はあるが、いずれも上面下面ともに線刻模様があるので、4弁ないしは5弁、もしくはそれ以上のヒトデ状の星マークに加えて同心円状の鋸歯文が施されている。5は高さが低く、断面が偏平な感があり、模様も上部下部とともに5弁のヒトデ状の星マークに加えてクモの巣状の線刻が施され、また側面も單弁の鋸歯文が線刻されている。7は穿孔はあるが模様はなく、断面台形のタイプのものである。8は未製品であろうか、穿孔がなく、線刻模様も施されていない。1～3・8が流紋岩質凝灰岩、4～6が流紋岩質凝灰質砂岩、7が細粒の砂岩である。

碧玉製管玉・硯・石鍋

管玉は1点出土。長さ1.1cm、外径4mmで、鈍い緑灰色を呈し、両面から穿孔される。孔の径2mmである。硯は破片が2点出土している。1点は残存部の最大長4.9cm、同最大幅3.1cmの側縁部の破片である。高さは1cm、縁の幅7mm、同高さ4mmで、裏面にも池が設けてあり、両面が使用されていたものと思われる。もう1点は同じく側縁部の破片で残存部の最大長2.7cm、同最大幅4.5cmあり、縁は幅4mm、高さ2mmを測る。石鍋は滑石製で、破片2点がある。銀灰色なしが淡暗銀灰色を呈していて、にぶいつやがある。内面はよく磨かれまたは使用されてつるつるしており、外面も比較的ていねいに削られている。九州産滑石を用いたものとみられる。

五輪塔・宝篋印塔・石臼（第125図、図版60）

1・2は五輪塔の空風輪部を一石で表したものである。4・5は火輪部である。6～11は水輪部である。6～10は上下の平坦面中央に比較的深い孔が空けられている。孔には平刃のノミ痕がよく残るものがあり、6には1.6cm幅の、9には1.8cm～1.9cm幅の、10には2.2cm幅のノミ痕が確認できる。3は宝篋印塔の軒輪部であり、現状では九輪部が六重残り、その下位にシンプルな請花部・覆輪部・伏鉢部が続く。12は宝篋印塔の笠部である。上位は一段分しか遺存せず、それより上方は剥落して欠失する。下位には段がなく、底面が方形に浅く彫り込まれ、塔身部の受け部としている。四隅の隅飾は単純で、素面で1弧である。底面には平刃のノミ痕が認められ、その幅は1.6～1.8cm

ほどである。4は流紋岩質凝灰岩か、または凝灰質砂岩であり、他のものもこれとほぼ同じ凝灰岩質のみものとみられる。13は石臼の雄臼で、上部には放射状の刻みがあり、中位には突起部を設けて溜まりの部分をつくる。

10. 木器・木製品

木製品（第126～156図、図版61～73）には、木簡・木筒状木製品、笏・ヘラ状木製品、田下駄、鍔・鋸、横柵、木鍤、糸巻具、火鑽具、扇、下駄、人形・刀形・舟形・陽物、弓、栓状木製品、箱状木製品、案・机状木製品、剣物盤、槽状木製品、円形・方形曲物、挽物椀、丸棒・角棒、燃えさし、扉装置・扉材、壁材、有孔材、杭、有頭材、板材、井戸枠材や、その他用途を特定できないものなどが出土している。

これらの木製品は調査区の谷部流路からの出土がほとんどである。奈良時代以降の木簡や比較的深い層から出土した槽・扉材などの古墳時代中期ごろに漸る可能性のある遺物をのぞき、時期を特定しがたいものが大半である。

第126図と第127図のうちには、木簡および木筒状木製品、ヘラ状木製品を載せる。木簡は別記。第128図1～4は下駄である。1・4は一本連鎖下駄である。3も連鎖下駄であろう。2は歯のない下駄である。1～3の台には足裏による摩滅痕が確認できる。5・6は田下駄であろう。7はえぶりである。8～10は一本作りの横柵である。11は槌の子（木鍤）である。12は一本作りの栓状木製品である。13～16は鍔・鋸先である。17は瓶状の底の無い円形剣物で、下端に孔がある。

第129図1・2は糸巻の枠木であり、5はそれを固定するための横木である。4は物差の可能性がある。一寸間隔で刻みが入る。7～12は細い角棒を用いた火鑽板である。ほぼ等間隔に切欠きを入れ、火鑽作を回転させた火鑽臼を片面ないしは両面にとどめる。10や11には未使用の切欠きを止めている。13は籠を思わせる形態のもので先端には漆状のものが付着している。第127図3・4などもこれに類する可能性を否定できない。14は扇の骨であろう。薄板で、基部は丸くおさめ、小さな孔が空く。某部先端から11cmのところから薄くつくられる。

第130図1～3は刀形、4は剣形と考えられる。5は陽物形である。6が丸木弓である。9は側面觀を表した人形と考えられる。13・14は舟形である。13は船首と船尾を明瞭に作り分けている。14は半截材をやや粗く削り抜いてつくる。このほか同図中には用途を特定できないものを加えている。7は薄板の先端を尖らせ、両方から小さく抉りをいたるものである。8は先細りする棒状のものに一部刻みが施されているものである。10は弾丸状の木製品である。11は中空の素材の一方を頭部状に削り出した木製品である。12はヨーヨー状の木製品である。

第131図10～12の一点は、四方転の箱の可能性がある。9は栓の可能性がある。

第132図1は案の天板で、脚部をはめ込む形式である。2は多足机の天板と考えられるものである。3は作り出しの脚のある台である。4・5は案の天板を支える脚部である。はめ込み式のものであろう。6は差し込み式の脚のある方形の台である。7ははめ込み式の脚のつく方形の台である。8は作り出しの低い脚がつくやや細長の台である。

第133図1は長方形の剣物盤である。台はない。四隅を丸く仕上げる。2は把手付きの方形盤である。把手は短辺側の片方に付く。八角形状の足を低く作り出す。5は脚坏の浅めの剣物で木皿である。6は把手付きの剣物である。あかとりか。7は長方形の槽である。内面は比較的ていねいに

削られるが、外面の短辺側は削り離しの状態である。3は作りの粗い剣物で、構の可能性がある。

第134図1～3はいずれも大型の構の一部と考えられる。浅くて広い底部に縁部が翼状に短く立ち上がる。1は両端の立ち上がりが向き合うように削られている。なお、133-4もこれらと同じ大型の構の一部と考えられるものである。円形の突起がつく。

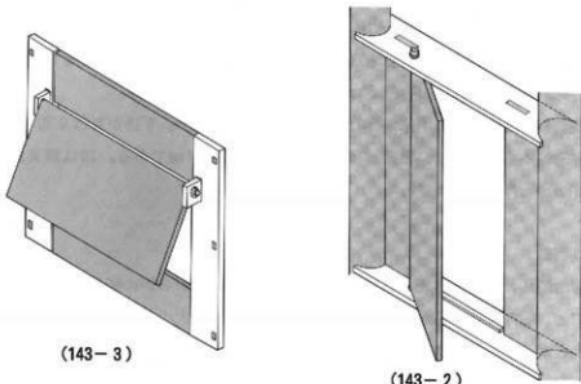
第135～138図および第140図11～16は、円形曲物と考えられるものである。第135～138図は、曲物の蓋板または底板である。その径の計測値は第0図のとおりである。第138図11・12は構円形曲物板である。

第139図1～11は、方形曲物・隅丸方形曲物・折敷の側板・底板と考えられるものである。

第140図1～10は、轆挽きの輪である。1・2・5～10は底部を除き内外面漆塗りである。1・2・10は赤漆で絵模様を描く。3・4は素地のままで、白磁を真似たものであろう。

第141図はおもに大小の丸棒状・角棒状の木製品を載せている。4は両端が尖るが、片方は丸細く、もう一方はヘラ状につくられる。5・6は一方が絞り気味につくられる。7は有頭状につくられる。第142図は燃えさしである。

第143図1は扉の軸受け穴を有する板材である。2は扉の軸受け穴を有し、戸当たりを作り出す。両端は円柱をはめ込むために半円形にくられる。3は扉の軸を受ける部材を伴った片扉装置で、縦枠材の一方であろう。軸受けを差し込む穴を内側に寄せて上方に空けるとともに、横枠材を受ける二つのほぞ穴を設ける。軸受けの部材ははめ込み式で、穴は構円形、遊びをもつ。第144図1・2は扉材である。3も扉材であろう。145図1・3は壁板材であろうか。2は中央に寄せて斜めに差し込むほぞ穴が空き、一方の端には込栓風の穴があく。第146～152図は用途を特定しがたい部材が大半である。第146図は孔のある部材である。第147図1はもと井戸枠材であろうか。2は一方を尖らせる。3はSE02の枠材である。第148図4は有溝の半円形部材ではぞを伴う。第149図2・3は斜め方向のはぞ穴を有する部材である。4は片側中央を突起させ、両側縁に溝を有している。第150図1は一定間隔で垂木受け状の窪みをもうける部材である。2は屈曲する材にほぼ一定の間隔で台状の突起部を設けている。第151図4は天秤棒かと思われる。第152図は主に端部を有頭状に削



第35図 扉装置部材想定復元図

り出した棒材である。第153図は主に杭である。第154～156図はSE01の部材である。

11. 金属製品・鍛冶関係遺物

金属製品には、矢尻・手鎌・鎌・刀子・手斧などの鉄製品、巡方・鏡の銅鋳製品や、錢貨がある。土器類などに比べると、出土量は非常に少ない。また、鍛冶関係の遺物にフイゴ羽口、鉱滓が認められた。

鉄鎌・鉄鎌・鉄斧・刀子・巡方・鏡ほか（第157図、図版74）

1～5は鉄鎌である。1・2は二股の狩俣式であり、3は鑿刃式系統であろう、刃部は細長く断面方形である。4は横葉式系統であり、5は方頭式である。6～8は断面方形のもので、6がクサビ状、7・8が釘状のものである。21は小型の鉄斧で横断面は方形状になる。22は短辺側に折り返しがつき、手鎌とみられる。23は耳鎌で中空ではない。18は刀子である。D1区の最下層から縄文時代後期の土器とともに出土した。19は火打ち金の可能性がある。10～14は、背部の曲線や折り返しなどから、鉄鎌の可能性がある。9は先細りする茎部を有し、現状では背面側がゆるやかなカーブをえがく。17は背部が直線で、薄手の鉄器である。24は巡方の表金只で、鉄製である。ほぼ正方形を呈し、下辺に沿って細長い長方形の透孔があく。内面側の四隅に鉢足を鋤出する。下辺側が少しくぼむが、全体に保存状態はよい。25は隅切り方形鏡である。背面に菊花文と「天下…」の文字を鋤出し、糸通し用かとみられる径0.5～0.7mmの針穴の空いた小さな鉢がつく。

銅 錢（第158図、図版74）

1の和同開珎（初鋲年は708年）は、鋤上がりがよく、両線も明瞭である。「開」の字の門構えの上端が開いた「隸開和同」（新和同）である。重量2.7g、径2.4cm、厚さ0.1cmである。2の開元通寶は（初鋲621年・唐錢）、重量2.94g、径2.5cm、厚さ0.1cmである。3の咸平元寶は（初鋲998年・北宋錢）、重量2.56g、径2.35cm、厚さ0.1cmである。4の治平元寶は（初鋲1064年・北宋錢）、重量2.62g、径2.4cm、厚さ0.1cmである。5の熙寧元寶は（初鋲1068年・北宋錢）、重量2.91g、径2.5cm、厚さ0.15cmである。6の元豐通寶は（初鋲1078年・北宋錢）、重量3.01g、径2.4cm、厚さ0.1cmである。7の元祐通寶は（初鋲1086年・北宋錢）、重量3.13g、径2.5cm、厚さ0.15cmである。8の聖宋元寶は（初鋲1101年・北宋錢）、重量3.02g、径2.5cm、厚さ0.1cmである。

9は上部が破損し、また右部と下部が摩耗によって認識できない。手掛かりは左部の「寶」だけなので錢文の解説は不可能だった。重量1.94g、径2.4cm、厚さ0.1cmである。10は無文錢であり、重量1.03g、径1.9cm、厚さ0.05cmである。

鉱滓・フイゴ羽口

いずれも鍛冶関係の遺物と考えられるもので、これには鍛冶炉の炉に関係した炉壁の溶解物およびフイゴ羽口と、鉱滓・鉄塊系遺物とがある。フイゴ羽口は、大小7点ほどある。鉱滓には、楕型鍛冶滓・不定形鍛冶滓があり、楕型鍛冶滓は精錬鍛冶相当のラストの段階の生成物と考えられるものである。不定形鍛冶滓には、炉の上半部の生成物と、炉底側の生成物とがあり、前者は3点ほど、後者は6点ほどある。鍛冶鉄塊系遺物は1点である。

12. 文字資料（第101・126図のうち、図版75～77）

文字資料には、木簡、墨書き上器（土師器・須恵器）、ヘラ書き土器（須恵器）がある。

まず木簡（第126図、図版75）であるが、呪符木簡3点と人名を入れた木簡2点の、計5点がある。1は、呪符木簡である。完形で、 $278\text{mm} \times 21\text{mm} \times 4\text{mm}$ 。033型式。頂部をゆるやかに山形にし、そのすぐ下方に切り込みを2段左右から入れる。下端は鋭く尖らせている。符籙は「几」（つくえ）のなかに「口」「日」を組み合わせたもので、その下に「鬼」の字をおく。

（訳文）「<（符籙）鬼急々如律令」

2は、呪符木簡である。完形で、 $159\text{mm} \times 22\text{mm} \times 3\text{mm}$ 。051型式。頂部は方頭で、先端を浅く削ったあと、軽く刀子をあて刻みを入れた痕跡がある。下端部は尖らせている。「急々如律令」のうえには「已」と「日」を並記し、その下に「口」（しかばね）に「鬼」を組み合わせた文字をおく。

（訳文）「（符籙）急々如律令」

3は、両端が折れて欠損した木簡である。 $(76\text{mm}) \times 19\text{mm} \times 3\text{mm}$ 。081型式。現状で再上段と最下段の文字は不明だが、その間の4文字は「出雲積豊」と読める。「雲」の文字がやや右側に片寄って書かれている。「川雲積」は正倉院文書のなかに人名としてみえることから、この場合の「出雲積豊□」も古代の人名と考えられる。

（訳文）「出雲積豊〔」

4は、両端が折れて欠損した呪符木簡である。 $(135\text{mm}) \times 29\text{mm} \times 4\text{mm}$ 。081型式。「急々如律令」のうえにある符籙は、「梵天□」かともみられる。文字の痕跡が浮き上がってみえることから、表面がさらされた状態にあったことがうかがえる。

（訳文）「（符籙）急々如律令」

5は、古代の郷名と人名を入れたとみられる木簡である。 $(86\text{mm}) \times 38\text{mm} \times 3\text{mm}$ 。019型式。先端は潰れがあるものの書き始めの部分とみられ、もとの形状を止めているものと思われる。「高岸」は神門郡の一郷名である「高岸郷」を、「神門×」は人名を表しているものと思われる。

（訳文）「高岸神門×」

6は、片面の下端部に墨痕を止める木簡である。完形で、頂部はやや丸みのある山形に加工し、その下に左右に切り込みを入れる。下端は緩く尖らせている。 $126\text{mm} \times 31\text{mm} \times 6\text{mm}$ 。033型式。

（訳文）「<〔〕」

なお、文字は認められないが、木簡の形状を呈した木製品がいくつか出土している。

第126図の7は、封緘木簡の形状のものである。下端部はグリップ状に作られている。頂部はゆるやかに山形に加工され、その下方と巾ほどの2カ所に左右から切り込みが認められる。上方は、断面が台形状になり、両面は平坦に削られる。これを細かくみると、片方はきれいに平滑にされ、もう片方は何回かに分けて削りが加わっていることがわかる。おそらく、平滑な面が文書を挟んだときの内面側で、もう一方が外側に相当するものと思われる。抉りの入った下端部は断面が隅丸状に面取りされている。両方の切り込みの間は11.3cmであるが、平坦面は16.7cmである。おそらくこの平坦部分に文書が挟まれるようになっていたものと思われる。

なお、左右の刻みはないが、この封緘木簡に近い形状のものに第127図1・2・3などがあり、なかでも同図1は寸法も近く、注意が必要であろう。

また、第126図の8～15は、頂部の下方に左右から切り込みの入った木製品で、ほぼ共通する寸

法であり、木筒の可能性がつよい遺物である。頂部の形状をみると、8～13は方頭のまま、14は方頭だが左右隅切りがあり、15は山形に加工されている。調整は、大きく分けると両面ともに平滑に丁寧に削られたものと、片面を丁寧に平滑に削ったものとがある。いずれもほぼ同じ長さで切り折れされるか、もしくは切り離しがおこなわれていて注目される。

次ぎに墨書き土器（第101図のうち、図版76・77）についてである。須恵器が17点、土師器が8点、計25点認められた。

1は一字文か。判読不能だが、「廿」の可能性あり。須恵器高台付环の底部外面（ヘラ切り痕）の端部に寄せて書かれている。2は「ト」の一文字。須恵器高台付环の底部外面（ヘラ切り痕）の端部により書かれている。数字か。3は「□宅」の二文字、または「□□宅」の三文字。須恵器高台付环の底部外面（回転糸切り痕）の端部に寄せて書かれている。4は「三田」の二文字。須恵器高台付环の底部外面（ヘラ切り痕）のやや端に寄って書かれている。同様の「三田」の墨書き土器はもう1点出土しており、須恵器高台付环の底部外面（ヘラ切り痕）のやや端よりに書かれている（図版76右側中央）。5は判読不能だが、須恵器高台付环の体部外面に墨痕が認められる。6は「ノ」を伴う「友」の一文字。須恵器無高台の环の底部外面（回転糸切り痕）の中央寄りに書かれている。7は二文字か。判読不能だが一文字は「日」か。須恵器無高台の环の底部外面（糸切り痕）に書かれている。8は一文字であろう。「縁」か。須恵器無高台の环の底部外面（回転糸切り痕）の中央に書かれている。9は二文字か。「立新」か。器高の低い須恵器环の底部外面（回転糸切り痕）の中央に書かれている。10は一文字であろう。「直」須恵器环の体部外面に正位で書かれている。11～13は「坂」の一文字。三点ともほぼ同一の寸法・製作手法の須恵器無高台（底部回転糸切り痕）の环で、いずれも体部外面に正位で書かれている。同一人の筆跡の可能性がある。

14は少なくとも三文字ある。「□原□」で一文字目は「任」の文字に似、「荏原□」である可能性が高い。荏原は、正倉院文書に神門郡口置郷のうちの一里名としてみえる地名である。15は「○」とある。赤色塗彩された土師器环の底部外面のやや端寄りに書かれている。

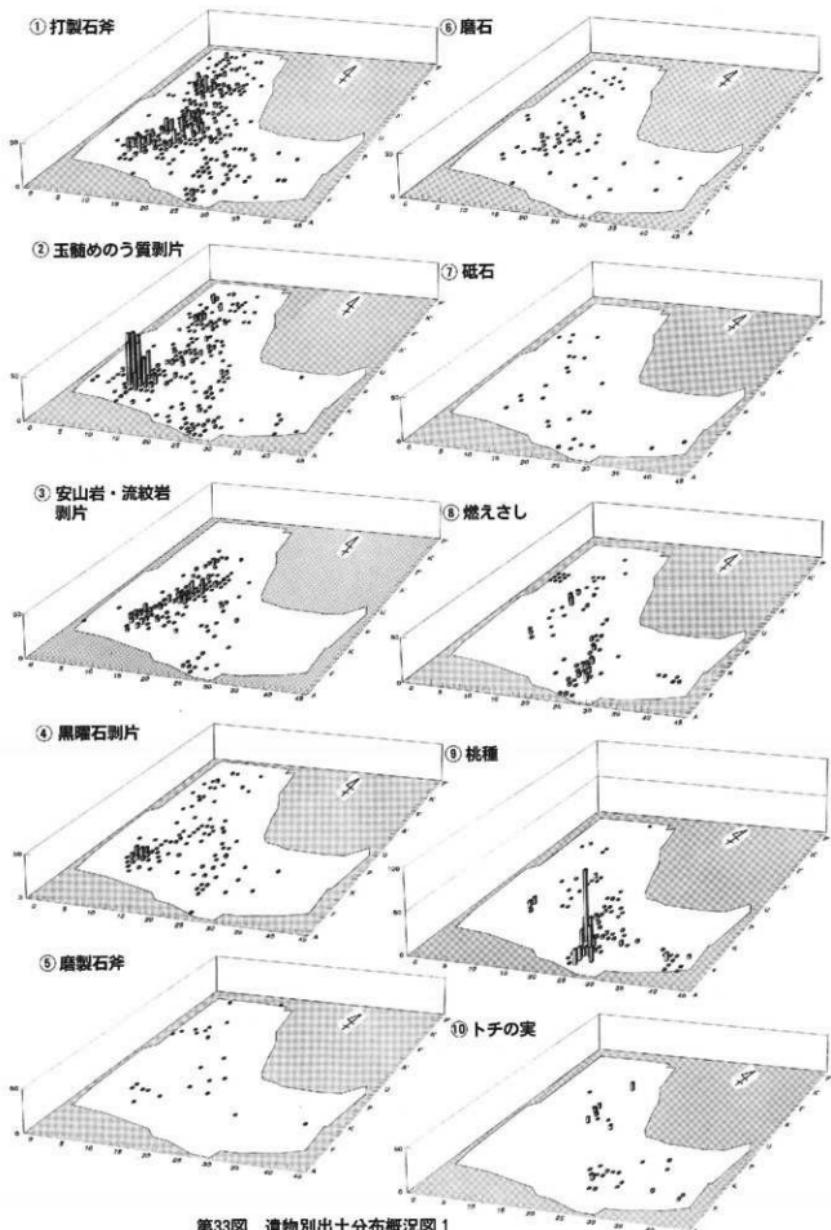
16は「ノ」を作う「○」である。記号かと思われるが、「口」の可能性もある。土師器环の底部（小片）外面に書かれている。17は「○」である。赤色塗彩された土師器环の底部（小片）外面に書かれている。18は「○」である。土師質の环の底部外面の中央に書かれている。記号かとみられる。19は判読不能だが、墨痕が認められる。赤色塗彩された土師器环の底部の中央寄りに書かれている。20は判読不能だが、墨痕が認められる。赤色塗彩された土師器环の底部外面の中央部分に書かれている。21は判読不能だが、墨痕が認められる。高台付环の底部外面に書かれている。

22は「ノ」を作う「土」の一文字である。土師質の环の底部外面（回転糸切り痕）の中央寄りに書かれている。

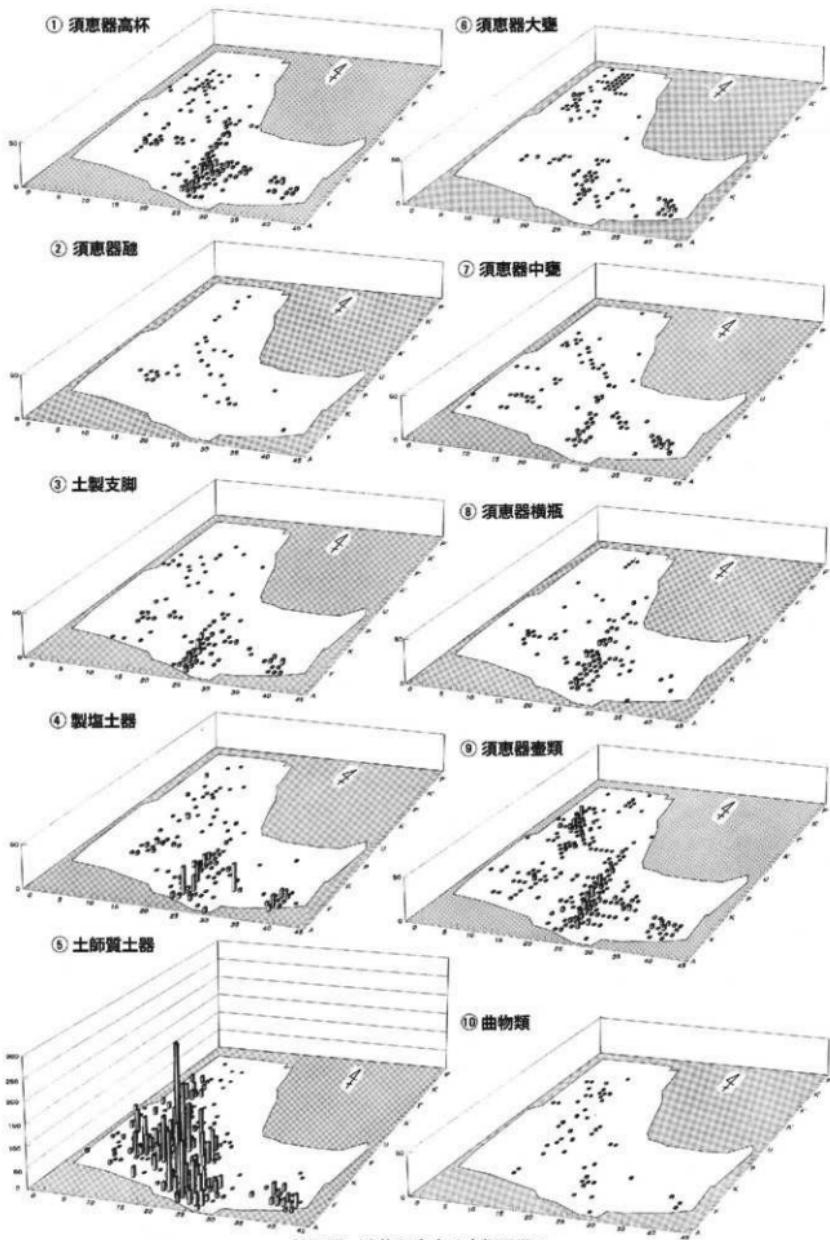
なお、墨書き土器にはここに図示したもの以外にさらに3点がある。いずれも小破片だが、うち2点は須恵器無高台の环の底部外面（糸切り痕）に認められ、もう1点は壺または瓶かとみられる体部外面に認められる。また、第101図には墨書き関係あるものとして数点の関連資料を添えている。23は厚みのある円形の円盤の下部に脚部の付いた硯とみられるものである。脚部は焼成後に打欠かれているが、上部は焼成以前に円形にヘラ切りされたうえにナデられていて、当初から硯を意識して製作されたものとおもわれる。上部内面は僅かに窪み、使用されて滑らかになり、その周囲には薄く墨痕が認められる。24は墨汁入れにでも使用したものかとみられる小型の高台付环である。内

面のほぼ全体と、体部外面の一部に墨が認められる。25は転用硯で、輪状つまみを有する坏蓋を利用したものである。内面中央部が浅くくぼみ、使用されて滑らかになり、その周間に擦痕が認められる。なお転用硯としては、第67図で図示した輪状つまみを有する坏蓋（21）もその可能性が強い。内面は、あまり滑らかさは認められないが、広い範囲に墨が明瞭に残っている。

ヘラ書き土器は1点出土している。鉄鉢形土器の須恵器で、「中」の文字が体部内面に逆位に刻まれている。おそらく容器の大中小のうちの「中」を意味しているものと思われる。



第33図 遺物別出土分布概況図 1



第34図 遺物別出土分布概況図 2

打製石斧(石鎚)計測表(1)

No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考	No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考
1	21.2	8.7	3.2	802.3	I-A-a	36	13.9	9.5	1.5	357.6	II-A-c
2	22.5	8.0	2.5	658.9	"	37	14.1	9.1	2.4	435.0	"
3	19.6	7.3	3.0	540.7	I-A-b	38	23.4	11.1	2.8	803.3	II-B-a
4	16.6	7.1	2.5	478.6	"	39	23.3	11.6	2.7	746.2	"
5	14.9	7.2	1.4	248.7	"	40	20.9	11.0	3.7	760.0	"
6	17.5	7.2	2.1	415.4	I-A-c	41	18.0	7.8	3.4	507.4	"
7	11.1	4.6	2.0	150.0	I-A-a	42	16.6	9.5	2.1	420.9	"
8	9.4	5.1	1.8	121.1	I-A-b	43	15.4	8.6	2.6	471.0	"
9	22.6	11.9	4.3	1063.6	II-A-a	44	16.2	9.0	2.2	410.7	"
10	21.1	9.7	3.8	730.3	"	45	15.2	8.8	2.4	446.7	"
11	19.3	10.5	1.9	409.6	"	46	15.0	8.5	2.3	305.6	"
12	16.0	9.7	2.5	516.1	"	47	15.4	7.9	2.6	391.2	"
13	15.1	9.5	3.0	465.3	"	48	25.2	10.7	4.1	1482.2	II-B-b
14	16.7	7.7	2.1	324.6	"	49	24.5	9.9	3.9	985.3	"
15	15.1	8.1	2.0	369.7	"	50	22.7	9.4	3.7	909.9	"
16	16.1	8.2	2.5	397.8	"	51	20.0	10.0	3.1	712.8	"
17	10.8	7.5	2.0	217.2	"	52	16.9	8.2	2.7	535.6	"
18	12.3	8.6	1.5	180.6	"	53	18.1	9.3	2.0	658.9	"
19	12.3	6.2	1.7	161.9	"	54	13.8	6.9	2.4	317.9	"
20	11.0	7.4	1.9	177.6	"	55	13.2	6.2	1.5	173.5	"
21	10.7	5.4	1.2	96.5	"	56	12.8	6.0	1.7	159.7	"
22	19.3	10.0	1.9	631.0	II-A-b	57	20.2	10.0	2.8	495.5	II-B-c
23	19.3	10.5	1.7	452.1	"	58	19.4	8.1	2.7	522.4	"
24	17.5	9.8	1.5	348.8	"	59	18.6	8.3	2.7	564.6	"
25	18.2	10.9	2.0	469.7	"	60	16.6	8.7	3.3	506.5	"
26	17.4	9.4	3.1	634.0	"	61	16.8	7.7	2.5	380.3	"
27	15.0	10.2	3.1	529.9	"	62	22.1	15.8	4.4	1406.5	I-A-a
28	17.6	8.0	3.5	581.6	"	63	17.1	11.2	3.4	576.8	"
29	17.5	8.0	2.6	373.0	"	64	23.4	12.3	3.3	1048.2	III-A-b
30	15.7	9.5	2.4	445.5	"	65	17.9	12.2	3.0	601.5	"
31	11.5	6.9	1.8	194.9	"	66	17.7	11.2	2.7	571.1	"
32	11.4	7.1	2.1	216.8	"	67	18.5	11.7	2.3	543.0	"
33	11.2	6.2	2.1	198.0	"	68	17.3	11.9	2.9	635.7	"
34	11.7	5.5	1.4	112.1	"	69	16.7	10.4	1.8	407.4	"
35	12.9	9.8	1.6	312.9	II-A-c	70	17.2	11.3	3.1	754.4	"

打製石斧(石鎚)計測表(2)

No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考	No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考
71	15.0	9.8	2.3	389.4	III-A-b	106	11.0	6.7	1.3	146.0	側面未調整あり
72	24.6	11.6	3.4	972.9	III-A-c	107	12.3	7.0	2.0	181.2	"
73	18.4	10.0	3.4	695.4	"	108	18.6	8.7	3.1	550.9	"
74	16.7	9.6	2.2	487.9	"	109	18.9	7.5	3.1	515.8	"
75	16.8	11.8	3.4	613.7	"	110	16.8	7.0	1.9	289.7	"
76	15.5	11.5	2.7	583.3	"	111	16.3	6.8	2.3	330.2	"
77	23.7	11.5	3.0	889.2	III-B-a	112	14.9	7.4	2.3	394.3	"
78	19.2	10.8	2.5	561.2	"	113	13.1	5.7	1.4	133.3	"
79	25.7	15.3	4.4	1429.1	III-B-b	114	20.2	9.4	3.9	279.9	"
80	24.9	12.4	2.4	737.6	"	115	13.3	6.5	2.0	170.2	"
81	21.8	10.3	3.7	1058.6	"	116	16.8	10.6	2.9	504.6	"
82	19.6	11.4	2.2	480.4	"	117	11.5	6.5	1.5	186.6	"
83	20.3	8.0	1.7	416.2	"	118	12.9	10.6	2.3	360.9	
84	22.8	10.3	2.3	771.6	"	119	12.0	7.1	1.5	183.1	
85	19.4	9.8	2.0	427.1	"	120	8.9	5.5	1.3	98.2	
86	20.4	12.1	4.1	746.2	"	121	8.1	5.8	1.2	72.5	
87	19.3	10.9	4.3	616.6	"	122	13.9	14.0	2.0	328.9	
88	15.0	11.2	2.6	474.8	"	123	15.3	13.0	1.8	529.7	
89	14.3	9.7	3.4	419.2	"	124	12.4	10.3	1.9	355.8	
90	11.2	7.5	1.8	149.8	"	125	15.3	12.1	1.5	345.4	
91	10.8	7.2	2.2	147.7	"	126	12.8	10.2	2.4	332.2	
92	16.5	10.5	3.3	482.3	III-B-c	127	12.8	11.1	1.5	272.2	
93	16.3	10.5	2.4	456.7	"	128	19.7	13.5	2.6	659.4	
94	15.6	9.2	2.7	406.7	"	129	15.5	17.0	3.2	806.8	
95	16.6	10.4	2.7	504.2	"	130	15.9	11.7	2.0	613.8	
96	17.4	10.2	3.4	529.7	"	131	13.1	9.8	2.7	522.3	
97	15.7	9.2	2.8	430.1	"	132	17.8	6.4	2.5	382.1	
98	17.3	7.6	3.0	574.6	側面未調整あり	133	16.6	4.7	2.1	254.2	
99	15.1	7.1	2.9	411.3	"	134	23.8	8.3	3.1	802.2	なた状石器
100	15.3	10.3	1.8	360.2	"	135	19.7	9.0	1.5	355.1	"
101	16.8	10.2	1.8	360.7	"	136	20.4	7.3	2.0	388.3	"
102	16.8	7.7	2.6	400.9	"	137	20.1	4.3	2.4	356.4	
103	15.4	8.0	2.0	276.9	"						
104	12.8	6.1	1.8	204.2	"						
105	12.6	9.0	1.7	195.9	"						

石鐵、錐、スクレーパー、磨石等計測表(1)

No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さ g	備考	No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さ g	備考
103-1	4.1	1.3	0.7	4.9	石 鐵	36	1.5	1.3	0.3	0.5	石 鐵
2	3.7	2.1	0.4	3.1	石 鐵	37	2.1	1.8	0.4	1.3	石 鐵
3	3.1	2.4	0.7	3.8	石 鐵	38	2.4	1.8	0.4	0.8	石 鐵
4	2.6	2.2	0.6	2.4	石 鐵	39	2.3	1.4	0.3	1.0	石 鐵
5	2.8	2.1	0.4	1.7	石 鐵	40	2.2	1.6	0.4	0.9	石 鐵
6	2.9	1.6	0.4	1.2	石 鐵	41	2.0	1.7	0.3	0.6	石 鐵
7	3.1	1.6	0.5	2.2	石 鐵	42	2.2	1.3	0.4	0.8	石 鐵
8	2.5	1.9	0.4	1.6	石 鐵	43	2.1	1.6	0.5	1.0	石 鐵
9	2.5	1.8	0.4	1.3	石 鐵	44	2.5	1.8	0.3	1.3	石 鐵
10	2.5	1.8	0.4	1.1	石 鐵	45	1.8	1.4	0.2	0.4	石 鐵
11	2.4	1.7	0.4	1.3	石 鐵	46	1.6	1.2	0.4	0.4	石 鐵
12	2.6	1.3	0.3	1.0	石 鐵	47	2.0	1.4	0.3	0.6	石 鐵
13	2.8	1.7	0.5	1.8	石 鐵	48	2.0	1.2	0.2	0.6	石 鐵
14	2.4	1.8	0.4	1.4	石 鐵	49	2.2	1.7	0.4	1.4	石 鐵
15	2.4	2.0	0.7	3.4	石 鐵	50	2.1	1.1	0.3	0.6	石 鐵
16	2.6	1.7	0.5	2.0	石 鐵	51	2.9	1.8	0.5	2.3	石 鐵
17	1.9	1.6	0.3	0.7	石 鐵	52	2.8	1.8	0.3	1.1	石 鐵
18	2.0	1.3	0.2	0.4	石 鐵	53	2.5	1.9	0.4	1.4	石 鐵
19	1.8	1.5	0.4	0.7	石 鐵	54	2.0	1.7	0.3	1.0	石 鐵
20	2.0	1.4	0.2	0.8	石 鐵	55	1.8	1.4	0.3	0.8	石 鐵
21	1.9	1.5	0.3	0.6	石 鐵	56	1.3	1.2	0.2	0.4	石 鐵
22	1.6	1.5	0.3	0.5	石 鐵	57	2.0	1.2	0.2	0.4	石 鐵
23	2.2	1.6	0.3	0.9	石 鐵	58	1.6	1.1	0.3	0.4	石 鐵
24	2.5	1.4	0.5	1.5	石 鐵	59	1.8	1.6	0.3	0.5	石 鐵
25	2.5	2.0	0.5	2.0	石 鐵	60	1.7	1.2	0.2	0.2	石 鐵
26	1.9	1.7	0.4	1.2	石 鐵	61	1.9	1.4	0.5	0.9	石 鐵
27	2.3	1.7	0.2	0.9	石 鐵	62	1.3	0.9	0.3	0.3	石 鐵
28	2.1	1.5	0.3	0.7	石 鐵	63	1.4	1.1	0.4	0.3	石 鐵
29	1.6	1.3	0.3	0.6	石 鐵	64	1.7	1.6	0.3	0.7	石 鐵
30	2.1	1.5	0.4	1.0	石 鐵	65	2.9	2.6	0.8	6.3	石 鐵
31	2.8	2.8	0.5	4.2	石 鐵	66	2.4	1.5	0.4	0.8	石 鐵
32	1.8	2.1	0.4	1.5	石 鐵	67	2.5	1.3	0.2	0.6	石 鐵
33	3.2	1.1	0.3	1.2	石 鐵	68	1.7	1.3	0.3	0.5	石 鐵
34	2.2	1.7	0.5	1.3	石 鐵	69	2.1	1.9	0.4	0.7	石 鐵
35	2.2	1.5	0.6	1.6	石 鐵	70	1.9	1.6	0.4	0.9	石 鐵

石鐵、錐、スクレーパー、磨石等計測表(2)

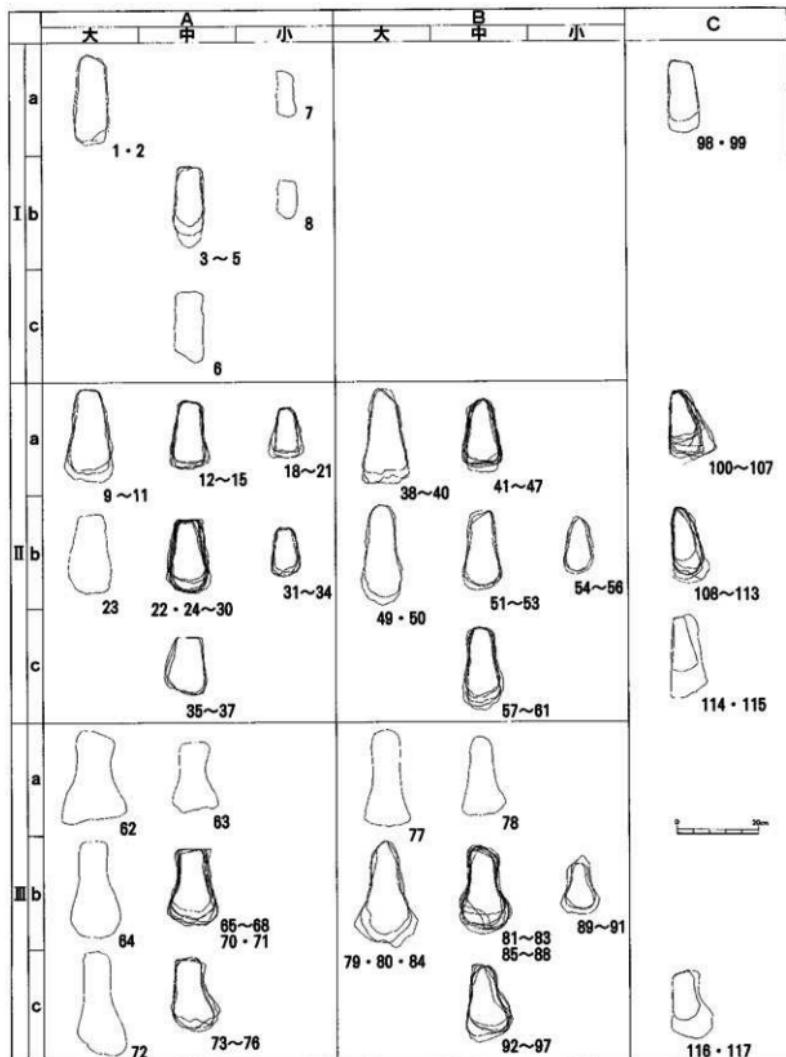
No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考	No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考
71	2.3	1.9	0.4	2.0	石 鐵	31	3.4	1.2	0.3	1.3	両極剥片
72	2.2	2.0	0.6	1.8	石 鐵	32	3.9	1.4	0.3	2.0	両極剥片
73	2.1	1.6	0.4	0.8	石 鐵	33	2.8	1.0	0.4	0.9	両極剥片
74	2.5	1.9	0.8	3.0	石 鐵	34	4.2	5.8	3.2	29.9	小型剥片の石核
75	2.4	2.6	0.8	3.8	石 鐵	35	4.6	4.9	1.2	45.4	楔
104-1	4.1	1.4	0.5	2.6	石 锥	36	5.0	4.1	0.7	18.2	楔
2	3.7	2.1	0.4	1.8	石 锥	105-1	6.1	8.9	1.4	84.7	削 器
3	3.9	1.9	0.8	3.9	石 锥	2	4.4	8.6	0.8		スクレイパー
4	4.2	1.2	0.4	1.8	石 锥	3	8.4	3.6	0.9	27.0	削 器
5	3.7	1.5	0.5	2.1	石 锥	4	9.6	4.0	1.2	45.3	削 器
6	3.5	1.2	0.6	2.1	石 锥	5	4.2	2.6	0.8	6.7	削 器
7	3.6	1.5	0.7	2.2	石 锥	6	2.5	4.0	0.6	5.8	スクレイパー
8	3.9	1.3	0.8	3.2	石 锥	7	4.2	5.9	0.8	18.5	スクレイパー
9	4.5	1.8	0.9	5.8	石 锥	8	7.0	5.3	1.1	34.6	削 器
10	3.5	1.0	0.5	1.7	石 锥	9	6.4	7.0	1.1	29.0	削 器
11	1.4	2.0	0.7	2.0	石 锥	10	5.4	4.5	0.8	15.7	削 器
12	2.0	1.1	0.4	0.5	石 锥	11	8.3	4.6	1.7	76.1	削 器
13	4.0	2.4	0.8	5.9	石 锥	12	5.4	4.9	0.9	23.8	スクレイパー
14	3.1	1.3	0.5	2.1	石 锥	106-1	10.3	4.5	0.9	40.8	石核未製品
15	2.6	1.1	0.4	1.5	石 锥	2	9.5	4.1	0.9	42.3	石核未製品
16	4.9	1.2	1.0	4.7	異形石器	3	6.8	3.3	1.1	19.8	石核未製品
17	6.4	2.1	1.3	13.3	異形石器	4	9.0	4.9	0.7	34.9	石核未製品
18	4.3	2.5	1.0	12.1	異形石器	5	6.2	4.2	1.3	35.1	石核未製品
19	1.5	2.2	0.5	1.6	異形石器	6	4.7	2.8	1.0	15.1	石核未製品
20	3.7	2.3	1.3	7.2	押 庄 異	7	4.5	3.5	2.1	25.2	石 核
21	3.2	1.8	1.0	6.5	押 庄 異	8	3.6	6.3	0.9	19.3	石核未製品
22	3.2	2.1	1.3	4.8	押 庄 異	9	9.9	8.3	1.9	159.6	剥 片
23	3.0	2.5	0.9	5.3	押 庄 異	10	6.3	3.1	0.9	11.8	剥 片
24	1.4	0.8	0.5	0.8		11	2.7	3.7	1.3	10.5	剥 片
25	5.2	3.5	0.9	13.2	両極剥片	12	2.9	4.2	0.7	8.4	剥 片
26	3.1	2.5	0.7	5.2	両極剥片	13	7.6	6.4	1.2	61.4	剥 片
27	2.1	2.4	0.7	2.9	両極剥片	14	5.9	5.4	1.4	41.8	剥 片
28	2.8	1.9	0.3	1.4	両極剥片	107-1	10.0	11.6	4.7	619.7	大形複形石核
29	1.6	1.9	0.4	1.5	両極剥片	2	9.8	10.5	4.5	414.3	石核スクレイパー
30	3.6	1.9	0.3	2.0	両極剥片	3	6.1	5.1	5.1	187.8	石核用ハンマー

石鎚、錐、スクレーパー、磨石等計測表(3)

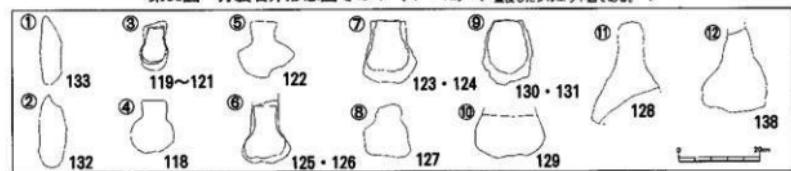
No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考	No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考
4	5.2	6.8	5.5	205.2	ハンマー	8	9.3	8.3	4.0	425.5	磨石
5	8.9	7.5	5.9	545.7	ハンマー	9	9.8	7.5	4.6	481.3	磨石
111-1	7.0	7.7	0.7	65.2	石庖丁	10	11.1	8.5	3.0	348.7	磨石
2	4.8	7.4	0.5	30.0	石庖丁	11	11.2		5.3	1013.1	磨石
3	5.0	7.0	0.5	28.0	石庖丁	12	8.6	10.8	4.6	653.1	磨石
4	6.7	4.5	0.7	39.2	石鎚	116-1	8.3	10.1	5.7	790.8	磨石
5	9.0	2.4	0.6	16.6	石錐	2	8.3	9.5	4.9	601.9	磨石
6	8.0	3.0	2.3	93.5	石斧	3	11.2	7.6	6.0	805.3	磨石
7	5.9	8.3	1.3	91.7	石斧	4	10.9	7.5	4.9	627.0	磨石
8	5.1	6.0	1.4	54.8	石斧	5	7.9	11.4	5.9	870.1	磨石
9	7.4	6.0	1.3	116.2	石斧	6	10.2	11.4	4.1	688.1	磨石
114-1	18.2	6.3	3.3		石棒	7	13.4	9.1	5.9	1192.9	磨石
2	10.6	6.8	4.3		石棒	8	11.0	9.0	4.1	676.9	磨石
3	8.4	6.4	7.1	496.5	石冠状石製品	9	7.2	10.6	5.2	620.6	磨石
4	6.5	5.2	4.2	187.8	石錐	10	9.6	11.8	3.2	630.9	磨石
5	6.0	5.9	0.9	56.3	石錐	11	11.4	9.6	4.4	779.7	磨石
6	6.1	6.7	2.3	119.0	石錐	12	7.4	12.0	5.7	817.5	磨石
7	7.3	7.2	1.9	132.1	石錐	13	9.5		3.4	445.1	磨石
8	8.2	9.2	1.8	245.7	石錐	14	10.9	7.8	4.0	542.2	磨石
9	6.7	7.5	1.7	96.0	石錐	15	6.8	6.6	6.1	416.5	磨石
10	7.5	5.7	1.5	104.7	石錐	16	8.9	11.8	6.2	1004.6	磨石
11	8.5	7.1	1.1	109.9	石錐	117-1	10.8	9.3	4.6	689.2	磨石
12	10.8	10.1	1.2	155.7	石錐	2	10.1	8.4	2.9	370.5	磨石
13	5.9	4.4	1.7	73.6	石錐	3	10.5	7.1	4.7	630.5	磨石
14	7.2	3.4	1.3	55.1	石錐	4	14.6	11.0	7.3	1434.0	磨石
15	5.5	4.4	2.2	58.5	石錐	5	9.5	7.5	4.1	360.1	磨石
16	4.8	5.0	2.1	87.8	石錐	6	13.4	11.3	6.7	1336.9	磨石
17	6.8	3.5	2.5	87.0	石錐	7	11.9	10.1	3.3	627.3	磨石
115-1	9.0	10.7	6.3	1026.3	磨石	8	11.9	6.5	7.1	826.2	磨石
2	11.8	10.0	2.9	375.0	磨石	9	7.5	12.7	7.6	990.4	磨石
3	7.9	10.6	5.6	900.2	磨石	10	17.7	9.8	6.9	1739.2	磨石
4	9.7	9.4	3.4	354.8	磨石	11	12.6	8.5	4.1	727.0	磨石
5	11.0		7.9	1347.9	磨石	12	13.3	9.5	6.0	1211.3	磨石
6	8.0	10.0	3.4	453.0	磨石	118-1	17.0	11.1	5.8	1411.3	磨石
7	12.5	11.4	3.0	650.4	磨石	2	13.4	10.7	6.5	1133.6	磨石

石鎚、錐、スクレーパー、磨石等計測表(4)

No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考	No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	備考
3	9.5	11.9	7.4	1240.5	磨石	120-1	51.0	20.1	13.2	21.8	石皿
4	14.0	10.5	2.7	679.8	磨石	2	47.3	32.7	11.1	20.5	石皿
5	8.4	12.0	2.9	483.5	磨石	3	19.4	26.7	8.2	6.5	石皿
6	10.9	12.2	4.1	1360.9	磨石	4	36.6	37.8	10.4	13.5	石皿
7	9.2		4.0	490.1	磨石	5	50.1	26.2	7.4	16.2	石皿
8	10.9	8.8	2.9	364.1	磨石	6	18.1	42.8	11.1	13.5	石皿
9	7.7	5.3	5.1	279.0	磨石	7	12.4	11.7	9.6	2.9	石皿
10	9.2	11.5	6.2	981.4	磨石	8	15.5	11.8	10.9	3.0	石皿
11	6.1	7.5	3.2	209.5	磨石	9	14.5	14.7	8.3	2.5	石皿
12	9.1		6.0	667.1	磨石	10	21.7	18.9	6.7	3.5	石皿
13	9.7	8.5	4.0	490.9	磨石	121-1	50.4	34.0	5.2	11.3	石皿
14	7.4	6.8	6.1	411.6	磨石	2	23.3	33.1	3.8	3.6	石皿
15	7.7	9.8	6.2	531.8	磨石	3	30.6	19.0	4.0	5.0	石皿
16	9.2	8.1	4.1	394.0	磨石	4	24.8	17.5	5.0	2.5	石皿
17	12.9	9.7	4.4	810.4	磨石	5	30.0	49.9	5.4	10.0	石皿
119-1	14.1	13.5	4.2	1333.6	磨石	6	29.9	25.4	4.5	1.2	石皿
2	9.7	10.2	3.6	542.3	磨石	7	14.9	20.4	6.1	2.9	石皿
3	11.4	15.4	3.2	812.6	磨石	8	24.4	14.0	5.7	3.2	石皿
4	12.6	11.5	2.9	530.5	磨石	9	20.6	34.1	6.1	5.3	石皿
5	11.3	9.6	4.0	1039.7	磨石	10	12.7	8.4	6.7	1.0	石皿
6	10.5	8.5	5.9	741.9	磨石	11	16.8	14.8	7.0	2.6	石皿
7	16.6	6.6	5.6	875.0	磨石	12	24.6	13.0	6.5	3.3	石皿
8	16.3	6.3	4.1	796.4	磨石	13	17.1	19.0	5.5	2.3	石皿
9	12.7	5.8	5.3	513.8	磨石	14	21.8	26.5	5.9	4.5	石皿
10	16.7	5.2	2.3	279.9	磨石	15	12.6	24.1	4.6	2.4	石皿
11	14.0	6.8	2.5	304.5	磨石	16	19.5	18.1	4.1	2.0	石皿
12	13.1	6.9	3.8	571.3	磨石	17	21.2	21.0	3.9	2.7	石皿
13	15.0	4.6	3.5	313.3	磨石						
14	12.9	4.2	3.7	323.0	磨石						
15	11.5	5.1	4.7	394.4	磨石						
16	11.7	4.4	2.8	205.1	磨石						
17	11.6	4.9	2.1	212.7	磨石						
18	12.0	5.0	1.4	143.6	磨石						
19	10.7	3.5	2.6	143.9	磨石						
20	9.7	5.4	1.9	133.9	磨石						



第36図 打製石斧形態図その1 (1:12) (※これは裏面に関係なく、対称性を重視したシルエット図である。)



第37図 打製石斧形態図その2 (1:12) (秦同上)

V-1 三田谷I遺跡出土縄文・弥生移行期 土器群の諸問題

小林青樹・岡田憲一・下江健太

はじめに

三田谷I遺跡出土土器は、縄文・弥生移行期である、縄文後期後半から縄文晚期後半と弥生時代前期前半までの土器群がまとめて出土した。近年、島根県を含めて山陰地域では該期の資料が増加しており特に晚期の土器研究の転換期にある。本考察では、以上の土器群に関し2つの問題を検討した。まず第1点目は、後期末から晚期後半にまで長期間残存した土器文様の問題で、主に近畿地方と北陸方面の土器群との比較である。

第2点目は、本遺跡出土土器の大半を占める突帯文土器についてである。晚期後半から弥生時代前期併行期にまでわたる突帯文土器と無刻口突帯文土器の編年的位置付けを試みた。

以上を踏まえつつ、最後に縄文から弥生への移行期の三田谷I遺跡出土土器について総括した。なお、本稿は、小林・岡田・下江の共同執筆であり、Iを岡田が、IIを下江が、そしてIIIを小林がそれぞれ執筆したことを探しておいた。

I 三田谷I遺跡出土土器文様をめぐる問題

1 「三田谷文様」について

一般的に「北陸系」および「近畿系」と呼称されることの多い有文土器が本遺跡からは出土している。後者については従来より「樅原式」としてしられる文様を施すことより抽出される一群であって、当地域においても板屋III遺跡、口朝金遺跡などの調査により、若干量ではあるが組成することが明らかとなってきた。一方、前者については、管見に触れる限り列島最西端例となる。以下にその特徴と位置づけについて論じよう（註1）。

(1) 「北陸系」土器の原理

少なくとも3個体になる本遺跡出土の「北陸系」土器は、水平に巡る平行沈線間の中央沈線1本の各所に空間を設け、その間に縦位の短沈線を数本配し、その外側、つまり中央沈線に接する部分を三角形に削り込むように拡張する点で、その他の土器と相対化され、北陸西部地域における八日市新保2式ないし御経塚1式との類似が指摘される（註2）。そもそも図1-7にみるような八日市新保2式の一角形削込は、井口式で発達した平行水平沈線を寸断する意匠が、沈線と連結して変化したものである。しかしながら、7の波頂部にあるような縦位に「I」字となるような意匠は、先の論理からは派生しない。それゆえ、この両者の駁別される必要から、前者を「横位連結三角形削込文」、後者を「縦位連結三角形削込文」と呼称する。

本遺跡出土例にみられる三角形削込文には両者ある。同図18はその同居例であるが、横位、縦位が十字に交差し、それぞれの先端が求心的に意匠を構成するもので、八日市新保式や御経塚式にはなかなか認められない。横位連結三角形削込文の13や16には特別な違和感こそないものの、本頃地のものに対しては粗雑な印象を受ける。しかし、北陸にもないわけではない。ただ、13にみるよう

な縦位短沈線部分の斜線充填例は多くはなかろう。それぞれ器種を復元すると、口縁内轉する椀形浅鉢¹³と、内に傾く頸部から若干外屈するように口縁部の立ち上がる浅鉢（14、18）となる。椀という器種については各地域に認められる特徴の少ないもので、その異同については論じがたいが、後者のような器形は当該期の北陸には認め難いものであり、その異質性が際立つ。両例におけるその施文位置は、それぞれ口縁部、頸部となるが、両者とも内彎ないし内傾して斜上方に文様帶をみせる点で視覚的に共通する。これは北陸の平縁浅鉢等についても指摘できることで、皿形の体部より内屈して立ち上がる口縁部外面に配されるのが当文様である。

以上、本遺跡出土の「北陸系」土器と本頃地のものとの異同を述べてきた。比較にあたっては、一定量の北陸系土器の組成する近畿北東部地域の資料を掲げたが、当地では波状口縁浅鉢または平縁浅鉢が専らで、その口縁部に文様帶が配される。本遺跡例と当地域の文様にみる類似性を積極的に評価するならば、斜上方にみせる平縁浅鉢の文様帶を媒介として本遺跡の「北陸系」土器が成立したと解釈することができよう。その時期は湖西線関連調査時の滋賀県・滋賀里遺跡における層序に基づくならば、滋賀里ⅠないしⅡ式と八日市新保2式の取り結ぶ年代となる（註3）。

（2）樅原式文様と北陸系文様

樅原式文様は概ね滋賀里Ⅱ式の範疇で理解されるもので、滋賀里Ⅲa式以降には共伴しない（岡田 1998）。本遺跡からの出土2例（報告書中第1図27、29）は、内彎気味の波状口縁浅鉢で、大塚連邦氏の「樅原段階」に比定されるものとなろう（大塚 1995）。九州から関東・東北南部までその広がりが指摘されており（大竹 1983、鈴木 1985）、本例もその一翼を荷う。しかしながら、その分布の重心は明らかに近畿にある。一遺跡から出土する相対的多さと意匠の多様性は、その生成を当地で跡付けるのに十分であろう。文様意匠の成立自体は東日本との関係で説明する論法が妥当であるが、その負荷される器種が、滋賀里Ⅰ式以降組成するようになる黒色磨研系浅鉢を主体と

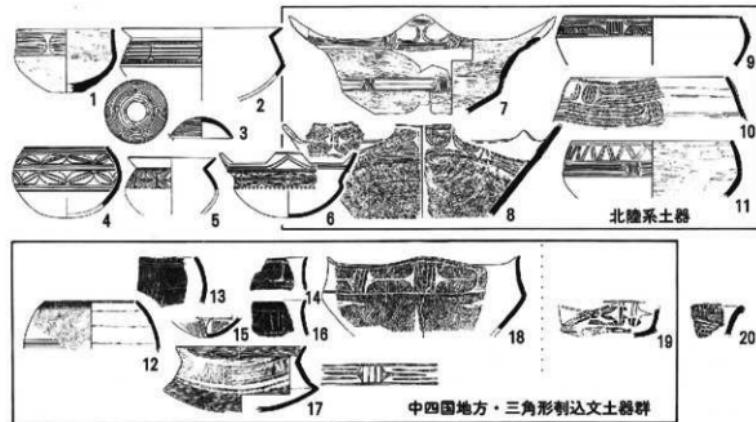


図1 「北陸系」文様と樅原式文様

1. 7. 10. 11弘部野（滋賀） 2～6樅原（奈良） 8森添（三重） 9滋賀里（滋賀）
12. 17三谷（徳島） 19古海（鳥取） 他は三田谷 I
縮尺1/7

する点は注意されるべきで、その器種の成立が九州中央部に求められることをも背景として取り込めば、近畿より東西広域にわたる当文様の展開については理解が容易になる。この手の文様が深鉢に施文される例は徳島県・稲持遺跡の事例を除いては知らない（註4）。同様の浅鉢各器種に施文しながらも、深鉢にも同様の意匠が負荷されるものに弧線文、山形文があるが、その意味では、樅原式文様より規範の緩い文様体系であったといえよう。

樅原式文様については、「沈線、刻み目、三角形くり込み」を文様構成要素とし、「陽刻文様帶」表現をとるとする丹羽佑一氏の定義があるが（註5）、さらに重視すべきは文様構成が縦横に変動しうる充填文様であるという点である。すなわち、三角形削込はそもそも縦位連結するもの（第1図1、2）から派生しつつも、その縦取りは弧をなして横位に連繋して分断化、その一帯の木の葉形に縁取られた陽刻部分には、山形文に通じる意匠が印刻されて展開する（4、5、6）。したがって、文様の系譜は先の北陸系土器にみた縦位連結三角形削込文から説明が可能であるが、それが北陸の論理下にないことをもってすれば、大塚氏の広域にわたる視座が妥当で、上下相対対向する二角形削込に展開する樅原式文様、横位連結三角形削込文を基調に、区画手法として縦位連結を組み込む北陸系文様として相対化が図れよう。

（3）中四国地方における三角形削込文土器群

本遺跡からは、「北陸系」土器、樅原文上器ともに出土をみたが、この両者のここにいたるまでの背景を同一視するわけにはいかない。特に前者については、先に異同を指摘したが、18等は北陸系文様における縦位連結三角形削込文のあり方と異なっており、むしろ樅原式文様の論理に近い。これを折衷と言ってしまえばそれまでであるが、負荷される器形を鑑みるとならば、濱田竜彦氏による古市河原田式、浅鉢A1c類（濱田 1999a）に類するものと考えられる。突如、後期末晩期初頭より晩期終末に年代が下ったが、鳥取県・古海遺跡出土の有文浅鉢類は、縦位・横位連結三角形削込文を組み合わせて類似したもので、古市河原田式に後続の古海式に作出する。さらに古海例は、濱田氏により徳島県・三谷遺跡出土資料77と文様の類似が指摘され（濱田 1999b）、それには凸帯文深鉢のはか遠賀川系土器が共伴する（註6）。これらはいずれも横位連結三角形削込文を基調とするもので、先の「北陸系」文様に相当するが、北陸の当該文様とは年代および分布域が異なることは明らかで、その名称は適切ではない。筆者はこれらの類「北陸系」文様を「三田谷文様」と呼称したい。三田谷文様は、先の共伴関係からも明らかなように年代幅を有している。三田谷例18、古海例19、三谷例17と配列可能であれば、そこには縦位連結二角形削込文の退縮と、横位連結二角形削込文の横位断絶、そしてその対応する底辺間の縦位短沈線数の減少過程が認められよう。また、器形の面でも14や18の浅鉢口縁部が、16を介し、17の強く外屈するものに変化すると考えられる。17に類似の器形は家根祥多氏の長原式浅鉢A1類にある（家根 1982）、17の口縁部外反はより強く新しそうである。以上を統じると、三田谷文様を有する浅鉢は、14、15、18から16、19を経て17へと3段階の変化を追え、深鉢にもとづく編年観にも対応しそうである。

古海例19の器形は他と異なり、屈曲部が突出し、横長「O」字状の凹みがみられる。この系譜は配置位置にこそ問題があるものの、東日本の眼鏡状付帯文に求めるのが適當であろう。古海式は編年的に長原式に併行すると考えられることから、人洞A式後半との併行関係が敷延され、矛盾はなかろう。それに先行すると考えられる三田谷例18は、人洞A式前半に併行関係が求められよう。当該期は小林青樹氏によって集成された東日本系上器分布傾向の第3段階にあたり、西日本における

その急増が指摘されている（小林 1999）。特に本稿で縦位連結三角形刻込文としたものは、氏の重視する「I字文」にはかならない。したがって、三田谷文様の成立背景は、これで概ね見当がつこう。すなわち、例込文の縁取り沈線が、横向き弧線として入子状に配置されており、ボジに見た場合の流水文の一部を構成しているのである。これは深澤芳樹氏の指摘に通ずる（深澤 1989）。

三田谷文様と異なる二谷例12は、17の包含される自然凹地より若干古い傾向ありと指摘されたSX01出土のもので、権原式文様に極似する。上下交互の三角形刻込文間に弧線で連繋するあり方は、上記した権原式文様の論理からすれば矛盾ないもので、それが縦位・横位連結三角形刻込文から派生したものであることを考えれば、三田谷文様の初期のものから派生してもおかしくない。これは鈴木加津子女史によって説かれた「続権原式」（鈴木 1993）とは異なるもので、「類権原文」とでも呼ぶしかなかろう。もちろん、社会的背景を考慮した小林氏の土器文様の回帰現象説（小林 1999）は否定されるものでなく、この対象が上記の権原式文様であるからこそ、むしろ魅力的ですらある。

以上、晩期終末の中四国地方三角形刻込文上器群を概観した。近年の大塚氏は権原式文様と木葉文との間の系譜関係に徹底否定の論陣を張る（大塚 1995）。確かにその論理は妥当である。しかし、弥生文化に払いのけられてしまった木葉文は、そのまま抛り所なく水辺に漂ってしまうのか。日本史という枠組みの中において生成した直接的系譜論への事象的否定がようやく一般化した現在こそ、具体的資料に即して再考する必要があるように思われる。その動態へのまなざしを二田谷氏は要請している。

（岡田憲一 2000年2月14日稿了）

II 突帯文土器について

1. 突帯文上器群の分析

今回の三田谷I遺跡の調査では、包含層から縄文時代後・晩期～弥生時代前期の土器が多量に出土した。このうち突帯文上器が約300点、弥生時代前期初頭に比定される遼賀川式（系）土器が約30点ほど出土している。包含層出土資料であり、時期幅も広く、一括性に乏しいが、これほどの量の突帯文土器は県内において例が少なく、これらの土器を型式学的に分類し、その傾向を示すことにも意義があると考えられる。そこで、小考では三田谷I遺跡出土の突帯文上器の様相を明らかにし、最近、濱田竜彦氏を中心に進められている山陰地方における当該期の編年研究（濱田 1999a、1999b、2000）と比較することで、その時間的位置付けを行う（註7）。

a 深鉢の分類

深鉢の分類は既に事実報告の段階で行っているので、ここでは分類の基準などは省略する。分析の対象とした深鉢の総数は、器形の判別していない29点を除く279点であり、全体の90.6%にあたる。なお分類の基準と各類型との関係、また数量、比率を表1に示している。

表1から読みとれる当遺跡における突帯文上器の特徴としては刻目突帯E類、G類が多いことが挙げられ、それぞれ刻目突帯の中で44.0%、18.5%、全体の36.6%、15.4%を占める。無刻目突帯ではD類が多く、無刻目突帯の中で63.8%、全体の10.7%を占める。これらの土器はいずれも口縁端部に刻目を持たず、刻目突帯G類、無刻目突帯D類の器形が砲弾形であり、突帯文上器の中でも比較的新しい様相の上器であろう。刻目突帯E類、G類は濱田氏の編年「出雲V期」（濱田 1999b）によくみられる型式のものであるが、無刻目突帯D類のように器形が砲弾形で突帯を口縁端部に接して巡らせる型式は、「山陰VI期」（濱田 1999b）に比定される島根県石台遺跡（川原

1984、柳浦・守岡編1993)によくみられ、当遺跡の突帯文土器の大半はこれらの時期に属すると考えられる。この他に突帯文土器の中でも古相を示す刻目突帯A類や、形態においては無刻目突帯D類と類似している刻目突帯H類が一定量含まれている。2条突帯は刻目突帯15点、無刻目突帯1点の計16点が確認されている。全体の中では5.7%を占め、一般に2条突帯がほとんどみられない山陰地方沿岸部と様相がやや異なるが、山間部に位置する島根県森III遺跡SD02からは沢田式並行期の2条突帯が多く出土しており(山崎 1995)、当遺跡の2条突帯の様相もこうした山間部、または瀬戸内地方との繋がりの中で捉えられよう。無刻目突帯A類、B類の中に突帯付近で強く外反するものがあるが、これらは肩曲する刻目突帯の中でも同じように突帯付近で強く外反するものと関連があると考えられ、無刻目突帯の中では比較的古い様相を示すのではないかと思われる。

頸部調整に関しては表2・3で示している。古相を示すと考えられる刻目突帯A類の頸部外面で14.3%、頸部内面で20.0%が貝殻条痕調整であり、このうち内外面ともに貝殻条痕調整を施すものは3点確認される。ヘラナデを施すものは頸部外面で20.0%、頸部内面で22.9%であり、内外面ともにヘラナデを施すものは5点確認される。この他はナデを施すものが内外面ともに大半である。これに対して新相を示すと考えられる刻目突帯E類では、貝殻条痕調整を施すものが、頸部外面で32.4%、頸部内面で33.3%であり、このうち内外面ともに貝殻条痕調整をほどこすものは20点確認される。ヘラナデを施すものは頸部外面で11.8%、頸部内面で16.7%であり、このうち内外面ともにヘラナデを施すものは3点確認される。この他、内外面に擦痕が残るものが一定量認められる。一般に貝殻条痕調整は、瀬戸内地方などでは古い様相を示すと考えられるが、出雲では、単純にそのような変化を示すわけではないようである(註8)。しかし、同じように突帯文土器の新相を示すと考えられる刻目突帯C類では、貝殻条痕調整を施すものが頸部外面で16.3%、頸部内面で23.3%であり、内外面ともに貝殻条痕調整を施すものが4点確認されており、条痕調整を施すものが若干少なくなっている。この他の砲弾形の器形を呈する刻目突帯C類のうち、ナデ調整を施すものは頸部外面で88.9%、頸部内面で77.8%であり、完全にナデ調整が優位になっている。刻目突帯C類とG類との差は、基本的に口縁端部の刻目の有無のみであり、しかも、刻目のある方が古い様相と考えられるため、従来の編年観で言えば、ナデ調整を主体にしている刻目突帯C類の方が古いことになる。刻目突帯C類は数量的に全体の3.2%ほどしかないため、刻目突帯G類との比較は妥当とは言えないかもしれないが、少なくとも砲弾形の突帯文土器とナデ調整には密接な関係があるものと思われる。

これに対して、無刻目突帯に関してはほとんどが内外面ともにナデ調整であり、擦痕が見られるものも一定量確認される。山陰地方の地域色の一つである無刻目突帯は沢田式並行である「古市河原田式」(濱田 1999a)から見られることから、無刻目突帯の成立をそれまでの刻目突帯の刻目がただ単に消失しただけのものとは考えられないであろう。これは、この後「出雲VI期」に口縁端部に突帯を接して巡らせた砲弾形の器形を呈する型式が主体を占めるようになっていくこととも関連する。つまり、それまでの刻目突帯文土器の系譜とは異なる系譜からの影響が見られるという事であり、刻日の消失とも関係してこよう。また、この系譜について砲弾形の刻目突帯文土器との関連も考えられる(註9)。

突帯上の刻目に関しては、基本的に家根祥多氏の分類基準を参考にしている(家根 1982)。ヘラをねかせて突帯に押し当たる刻目で、平面形がD字状を呈すD字、ヘラを突帯に対して垂直に立

一
三

項目	対象疾患	部位	口腔疾患の 発生の有無	発生の位置	数量(個目・複列目別比)		率(全体比)
					個目	複列目	
新月突起等C類	前歯	有	無	無	35(15.1)	35(15.1)	35(12.5)
新月突起等A類	前歯	有	無	無	2(0.9)	2(0.9)	2(0.7)
新月突起等B類	前歯	有	無	無	9(3.9)	9(3.9)	9(3.2)
新月突起等D類	後歯	有	無	無	1(0.4)	1(0.4)	1(0.4)
新月突起等E類	後歯	無	無	無	232(83.2)	232(83.2)	192(38.6)
新月突起等F類	後歯	無	無	無	8(3.4)	8(3.4)	8(3.4)
新月突起等G類	後歯	無	無	無	43(15.9)	43(15.9)	43(15.4)
新月突起等H類	後歯	無	無	無	17(7.3)	17(7.3)	17(6.1)
新月突起等I類	後歯	無	無	無	1(0.4)	1(0.4)	1(0.4)
新月突起等J類	後歯	無	無	無	1(0.4)	1(0.4)	1(0.4)
無新月突起等A類	前歯	—	—	—	—	—	—
無新月突起等B類	前歯	—	—	—	—	—	—
無新月突起等C類	後歯	—	—	—	—	—	—
無新月突起等D類	後歯	—	—	—	—	—	—
無新月突起等E類	後歯	—	—	—	—	—	—
2条支撑	—	—	—	—	—	—	—

4

	D	小D	V	小V	O	小O	I	棒状钢管	圆管	半圆钢管	不圆	合计
切割项目: 宽带型	122(4.2)	6(1.7)	8(22.8)	36(8.6)	0	1(2.9)	0	0	2(5.7)	2(5.7)	0	35(16.1)
切割项目: 宽带型	150(6.0)	0	1(50.0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0(0.0)
切割项目: 宽带型	22(2.2)	22(2.2)	1(11.1)	26(22.2)	0	0	0	0	0	0	0	1(1.1)
切割项目: 宽带型	0	0	1(100.0)	0	0	0	0	0	0	0	0	1(0.5)
切割项目: 宽带型	32(3.1)	1(21.1)	1(24.5)	6(3.5)	5(4.9)	2(2.0)	0	3(2.9)	0	1(1.0)	1(1.0)	1(1.4)(1.7)
切割项目: 宽带型	112(2.5)	1(12.5)	1(25.0)	6(3.5)	0	0	0	0	0	0	0	0(0.0)
切割项目: 宽带型	0	0	1(100.0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0(0.0)
切割项目: 宽带型	10(2.3)	5(1.6)	1(18.6)	0(20.0)	0	0	0	0	0	0	0	0(0.0)
切割项目: 宽带型	0	0	1(100.0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0(0.0)
合计:	572(6.1)	27(7.1)	1(21.4)	32(24.6)	26(1.5)	1(6.9)	0	1(1.9)	3(1.4)	1(3.7)	3(1.4)	35(11.5)(21.7)

卷之三

2

内面温度(度C)					
	販売価格	販売価格	ナデ	ケダ	不明
販賣店A類	720.0	822.8	146(4.0)	112(3.9)	5(14.3)
販賣店B類	(550.0)	(650.0)	0	0	15(50.0)
販賣店C類	1111.1	777.8	0	0	11(11.1)
別目夾D類	0	0	11(100.0)	0	0
別目夾E類	3453.3	718.7	34(33.3)	2(2.0)	15(14.7)
別目夾F類	225.0	0	0	0	225(5.0)
別目夾G類	(923.3)	(9.3)	18(37.2)	0	3(30.2)
別目夾H類	15.9	0	7(41.2)	1(5.3)	8(71.5)
無機目夾A類	0	0	61(60.0)	0	6(6.2)
無機目夾B類	0	0	5(83.3)	0	1(16.7)
無機目夾C類	0	0	4(100.0)	0	4(1.5)
無機目夾D類	26(7)	0	0	0	2(100.0)
無機目夾E類	29(11.0)	0	0	0	2(100.0)
合計	58622.1	12346.8	441(5.5)	49(18.6)	263

62

外因性疾患(原因)					
	原因未明人間	原因未明ヘラナデ	ナデ	ケズ	不明
原因未明人間	61(4.3)	72(0.0)	18(4.3)	0	4(11.4)
原因未明ヘラナデ	0	0	15(5.0)	0	15(50.0)
原因未明ケズ	0	0	6(8.9)	0	1(11.1)
原因未明不明	0	0	1(0.0)	0	1(10.4)
原因未明人間	33(24.4)	21(11.8)	36(27.3)	0	7(51.6)
原因未明ヘラナデ	67(5.0)	0	11(12.5)	0	11(12.5)
原因未明ケズ	7(6.2)	4(9.3)	18(14.3)	1(2.3)	13(36.2)
原因未明不明	0	1(5.9)	6(47.1)	1(3.3)	7(41.2)
原因未明人間	0	0	6(1.0)	0	6(2.3)
原因未明ヘラナデ	0	0	5(8.3)	0	5(8.3)
原因未明ケズ	0	0	3(7.5)	0	3(7.5)
原因未明不明	0	0	2(7.0)	0	2(7.0)
合計	320(22)	24(9.1)	134(51)	3(1.1)	49(18.6)